キャンプ研究

Japan Journal of Camping Study

Vol.22 2019.2

公益社団法人日本キャンプ協会
National Camping Association of Japan

ターポリン・帆布の縫製・高周波ウェルダー加工なら

前田工繊グループ
未来テクノ株式会社

～各種テント・防衛省装備品・海洋土木製品～

http://www.mirai-techno.jp/

東京本社　〒105-0011　東京都港区芝公園2-4-1 芝パークビルA館12F
TEL: 03-6402-5915　　FAX: 03-6402-5916
水沢工場　〒023-0402　岩手県奥州市胆沢区小山字附野71-1
胆沢工場　〒023-0402　岩手県奥州市胆沢区小山字中油池137

キャンプ研究

第 22 巻　2019 年　2 月 15 日発行

目　　次

研究論文

危険な動植物の識別に関する研究 ····· 3
甲斐知彦・畠中彬
大学生を対象とした短期野外教育プログラムの教育効果に関する研究 ····· 9
ー大学生不登校問題に着目してー
川畑和也・築山泰典・福満博隆・橋本和俊

実践報告

組織キャンプのプログラムと教育効果 ····· 19
ー南会津チャレンジキャンプの実践を事例としてー
坂谷充・渡邉仁・福富優・佐藤冬果
中華人民共和国の小学生を対象とした自然科学学習プログラムデザインの検討 ····· 27
西海太介・白濱真友
北海道キャンプ協会が取り組む次世代へのバトンリレー ····· 33
ー次世代野外教育指導者団体「えぞっぷ」ー
徳田真彦・山田憲克・木田貴浩・竹内健人・中村隆・長江孝・長江集子・村上彩奈・山田啓貴
野外教育分野を学ぶ学生ネットワークが果たす新たな「学びの場」としての機能 ····· 39
ー「大学間交流スキーキャンプ」の活動報告ー
徳田真彦・佐藤冬果
子どもの野外体験活動を促進する「鬼ごっこ遊び」の実践とその成果 ····· 45
谷正之
青少年教育施設で発生した冬期の傷病に関する調査報告 ····· 51
青木康太朗
Leave No Trace を意識した、キャンプにおける食器洗いの実践 ····· 59
寺田達也

資　　料

「キャンプ研究」投稿規程 ····· 67
「キャンプ研究」収録題目一覧 ····· 69
「日本キャンプミーティング」発表題目一覧 ····· 75

編集後記

研 究 論 文

研究論文

危険な動植物の識別に関する研究
A Study of the Identification of Dangerous Animals and Plants

甲斐知彦(関西学院大学)、畠中彬(関西テレビ青少年育成事業団)
Tomohiko KAI、Akira HATAKENAKA

Abstract

As a result of analysis about the accidents and near miss in the outdoor activities based on the SHELL model, there were many errors related environmental factors and especially the dangerous animals and plants. That was why I investigated about the identification of dangerous animals and plants by the outdoor activity leaders. Specifically, we presented outdoor activity leaders with pictures of dangerous animals and plants shown in the manual and asked them what they "know." " When you know it, do you think that is dangerous?" " Can you really identify it, when you see it in nature?" The results revealed that the cognitive rate was low. It can be determined that outdoor activity leaders may learn from a book that a plant or an animal is dangerous, but they do not always recognize the dangerous plants or animals when they see it in nature. This trend was remarkable in the young leaders. The result shows useful data for us to examine what kind of education about safety management we need for young leaders in the future.

１．緒言

キャンプを実施する上で安全管理を徹底することはその教育的効果を議論する上で重要である。そして、その取り組みは単に危険を回避することではなく、危険を適切に評価し対処することでキャンプの学びを最大限に引き出し、参加者の成長を促すことにつながると考えられる。しかしながら、キャンプ中の事故はなくなっておらず、参加者やその家族にとって望まない結果を招く事例が後を絶たたず安全管理の徹底は難しい課題といえる。そんな中、高瀬ら [11] は、民間団体が行う自然体験活動中のヒヤリハット事例を分析し、その 82%がヒューマンエラーに起因していると報告している。そのため、指導者としては、ヒューマンエラーについて理解し、対策を講じることがキャンプの安全を考える際の必要条件であるといえる。ヒューマンエラーについて、小松原[8] はそのタイプとして、「ミステイク」「スリップ」「能力の限界」「違反」の 4 つを挙げているが、ミステイクについては「知らないで犯す間違い」であることから、リスクマネジメントとして、事前に何が危険であり、それにどう対処するかを考えておくことが必要と考えられる。また、筆者らは、リスクマネジメントセミナーin 関西 2017 において、これまでに報告された事故事例、ヒヤリハッと事例 53 例を SHEL モデル（SHEL モデルとは、図 1 に示すように、中心の L（本人）と、周囲の S（ソフトウエア）、H（ハードウエア）、E（環境）、L（人）との間の接面に隙間ができたときにヒューマンエラーが発生するとしたモデル [8]）を用いて分類し、ソフ

図 1　SHEL モデル
小松原ヒューマンエラー[6]より引用

表１　調査対象の属性

指導経験	1年目	2年目	3年目	4年目	5～10年目	11～20年目	21年目～
	30名（37%）	18名（22%）	11名（13%）	1名（1%）	6名（7%）	8名（10%）	8名（10%）
立場	CD	MD	PD	MD	GC	MS	その他
	29名（35%）	16名（20%）	3名（4%）	2名（2%）	7名（9%）	16名（20%）	9名（11%）
職業	学生	専門職	ボランティア	その他			
	51名（62%）	16名（20%）	10名（12%）	5名（6%）			
年齢	10代	20代	30代	40代	50代	60代～	
	25名（30%）	37名（45%）	5名（6%）	6名（7%）	5名（6%）	4名（5%）	

※表中の略語は次のとおり、CD：キャンプディレクター　PD：プログラムディレクター　MD：マネジメントディレクター
GC：グループカウンセラー　MS：マネジメントスタッフ

トウエアに関するものが 8 件、ハードウエアに関するものが 14 件、環境に関するものが 21 件、人に関するものが 7 件、そして、本人に関するものが 3 件であり、特に環境との間でのエラーが 21 件と多く発生し、中でも危険な動植物に関連する事例が多いことを報告している[4]。そのため、リスクマネジメントを行う際の第 1 歩となる「危険因子を発見・把握する」を行う上で危険な動植物を正しく識別することは、危険因子を事前に正しく把握し、どう対処するか判断する観点から特に重要であるといえる。しかしながら、近年、特に若年層の自然体験は概して減少しており[7]、直接、動植物に接する機会が減った結果、知識としては知っていても、いざ目の前にしたときにそれが何かを識別することが困難になっているのではないかと予想される。そこで、本報では、野外活動指導者を対象に、動植物の識別状況がどうであるかを評価し、その問題点を議論することを目的とする。

２．　方法

２．１　調査対象

調査対象は、リスクマネジメントセミナーin 関西 2017 の出席者および実行委員が関係するキャンプ団体の大学生リーダーをあわせた 142 名のうち指導者である 95 名であった。分析対象は調査対象 95 名のうち、未記入などのなかった有効回答者 82 名とした。有効回答者は男性 45 名女性 37 名、平均年齢 27.5 歳±13.92 歳であった。また、その他の属性については表 1 に示すとおりであった。なお、本研究は関西学院大学研究倫理規定に基づき実施された。

２．２　調査項目

調査項目は、「自然体験活動指導者のための安全対策読本」[3]「自然体験活動指導者　安全管理ハンドブック」[9] および「野外教育入門」[2] に記載されている危険な動植物のうち、山野にあるもの 24 種とし（表 2）、これらについて、その動植物を「知っているか」、「知っている場合、危険だと思うか」（以下、「危険だと思うか」）、「実際に自然の中で見た場合、識別できるか」（以下、「識別できるか」）をたずねた。また、あわせて性別、年齢、職業、キャンプ場面での立場、野外活動経験年数、野外活動指導経験年数を無記名でたずねた。

表２　調査した動植物

大項目	ムカデ	ハチ				
動植物名	ムカデ	アシナガバチ	オオスズメバチ	キイロスズメバチ	クロスズメバチ	ミツバチ
大項目	ヘビ			吸血類		
動植物名	マムシ	ヤマカガシ	ハブ	アブ	ブユ	ヒトスジシマカ
大項目	クマ		ウルシ類			
動植物名	ツキノワグマ	ヒグマ	ウルシ	ヤマウルシ	ツタウルシ	ヌルデ
大項目	ダニ		ドクガ		ハゼ	
動植物名	マダニ	ツツガムシ	チャドクガ	イラガ幼虫	ハゼノキ	ヤマハゼ

２．３　分析方法

分析は数値を比較するとともに、Excel 統計 Ver.2.21 を使用し、2 群間の母比率の差の検定、相関分析を行い、有意水準としては 5%を判断基準とした。

３．　結果・考察

３．１　調査対象全体からみた傾向

調査対象（82 名）に調査項目とした動植物を「知っているか」「危険だと思うか」「識別できるか」をたずねた結果、表 3 に示すとおりの結果が得られた。なお、各数値は、「知っている

か」は調査対象全員（82 名）を母数とした割合を示し、「危険だと思うか」は前問で「知っている」と答えた者を母数に、そして、「識別できるか」は前問で「危険だと思う」と答えた者を母数にした割合である。表 3 に示すとおり、「知っているか」という設問に対して、大項目では「ムカデ」が 80%と多く、つづいて「ハチ」「クマ」「ヘビ」「ウルシ類」「吸血類」「ダニ類」「ドクガ」「ハゼ類」の順となった。なお、50%を下回ったものは「吸血類」「ダニ類」「ドクガ」「ハゼ類」であった。全体平均は 51%であり、野外活動指導者としてみた場合、必ずしも危険な動植物の認知率が高いとはいえない結果となった。なお、「吸血類」については低い値を示しているが、蚊を「ヒトスジシマカ」として聞いているので蚊という認識がもてず、低い値になったのではないかと考えられる。また、ダニ類については昨今、マダニが話題に上ることが多いにも関わらず、低い認知率であったことに疑問が残る結果であった。一方、「危険だと思うか」といった問いかけに対しては、全体平均で 83%と高く、低いものでも 57%である。このことから危険な動植物を認知している指導者は、それが危険であると認識することがわかる。また、その動植物を実際に自然の中でみた場合、「識別できるか」については、その識別可能者率が全体平均で 40%と低くなっている。このことから、危険な動植物を知識として知っているが、現場での対応に生かしきれない可能性があることが明かとなった。

３．２　性別からみた傾向

性別で指導者を分けて識別傾向をみたものが表 4 である。表に示すとおり、全体傾向として「知っているか」については男性 56%、女性 44%と若干、男性が高いが有意な差は認められず男女差はないものといえる。しかしながら、動植物個別にみると、「オオスズメバチ」「クロスズメバチ」「ツキノワグマ」「ヤマカガシ」「イラガ幼虫」「ハゼノキ」「ヤマハゼ」で男性が有意に高い結果となった（P＜0.05、片側検定）。このことは高見ら [12] が原体験の男女差を指摘していることなどを踏まえれば、野外活動指導者といえども動植物の種類によっては自然体験量に差があり、その差が認知に影響を与えているのではないかと考えられる。また、「危険と思うか」については前項の調査対象全体からみた傾向と変わらず、高い値を示す結果となっ

表３　危険な動植物の識別状況（全体 82 名）

	大項目	知っている	動植物名	知っている	危険である	識別できる
1	ムカデ	80%	ムカデ	80%	83%	58%
2	ハチ	76%	アシナガバチ	79%	80%	50%
3			オオスズメバチ	79%	91%	42%
4			キイロスズメバチ	62%	88%	51%
5			クロスズメバチ	76%	95%	25%
6			ミツバチ	82%	57%	55%
7	クマ	72%	ツキノワグマ	67%	85%	36%
8			ヒグマ	77%	95%	33%
9	ヘビ	57%	マムシ	76%	92%	42%
10			ヤマカガシ	32%	81%	57%
11			ハブ	65%	96%	29%
12	ウルシ類	53%	ウルシ	87%	93%	47%
13			ヤマウルシ	57%	85%	30%
14			ツタウルシ	34%	86%	42%
15			ヌルデ	35%	83%	33%
16	吸血類	41%	アブ	62%	73%	46%
17			ブユ	39%	81%	31%
18			ヒトスジシマカ	21%	59%	50%
19	ダニ	35%	マダニ	59%	94%	29%
20			ツツガムシ	11%	89%	38%
21	ドクガ	26%	チャドクガ	33%	89%	42%
22			イラガ幼虫	20%	94%	47%
23	ハゼ	12%	ハゼノキ	10%	63%	40%
24			ヤマハゼ	13%	82%	33%
			平均	51%	84%	40%

表４　危険な動植物の識別状況（男女別）

動植物名	知っている			危険である			識別できる		
	男（45名）	女（37名）		男（45名）	女（37名）		男（45名）	女（37名）	
ムカデ	84%	76%		82%	86%		68%	46%	
アシナガバチ	82%	76%		81%	79%		60%	36%	*
オオスズメバチ	91%	65%	**	88%	96%		47%	35%	
キイロスズメバチ	67%	57%		83%	95%		60%	40%	
クロスズメバチ	84%	65%	*	97%	92%		30%	18%	
ミツバチ	82%	81%		51%	63%		68%	42%	
ツキノワグマ	76%	57%	*	91%	76%		45%	19%	*
ヒグマ	80%	73%		97%	93%		40%	24%	
マムシ	80%	70%		89%	96%		59%	20%	**
ヤマカガシ	44%	16%	**	75%	100%		60%	50%	
ハブ	69%	59%		94%	100%		38%	18%	
ウルシ	91%	81%		93%	93%		50%	43%	
ヤマウルシ	62%	51%		82%	89%		39%	18%	
ツタウルシ	38%	30%		82%	91%		43%	40%	
ヌルデ	33%	38%		80%	86%		33%	33%	
アブ	62%	62%		68%	78%		63%	28%	*
ブユ	40%	38%		72%	93%		38%	23%	
ヒトスジシマカ	27%	14%		50%	80%		67%	25%	
マダニ	62%	54%		96%	90%		30%	28%	
ツツガムシ	13%	8%		83%	100%		20%	67%	
チャドクガ	40%	24%		89%	89%		38%	50%	
イラガ幼虫	27%	11%	*	92%	100%		55%	25%	
ハゼノキ	16%	3%	*	57%	100%		50%	0%	
ヤマハゼ	22%	3%	**	80%	100%		38%	0%	
平均	56%	45%		81%	90%		47%	30%	

（*：P＜0.05　**：P＜0.01）

た。そして、「識別できるか」については前項と同様に低く、男性が 47%、女性が 30%とともに 50%を下回る結果となった。

３．３　年齢からみた傾向

年齢で指導者を分けて識別傾向をみたものが表 5 である。ここでは、若年層を 20 歳代まで（62 名）、高年層を 30 歳代以上（20 名）としている。全体傾向として、「知っているか」については 20 歳代までが 46%、30 歳代以上が 68%と高年層の値が高く、有意な差を認める結果となった（P＜0.05、片側検定）。動植物個別にみても、18 種において有意な差が認められ（P＜0.05、片側検定）。そのすべてにおいて、20 歳代までに比べ、30 歳代以上が高かった。このことは近年、こどもたちの自然体験量が減っていることが指摘されているが、このような体験量の減少も要因の一つではないかと考えられる結果となった。一方、「危険と思うか」については全体傾向と同様に高い値を示しているが、「アシナガバチ」「ヌルデ」「アブ」「ツツガムシ」に年齢間で有意な差が認められた（P＜0.05、片側検定）。特に「アシナガバチ」「ヌルデ」「アブ」では、若年層に危険であると考える者が多く、高年層を上回った。これは高年層にこれまでの経験上、それらの危険な動植物に遭遇しても、それほど大きな影響はないと考えたのではないかと考えられる。なお、「ツツガムシ」については高年層全員が危険と回答しており、興味深い結果であった。さらに、「識別できるか」については全体傾向として、20 歳代までが 29%、30 歳代以上が 62%となり、高年層では半数以上が現場でその動植物を識別できると答えているのに対し、若年層は半数を大きく下回る結果となり、緒言に記した若年指導者の危険な動植物の識別能力が低いのではないかとする予想を支持する結果となった。

３．４　指導経験年数からみた傾向

指導経験年数で指導者を分けて識別傾向をみたものが表 6 である。ここでは、指導者を指導経験年数 3 年までの者と指導経験年数 4 年以上の者に分けている。これは甲斐の指導者の質的転換点が指導経験年数 3 年程度のところにあるとする主張に基づいている[5)]。全体傾向として、「知っているか」については指導経験年数 3 年までの者が 45%、指導経験年数 4 年以上の者が 67%と指導経験の長い群が高く、有意な差を認める結果となった（P＜0.05、片側検定）。また、動植物個別にみても 15 種において有意な差が認められ（P＜0.05、片側検定）、そのすべてにおいて、指導経験年数 3 年までの者に比

表５　危険な動植物の識別状況（年齢別）

動植物名	知っている			危険である			識別できる		
	～20代（62名）	30代～（20名）		～20代（62名）	30代～（20名）		～20代（62名）	30代～（20名）	
ムカデ	74%	100%	**	80%	90%		54%	67%	
アシナガバチ	77%	85%		85%	65%	*	46%	64%	
オオスズメバチ	77%	85%		92%	88%		34%	67%	*
キイロスズメバチ	56%	80%	*	89%	88%		45%	64%	
クロスズメバチ	73%	85%		98%	88%		23%	33%	
ミツバチ	77%	95%	*	63%	42%		50%	75%	
ツキノワグマ	61%	85%	*	89%	76%		29%	54%	
ヒグマ	71%	95%	*	98%	89%		26%	53%	*
マムシ	71%	90%	*	95%	83%		29%	80%	**
ヤマカガシ	19%	70%	**	75%	86%		56%	58%	
ハブ	61%	75%		97%	93%		19%	57%	**
ウルシ	84%	95%		94%	89%		39%	71%	*
ヤマウルシ	52%	75%	*	91%	73%		14%	73%	**
ツタウルシ	26%	60%	**	94%	75%		27%	67%	*
ヌルデ	35%	35%		91%	57%	*	20%	100%	**
アブ	55%	85%	**	82%	53%	*	39%	67%	
ブユ	31%	65%	**	89%	69%		18%	56%	*
ヒトスジシマカ	13%	45%	**	63%	56%		40%	60%	
マダニ	53%	75%	*	97%	87%		16%	62%	**
ツツガムシ	3%	35%	**	50%	100%	*	0%	43%	
チャドクガ	26%	55%	**	81%	100%		31%	55%	
イラガ幼虫	13%	40%	**	88%	100%		43%	50%	
ハゼノキ	3%	30%	**	100%	50%		0%	67%	
ヤマハゼ	10%	25%	*	83%	80%		20%	50%	
平均	46%	68%	*	86%	78%		29%	62%	

（*：P＜0.05　**：P＜0.01）

表６　危険な動植物の識別状況（指導経験年数別）

動植物名	知っている			危険である			識別できる		
	～3年（59名）	4年～（23名）		～3年（59名）	4年～（23名）		～3年（59名）	4年～（23名）	
ムカデ	73%	100%	**	81%	87%		51%	70%	
アシナガバチ	76%	87%		84%	70%		45%	64%	
オオスズメバチ	76%	87%		91%	90%		34%	61%	*
キイロスズメバチ	54%	83%	**	88%	89%		43%	65%	
クロスズメバチ	71%	87%		98%	90%		24%	28%	
ミツバチ	76%	96%	*	64%	41%	*	48%	78%	
ツキノワグマ	59%	87%	**	91%	75%	*	28%	53%	*
ヒグマ	69%	96%	**	98%	91%		25%	50%	*
マムシ	69%	91%	*	95%	86%		28%	72%	**
ヤマカガシ	17%	70%	**	70%	88%		57%	57%	
ハブ	59%	78%		97%	94%		21%	47%	*
ウルシ	83%	96%		94%	91%		41%	60%	
ヤマウルシ	53%	70%		90%	75%		14%	67%	**
ツタウルシ	25%	57%	**	93%	77%		29%	60%	
ヌルデ	37%	30%		91%	57%	*	20%	100%	**
アブ	53%	87%	**	81%	60%		40%	58%	
ブユ	31%	61%	**	89%	71%		19%	50%	*
ヒトスジシマカ	10%	48%	**	67%	55%		50%	50%	
マダニ	54%	70%		97%	88%		16%	57%	**
ツツガムシ	3%	30%	**	50%	100%	*	0%	43%	
チャドクガ	27%	48%	*	81%	100%		31%	55%	
イラガ幼虫	14%	35%	*	88%	100%		43%	50%	
ハゼノキ	3%	26%	**	100%	50%		0%	67%	
ヤマハゼ	10%	22%		83%	80%		20%	50%	
平均	45%	67%	*	86%	79%		29%	58%	

（*：P＜0.05　**：P＜0.01）

べ指導経験年数4年以上の者が高かった。指導経験年数と年齢の関係をみると、相関係数0.879（P＜0.001 で有意）と相関が高いことから、前項での指摘と同様に、近年のこどもたちの自然体験、すなわち若年層の体験量が減っていることがその原因の一つではないかと考えられる。一方、「危険と思うか」については、全体傾向として差がなかったが、「ミツバチ」「ツキノワグマ」「ヌルデ」「ツツガムシ」で有意な差が認められた（P＜0.05、片側検定）。特に「ミツバチ」「ツキノワグマ」「ヌルデ」では、指導経験年数4年以上の者に比べ、指導経験年数3年までの者に危険であると考える者が多かった。このことは、指導経験年数4年以上の者にこれまでの経験上、それらの危険な動植物に遭遇しても、それほど大きな影響はないと考えたのではないかと考えられ、特に「ツキノワグマ」については経験上、それほど出くわすことはないと考えたためではないかと思われる。また、甲斐ら[6]の「経験の多い指導者はリスク知覚が低く、リスクテイク度が高い」という指摘からもそのことは推察される。なお、「ツツガムシ」については指導経験年数4年以上の者は全員が危険と回答しており、前項の年齢別にみた分析と同様に興味深い結果であった。そして、「識別できるか」については全体傾向として、指導経験年数3年までの者が29%、指導経験年数4年以上の者が58%となった。指導経験年数が豊富な群では半数以上が現場でその動植物を識別できると答えているが、少ない群では半数を大きく下回る結果となっている。以上を踏まえると、指導経験年数からみた結果は年齢別からみた結果と酷似しており、比較的把握しやすい年齢で指導者の動植物識別能力が判断できるのではないかと考えられる。

４．まとめ

本報は野外活動場面での事故やヒヤリハット事例を SHEL モデルに基づき分類した結果、環境因子とのエラーが多く、中でも危険な動植物に関連する事項が多いことから、野外活動指導者の危険な動植物の識別について調査を行った。具体的には、野外活動指導者の入門書に示される危険な動植物を提示し、それぞれについて、「知っているか」「危険と思うか」「識別できるか」をたずねた。その結果、指導者全体でみた場合、認知率は低く、知っている場合は危険と判断できるが実際に自然のなかでその動植物をみた場合の識別率も低いことが明らかとなった。そして、本報では、さらに性別、年齢、指導経験年数の観点から危険な動植物の識別傾向を評価した結果、男女差については個別の動植物で若干差が認められるものの、全体としては認められず、性別によって危険な動植物の識別に差は確認できなかった。一方、年齢、指導経験年数では、認知率は両者とも若年層、指導経験年数の少ない者が高年層、指導経験年数が多い者に比べて低い結果であった。また、危険と認識する点に関しては両者に差は認められず、認知している動植物については危険と認識する割合が高かった。識別率に関しては若年層や指導経験年数の少ない者は高年層や指導経験年数の多い者に比べて低くかった。なお、年齢と指導経験年数には相関が認められたため、この傾向は比較的把握しやすい年齢を基準とした若い野外活動指導者の傾向としてとらえる方がより実用的であると考えられる。したがって、キャンプの安全管理を考える上で若い野外活動指導者の危険な動植物の認知、識別率をいかに向上させるが課題といえる。対策としては根本的に危険な動植物に関する教育を徹底することが考えられるが、自然体験が減少している現代においては、いかによりわかりやすく伝えるが優先されると考えられる。そのため、まずは動植物の細かな特定よりも「ヘビは危ない」「虫は危ない」「植物は危ない」といった意識をもち、逆に安全であると特定できる動植物との触れあいを意識するように教育すべきではないかと考えられる。

【謝辞】

本研究の実施にあたり、多大なるご協力をいただいたリスクマネジメントセミナーin 関西2017 実行委員（松原充典氏、高橋陽介氏、清家球平氏、松田寿春氏、前原卓磨氏、原寛氏、小林光氏、大野智代氏）の皆様に心より謝意を表します。

引用・参考文献

1) 羽根田治（2014）野外毒本新装版、株式会社山と渓谷社
2) 星野敏男、川嶋直、平野吉直、佐藤初雄（2001）野外教育入門、小学館
3) 今井英雄、井上透、小山重幸、濱田崇、星野敏男、壇野清司、北川健司、本木光史、佐藤初雄（2000）自然体験活動指導者のための安全対策読本、（財）日本レクリエーション協会
4) 甲斐知彦（2018）異分野のヒューマンエラー対策をキャンプにどう生かすか？、野外活動指導者のためのリスクマネジメントセミナーin 関西 2017 報告書、リスクマネジメントセミナーin 関西実行委員会、10-12
5) 甲斐知彦（2007）野外活動指導者のリスク知覚について－リスクマップを用いた評価－、身体運動文化論攷第６巻　身体運動文化学会関西支部 115-127
6) 甲斐知彦、高見彰（2009）野外活動指導者のリスクテイク傾向について、第 20 回兵庫体育・スポーツ科学学会大会抄録集、兵庫体育・スポーツ科学学会
7) 国立青少年教育振興機構（2014）青少年の体験活動等に関する実態調査(平成 24 年度調査)報告書、国立青少年教育振興機構、41-45
8) 小松原明哲（2008）ヒューマンエラー第 2 版、丸善株式会社
9) 佐藤初雄、大浦秀樹、石川国広、海野義明、栗原潔、斎藤隆、若林千賀子（2007）自然体験活動指導者安全管理ハンドブック、CONE 地域子ども教室推進事業運営協議会
10) 篠永哲監修（1997）知っておきたいアウトドア危険・有毒生物安全マニュアル、株式会社学習研究社
11) 高瀬宏樹、佐藤初雄、北川健司、三好利和、町頭隆児、伊藤勝則、大嶽和彦（2011）ヒヤリハット調査から見る事故の傾向について－日本アウトドアネットワーク加盟団体への調査から－、日本野外教育学会第 14 回大会プログラム・研究発表抄録集、40-41
12) 高見彰、甲斐知彦、北條勝也、山根伸治、林潤子（2013）分析部会の取組～様々な視点から見た原体験度調査の分析～、兵庫県立南但馬自然学校平成 23・24 年度研究紀要、兵庫県立南但馬自然学校、2-11
13) （財）日本自然保護協会編（1999）野外における危険な動植物、株式会社平凡社

研究論文

大学生を対象とした短期野外教育プログラムの教育効果に関する研究
ー大学生不登校問題に着目してー
The study of educational effects of short-term outdoor education program on university students
- Focusing on the problem of school absenteeism on university students -

川畑和也(福岡大学)、築山泰典(福岡大学)、
福満博隆(鹿児島大学)、橋本和俊(びわこ成蹊スポーツ大学)
Kazuya KAWABATA、Yasunori TSUKIYAMA、
Hirotaka FUKUMITSU、Kazutoshi HASHIMOTO

Abstract

The purpose of this study was to suggestion in the short - term outdoor education program for university students about the solution of school absenteeism. The findings obtained from this program could be summarized as follows:

1) After the program, the participant's scores of the school avoidance emotions and communication skills improved. From this, the short-term outdoor education program was an effective method for university student education.

2) In the comparison between participants and nonparticipants, educational effects differed between school evasive emotions, "skills to get along with friends", "skills to undertake difficulties", "skills to be involved from own". In other words, it was shown that participation experience is more effective for student 's education.

From these results, it was shown that the short-term outdoor education program is an effective method for improving the communication skills and lowering the school avoidance emotion on university students.

Keywords

short-term outdoor education program, school absenteeism, camping, university students

１．緒言

我が国の青少年をめぐる問題として、「中一ギャップ」が大きな問題となって久しい。「中一ギャップ」とは、児童が、小学校から中学校への進学において、新しい環境での学習や生活へうまく適応できず、不登校等の問題行動につながっていく事態であり、環境移行、心身の発達により、生徒たちに大きな期待と不安が生じることが背景としてあげられる[8)]。これらの問題は、不登校問題などの問題行動へと繋がっていくことが危惧され、小中学校の連携や一貫教育を行うなどの様々な対策が行われている[9)]。また、近年では初等、中等教育機関だけでなく、高等教育機関の中でも同様の問題が注目され、

大学生における環境への不適応などで起こる不登校などが問題視されている。これらの問題は、高等学校から大学への進学における問題として捉えることができ、大学生における不登校の問題は、休学や退学の問題を含み、その対策は急務である。文部科学省によって取りまとめられた「平成24年度の学生の中途退学や休学の状況について」の中で、全学生数 2,991,573 人のうち中途退学者の総数は、全体の 2.65%に当たる 79,311 人であり、また休学者の総数は、全体の 2.3%に当たる 67,654 人と、全体の 5%近い学生が中途退学、もしくは休学をしている状況である[10]。しかし、中途退学や休学は突発的に起こるものではなく、不登校傾向が見られ、不登校となり、最終的に、中途退学や休学を希望する学生が増加すると考えられる。

不登校問題に関する先行研究の中では、大学生の不登校傾向は、「メンタルヘルス」、「適応」、「対人関係」などといった心理的特性と関連性を持つことが報告され[2]、特に、現在の大学生における対人関係は、話をしたり一緒に遊んだりする友人は多いが、悩みを相談する友人や議論する友達は少ない傾向にあることが述べられている[15]。つまり、新しい環境での生活にうまく適応できていない学生の様子が伺える。

このような背景のもと、各大学では不登校予備群である学校不適応学生に対し、様々な予防的アプローチを行なっており[1),7]、特にF大学では「良き学友を作る」、「集団生活の意義を体験する」などを主旨とし、コミュニケーション力の向上や大学への適応を促す場、リフレッシュの場として、学生課主催による1泊2日の「野外教育キャンプ」を実施している。

今日教育手段として行われるキャンプは、個々のキャンプ参加者の身体的、精神的、社会的成長に寄与する、全人的成長を支援するための教育とされ、個人の成長や環境への順応、人間関係を見直す機会が多い事からも不登校問題への有効性は多いに期待されている[18]。これまでのキャンプにおける人間関係に関する先行研究の中で、学校生活への導入時期に行ったキャンプがコミュニケーション力を向上させ、希薄な人間関係を改善させる効果があったこと[14]や、不登校生徒に対して行った 10 日間のキャンプでは、実施後に8割近い生徒が再登校した[5]など、不登校問題を改善する手段としても、キャンプの有効性が明らかにされている。

しかし、大学生における不登校問題に着目した短期野外教育プログラムに関する研究を行なったものはなく、これらを検討することは、登校回避感情(学校に行きたくないという感情)を抑制し、不登校に対する予防的な対応を考える上でも有意義であると考えられる。

そこで本研究は、大学生を対象とした短期野外教育プログラムの効果について、不登校回避感情とコミュニケーション力の変化から、大学生不登校問題を解決する手段としての示唆を得ることを目的とする。

2．対象及び方法

1）対象プログラム

平成29年5月27日～28日の1泊2日の日程にて、大分県にあるF大学九重の杜キャンパスやまなみ荘キャンプ場にて実施されるF大学学生課主催「野外教育キャンプ(以下、本プログラム)」を対象キャンププログラムとする。

キャンププログラムは、冒険教育的要素を含み、全体を通して生活体験的要素を主体としたものである。主な内容としては、初日のテント設営や場内に設置された冒険教育施設を活用した仲間づくりの時間(イニシアチブゲーム)、1日目の夕方から2日目の朝にかけて、カレーコンテストやポイントハイクを実施し、各班で計画的に過ごすオーバーナイトプログラム、2日目はオーバーナイトプログラムの終了後撤収作業を行い、昼食後オーバーナイトプログラム活動報告会としてプログラム中の班の様子をそれぞれ発表する時間を設けた(資料1)。この実習では、4班構成で各班8～10名程度を一つの班とし、それぞれカウンセラーとして、野外教育を専攻する学生を2名ずつ配置した。また、野外教育を専門とする専任教員が全体のディ

資料１　野外教育キャンプ日程表

	1日目 プログラム内容	2日目 プログラム内容
朝	開講式 大学出発 キャンプ場到着	朝食 オーバーナイトプログラム終了 テントサイト撤収
昼	昼食 テント設営 仲間づくりの時間	昼食 オーバーナイトプログラム報告会
夕	オーバーナイトプログラム開始 夕食(カレーコンテスト)	閉講式

レクターを務め、指導にあたる運営形態である。

本プログラムでは、「人工的な生活を離れ、自然の中で生活を体験する」、「集団生活の意義を体験する」、「良き学友を得る」、「自然の美しさ、大切さを認識する」を趣旨としてプログラムが展開していくものであった。

宿泊はテント泊であり、食事に関しては、1日目の夕食と2日目の朝食が野外炊事となる。

2）調査対象

調査対象者は、本プログラム参加者(以下、実験群)と本プログラム不参加者(以下、統制群)の計75名とした。実験群は本プログラムへ参加したF大学生36名であり、男子21名、女子15名である。また、統制群は、F大学にて一般体育を受講し、実験群のアンケート実施日と同時期に授業があり無作為に選ばれた学生 39名であり、男子21名、女子18名である。

それぞれの対象者に調査を実施し、質問紙に未記入箇所のあるものや重複回答があるものがいなかったため、実験群は男子 21 名、女子15名、計36名(100.0%) 、統制群は男子21名、女子18名、計39名(100.0%)を分析対象とした。

3）検査内容

（1）登校回避感情

それぞれの対象者の不登校回避感情の変容を測定するために、堀井(2013)によって開発された大学生不登校傾向尺度の中から、大学への登校を回避する感情に関する「登校回避感情」の因子を用いた[3)]。尺度は全 6 項目からなり、「朝、今日は大学に行きたくないと思うことがある」、「参加したくない授業がある」などの項目から構成され、大学への登校を回避する感情的側面を表すものである。これらの項目に対し、5 件法(1:全く当てはまらない～5:全く当てはまる)で回答させ、その合計を登校回避感情得点とした。尚、得点に関しては、合計得点が低いほど学校に行きたくないと思う「登校回避感情」が低いことを示す。

（2）コミュニケーション力

それぞれの学生のコミュニケーション力の変容を測定するために、建元ら(2008)によって開発されたコミュニケーション力評価用紙を用いた[17)]。尺度は5因子、15項目からなり、これらの項目に対して、5件法(1:全く当てはまらない～5:全く当てはまる)で回答させ、その合計得点をコミュニケーション力得点とした。尚、得点に関しては、合計得点が高いほどコミュニケーション力が高いことを示す。また、下位項目は「仲間とうまくやっていく力」6項目、「自分からかかわる力」2項目、「困難を引き受ける力」 3項目、「思いを言葉で伝える力」2 項目、「感情を表出する力」2 項目であり、得点が高いほどそれぞれの因子が高いことを示す。

4）検査の手続き

実験群に対し、本プログラム前日オリエンテーション(Pre)と1ヶ月後の振り返りの会(Post)にて、質問紙に回答させた。また、統制群に対しては、実験群と同時期の授業内にて、質問紙に回答させた。

5）統計処理

実験群と統制群のそれぞれの学生に対して行った、登校回避感情とコミュニケーション力のアンケートのデータに関して、参加経験による変容の違いを明らかにするために、参加経験と調査期間の2要因混合計画による分散分析を行なった。交互作用が見られた項目に関しては、単純主効果の検定を行った。またコミュニケーション力に関しては、5 つの下位項目にも同様な手続きを行なった。

尚、統計処理については、IBM SPSS Statiscs24を使用し、この時、統計的有意水準は5%を用いることとした。

3．結果

1）実験群と統制群における登校回避感情得点の変化

実験群と統制群における登校回避感情得点の平均得点と標準偏差を示す(表 1)。対象者の変容を明らかにするために、学年と期間の2要因混合計画による分散分析を行なった。その結果、登校回避感情にのみ交互作用が有意であった($F[1,67]=9.19, p<.01$)。交互作用が有意であったことから、単純主効果の検定を行った。その結果、実験群における期間の単純主効果が有意であり($F[1,67]= 7.64, p < .01$)、大学に行

表１　実験群と統制群の登校回避感情得点の変化

項目	実験群 n=36 統制群 n=39	Pre		Post		時期	経験	交互作用
		M	SD	M	SD	F値	F値	F値
登校回避感情	実験群	17.58	5.11	16.08	5.19	0.63	4.34 ＊	9.19 ＊＊
	統制群	18.61	4.49	19.48	3.78			

＊＊:p<.01, ＊:p<.05

きたくないと思う登校回避感情に関して、本プログラムに参加した実験群において、より低下していることが示された(図 1)。以上の結果を総括すると、本プログラム後１ヶ月の生活において、実験群の学生の登校回避感情得点は有意な低下を示し、プログラム後の生活で学校に行きたくないと思う「登校回避感情」が低下することが示される結果となった。

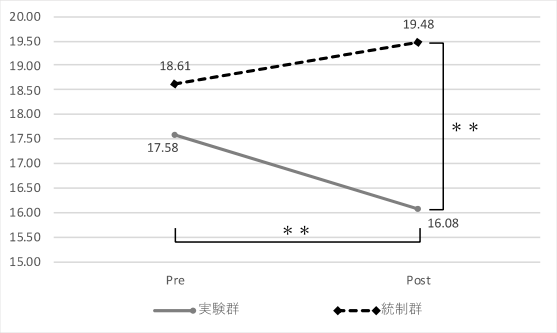

図１　実験群と統制群における
登校回避感情得点の変容結果

２）実験群と統制群における
コミュニケーション力得点の変化

実験群と統制群におけるコミュニケーション力得点の平均得点と標準偏差を示す(表 2)。対象者の変容を明らかにするために、学年と期間の 2 要因混合計画による分散分析を行なった。その結果、交互作用は見られなかったものの、「コミュニケーション力合計」、「仲間とうまくやっていく力」、「困難を引き受ける力」において、期間による主効果が認められ(コミュニケーション力合計：F[1,67]=21.54,p<.001、仲間とうまくやっていく力：F[1,67]=13.66,p<.001、困難を引き受ける力：F[1,67]=17.92,p<.001)、さらに「登校回避感情」と「コミュニケーション力合計」、下位項目である「仲間とうまくやっていく力」、「自分からかかわる力」、「困難を引き受ける力」において経験の主効果が認められた(登校回避感情：F[1,67]=4.34,p<.05、コミュニケーション力合計：F[1,67]=9.55,p<.01、仲間とうまくやっていく力：F[1,67]=13.85,p<.001、自分からかかわる力：F[1,67]=8.41,p<.01、困難を引き受ける力：F[1,67]=8.99,p<.01)(図 2)。

以上の結果を総括すると、本プログラム後１ヶ月の生活において、実験群の学生のコミュニケーション力得点は有意な向上を示し、特に「仲間とうまくやっていく力」、「自分からかかわる力」、「困難を引き受ける力」の得点において、よりその効果が示された。また、実験群は統制群と比較して、本プログラム以前から「コミュニケーション力合計」得点が有意に高く、さらに下位項目である「仲間とうまくやって行く力」、「困難を引き受ける力」の得点においても実験群が有意に高く、これは、実験群と統制群ではコミュニケーション力に元から差がある集団であることを示す結果であった。実験群と統制群を比較すると、共に交互作用が認められないが、実験群が統制群と比較し、コミュニケーション力得点において、より得点を向上させている結果となった。

４．考察

１）登校回避感情得点の変化の特徴

上述の結果から、登校回避感情得点は、実験群と統制群の Pre において有意な得点の差は示されなかったが、Post においては実験群の得点が低く、有意な得点の差が示された。またそれぞれの群の Pre-Post の比較では、実験群においてのみ有意な得点の低下が示された。つまり、短期野外教育プログラムが、学校に行きたくないと思う大学生の「登校回避感情」の低下に影響を与えることが推察され、不登校を改善する手段としての可能性が示された。

キャンプなどを含む野外教育における教育効果に関しては、プログラム後に、やる気次元の「生活の満足感」「目標・挑戦」「自信」において効果が得られたことや[12]、社会的スキルの内、特に積極的に他者に関わろうとする技術である向社会的スキルが組織キャンプ後に向上することが示唆されている[13]。また、大学生の不登校の研究においては、学生が不登校になる理由として、大学生活全般に対する不満や学生

表２　実験群と統制群のコミュニケーション力得点の変化

項目	実験群 n=36 統制群 n=39	Pre		Post		時期	経験	交互作用
		M	SD	M	SD	F値	F値	F値
コミュニケーション力合計	実験群	54.42	6.50	58.50	7.72	21.54 ＊＊＊	9.55 ＊＊	n.s.
	統制群	49.82	8.85	51.91	9.36			
仲間とうまくやっていく力	実験群	22.94	2.81	25.03	2.81	13.66 ＊＊＊	13.85 ＊＊＊	n.s.
	統制群	20.82	4.16	21.61	4.04			
自分からかかわる力	実験群	7.58	1.57	8.08	1.38	1.99	8.41 ＊＊	n.s.
	統制群	6.79	1.80	6.79	1.90			
困難を引き受ける力	実験群	10.29	2.30	11.81	1.91	17.92 ＊＊＊	8.99 ＊＊	n.s.
	統制群	9.55	2.25	10.27	2.17			
思いを言葉で伝える力	実験群	6.75	1.44	7.00	1.71	2.60	0.15	n.s.
	統制群	6.58	1.95	6.88	1.82			
感情を表出する力	実験群	6.22	1.99	6.58	1.89	3.29	0.15	n.s.
	統制群	6.09	2.04	6.36	2.22			

＊＊＊:p<.001, ＊＊:p<.01

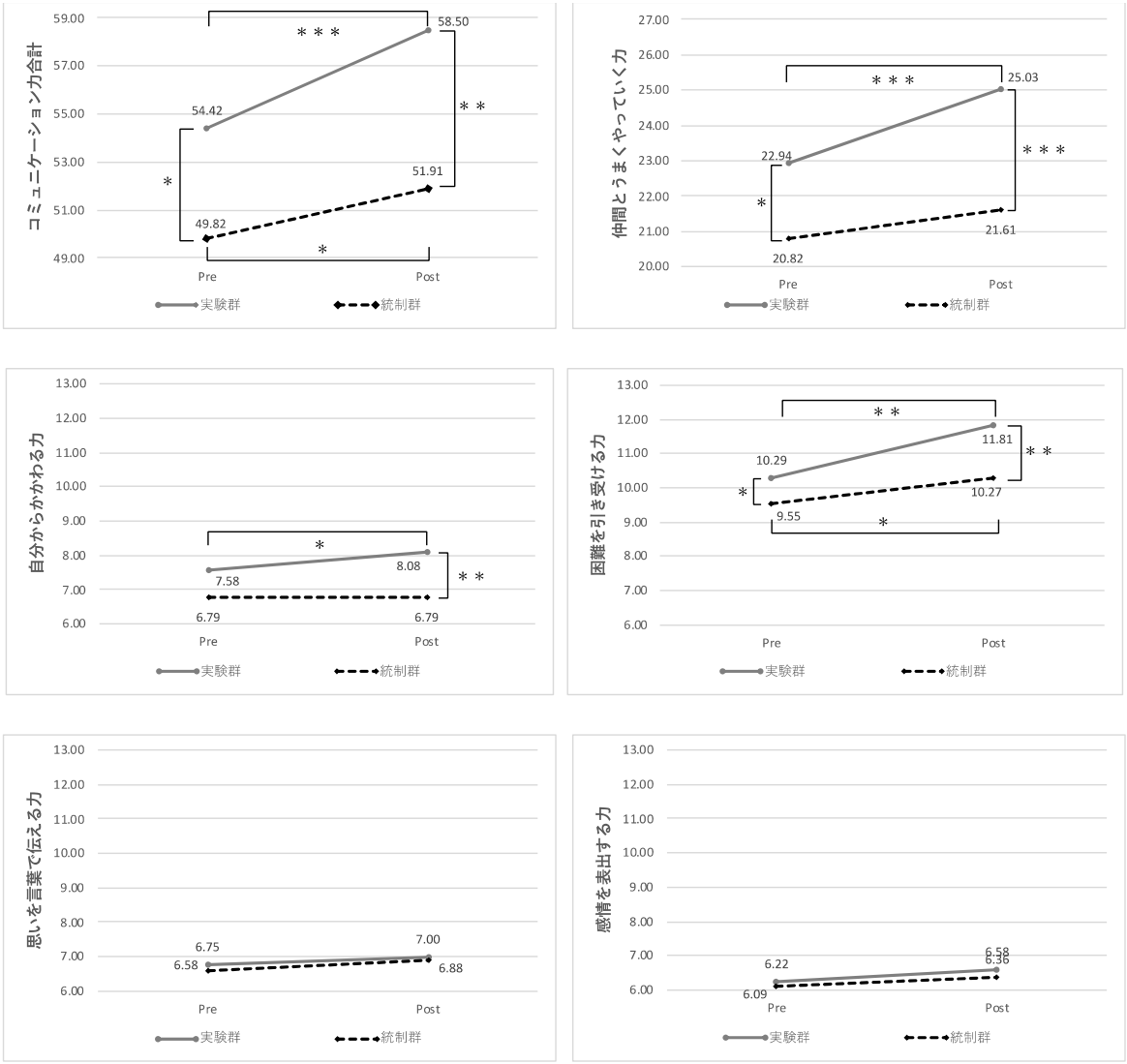

図２　実験群と統制群におけるコミュニケーション力得点の変容結果

自身の無気力感が挙げられるが[6]、「大学内に話をしたり遊んだりする友達」が複数存在するほど、大学への総合的な満足度や大学へのコミットメントを強め、大学から離脱する意思を持たない傾向が見られることも報告されている[15]。

以上のことからも、短期野外教育プログラム

の野外炊事やテント泊が参加学生の基本的生活習慣の確立を促し、挑戦、協力、工夫しながらのイニシアチブゲームや登山などの集団での生活が、不安やストレスを克服する体験となっていたことが伺える。さらにそれらの体験は、社会性や自己意識の向上を促し、その後の大学生活の充実や満足感、自信ややる気の向上に繋がったことが、1 ヶ月後の生活の中で登校回避感情の低下に影響した要因と考えられる。また同じ班の仲間やカウンセラーなどと関わりを通して、大学内における新たな友人を得ることができたことも、大学へのコミットメントを強め、登校回避感情の低下に影響していると考える。

2）コミュニケーション力得点の変化の特徴

上述の結果から、コミュニケーション力得点は、実験群と統制群の Pre において「コミュニケーション力合計」得点と下位項目である「仲間とうまくやっていく力」、「困難を引き受ける力」において実験群の得点が高く、有意な得点の差が示された。つまり、実験群には本プログラム前から他者とのコミュニケーション力に長けた者が多く、このことは今回のプログラムが学内公募による募集であったため、実験群に自主的で積極性のある学生が多く存在したことが影響したものと考える。また Post においては、「コミュニケーション力合計」得点と下位項目である「仲間とうまくやっていく力」、「自分からかかわる力」、「困難を引き受ける力」において実験群が高い得点を示し、有意な得点の差が示された。またそれぞれの群の Pre-Post の比較では、共に「コミュニケーション力合計」得点と下位項目である「困難を引き受ける力」は有意な得点の向上を示したが、「仲間とうまくやっていく力」、「自分からかかわる力」においては、実験群のみ有意な得点の向上が示された。つまり、短期野外教育プログラムが参加学生のコミュニケーション力の向上により影響を及ぼし、特に「仲間とうまくやっていく力」、「自分からかかわる力」により影響を与えることが推察される。

橋本ら(2013)は、短期野外キャンプ活動においてコミュニケーションの促進効果の可能性を共同作業、場の雰囲気、感動体験がその要因として報告している[4)]。実際に行われるキャンプなどの野外教育プログラムは、共同生活や共同作業で成り立つものであり、テント設営、野外炊事など様々な活動は一人で行うことができず、必然的にコミュニケーションを取る必要がある。さらに、今回の短期野外教育プログラムの中では、そのような共同作業の場だけでなく、九重という自然環境、全員で山頂に登り朝日を見たという感動体験も、コミュニケーション力の向上に影響した要因として考えられる。

また、実験群と統制群はコミュニケーション力にもともと差があり、有意な得点の差が示されたことから、有意な得点の差が示された項目と示されなかった項目に関して考察を加えていく。

Pre において得点に有意な差が示された項目は、「仲間とうまくやっていく力」、「困難を引き受ける力」であり、実験群の得点が有意に高く、それぞれの群においてどちらも Post で有意な得点の向上を示した。次に、Pre において得点に有意な差が示されなかった項目は、「自分からかかわる力」、「思いを言葉で伝える力」、「感情を表出する力」であった。「自分からかかわる力」に関しては、実験群においてのみ Post で有意な得点の向上が示されたが、「思いを言葉で伝える力」と「感情を表出する力」に関しては、共に有意な変化は示されなかった。

以上のことから、短期野外教育プログラムは、他者との円滑なコミュニケーション技術である「仲間とうまくやっていく力」、「困難を引き受ける力」をより向上させることが示された。また他者との関わりに積極的な姿勢を示す「自分からかかわる力」の向上に関しては、特にプログラムの効果が期待されることが示唆された。得点の向上が示された 3 つの下位項目は、短期野外教育プログラムにおけるオーバーナイトプログラムやテント泊などの他者と関わりや生活を共にする体験、イニシアチブゲームなどで課題を解決していく過程で獲得されたことが考え、その後の生活における他者と関わる場面においても、その獲得されたスキルを生かすことができたことが要因として考えられる。

５．結語

本研究の目的は、大学生を対象とした短期野外教育プログラムの効果ついて、不登校回避感情とコミュニケーション力の変化から、大学生不登校問題を解決する手段としての示唆を得ることであった。1 泊 2 日のＦ大学学生課主催の野外教育キャンプに参加した学生 36 名、また本プログラムに参加していない学生 39 名に対して登校回避感情とコミュニケーション力に関する尺度を用いて調査を行なった。その結果、短期野外教育プログラムを通して、参加者である実験群の登校回避感情が低下した。また、実験群と統制群のコミュニケーション力の変化には違いがあり、実験群、統制群ともにコミュニケーション力を向上させていたが、より実験群において「仲間とうまくやっていく力」、「困難を引き受ける力」が向上し、特に「自分からかかわる力」では実験群でのみ向上が見られ、プログラムの効果が期待できる結果となった。つまり、大学生を対象とした短期野外教育プログラムが学校不適応問題を改善する予防的手段となることや、参加経験がコミュニケーション力の向上により効果的であるという短期野外教育プログラムの有効性が示唆された。

以上の結論から、短期野外教育プログラムが、多くの大学が抱えている学生の学校不適応問題を解決できる可能性が示され、大学生を対象とした短期野外教育プログラムの教育効果の一側面が見出された。

大学生の学校不適応の背景要因として「不適応になってきた強迫性格」や「対人関係失調の増加」、「学校化した家庭」、「情報化社会の到来」が挙げられている[11)]。そのような中で、不特定多数の他者との様々な関わりの中で、課題を解決しながら生活を行う非日常体験の重要性は以前から指摘されており、今後も様々な背景を持つ学生を援助するプログラムとして良質な教育機会の提供を行う必要がある。

しかし、本プログラム参加者はあくまでも自主的に参加した学生であった。そのため、積極性を伴わない学生や参加しにくい学生に対してもプログラムを提供する方法を探り、学校不適応問題の予防的手段としての野外教育プログラムの有効性についても検討を重ねることが今後の課題として考えられる。

引用文献

1) 藤田長太郎・嘉目克彦・漆間幸一・河野美奈(2009)：不登校傾向の学生へのアウトリーチ型支援－キャンパスソーシャルワーカーによる学生の自己選択能力の形成支援、大学と学生 69、43-51
2) 堀井俊章(2016)：大学生の不登校傾向に影響を及ぼす心理的要因、横浜国立大学教育人間科学部紀要 I、106-114
3) 堀井俊章(2013)、大学生不登校傾向尺度の開発、学生相談研究 33(3)、 246-258
4) 橋本公雄・井上弘人・藤塚千秋・石橋剛士・宮林達也・甲木秀典(2013)：短期的野外キャプ活動におけるコミュニケーションの促進効果-質的分析-、熊本学園大学論集「総合科学」19(2)、189-212
5) 飯田稔・坂本昭裕・石川国広(1990)：登校拒否中学生に対する冒険キャンプの試み、筑波大学体育科学系紀要 13、81-90
6) 牧野幸志(2001)：大学生の不登校に関する基礎的研究(1)-大学生の不登校と退学希望の理由の探索-、高松大学紀要 36、79-91
7) 最上澄枝・金子糸子・佐藤哲康・布施晶子・市来真彦(2008)：自ら助けを求めず潜在している学生に対する学内協働によるとりくみ―欠席方学生対応プロジェクトを通して、学生相談研究 28(3)、214-224
8) 文部科学省中央教育審議会初等中等教育分科会(2012)：学校段階間の連携・接続等に関する作業部会、http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/045/siryo/__icsFiles/afieldfile/2012/06/05/1321300_02.pdf(2018 年 9 月 20 日アクセス)
9) 文部科学省中央教育審議会初等中等教育分科会(2012)：小・中学校間の連携・接続に関する現状、課題認識、http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/siryo/attach/1325896.htm(

2018 年 10 月 2 日アクセス)
10) 文部科学省(2014)：学生の中途退学や休学等の状況について http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/26/10/__icsFiles/afieldfile/2014/10/08/1352425_01.pdf(2018 年 9 月 20 日アクセス)
11) 文部科学省(1999)：大学における学生生活の充実に関する調査研究 http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/koutou/012/gijiroku/991001.htm(2018 年 10 月 3 日アクセス)
12) 西田順一・橋本公雄・柳敏晴・馬場亜紗子(2005)：組織キャンプ体験に伴うメンタルヘルス変容の因果モデル-エンジョイメントを媒介とした検討-、教育心理学研究 53、196-208
13) 西田順一・橋本公雄・徳永幹雄・柳敏晴(2002)：組織キャンプ体験による児童の社会的スキル向上効果、野外教育研究 5(2)、45-54
14) 佐藤豊・佐野裕(2005)：高等学校における野外教育プログラムの効果-「総合的な学習の時間」に向けて(1)-、野外教育研究 8(2)、45-57
15) 谷田川ルミ(2013):友だちの数、第 2 回　大学生の学習・生活実態調査報告書 2012 年、ベネッセ総合教育研究所、64-65
16) 谷田川ルミ(2013)：大学への適応における友人関係の重要性－高校までとは異なる人間関係をどのように構築するかー、ベネッセ教育総合研究所、https://berd.benesse.jp/berd/focus/4-koudai/activity2/(2018 年 12 月 23 日アクセス)
17) 建元喜寿・本弓康之・小林美智子・吉備豊・中村徹・堀出知里(2008)：入学直後の高校 1 年生に対する野外教育プログラムの評価、国立青少年教育振興機構研究紀要 8、37-52
18) 永吉宏英・今井正裕・太田正義(2006)：社会におけるキャンプの役割、キャンプディレクター養成テキストキャンプディレクター必携、1-8

実 践 報 告

実践報告

組織キャンプのプログラムと教育効果
ー南会津チャレンジキャンプの実践を事例としてー
Educational effects of the organized camp and program contents
- Case study of Minami Aizu Challenge Camp -

坂谷充（筑波大学）、渡邉仁（筑波大学）、
福富優（至学館大学短期大学部）、佐藤冬果（筑波大学大学院）
Mitsuru SAKATANI, Hitoshi WATANABE, Yu FUKUTOMI, Fuyuka SATO

１．はじめに

便利・快適・安全な現代社会において、子どもの様々な体験が減少している。「今後の青少年の体験活動の推進について(答申)」[1]によると、体験活動は生活・文化体験活動、自然体験活動、社会体験活動の 3 つに分類され、「社会を生き抜く力」を養うためにはこれらの体験活動が重要であると述べている。2011 年度に施行された現行学習指導要領においても、これまでの「生きる力」の理念を継承し、発達の段階に応じた体験活動の充実を推進している。

ところで、何かを作ったり、行ったりした際には評価が重要である。評価とは「①品物の価格を決めること。また、その価格。②事物や人物の、善悪・美醜などの価値を判断して決めること。③ある事物や人物について、その意義・価値を認めること。」[2]であり、教育評価、パフォーマンス評価など様々な場面で行われている。適切な評価を行うことで、評価対象の良し悪し及びその理由を客観的に立証することができる。また、誰もが耳にしたことがあるであろう「Plan Do See」は計画、実行、評価というサイクルを繰り返して、課題解決を図ることである。我々が行なっているキャンプについても多角的な視点から事業評価を行うことで、よりよい実践に役立つだけではなく、キャンプの意義や価値を明らかにすることができる。

そこで本稿では、当団体が実施している「南会津チャレンジキャンプ」について①概要、プログラムとその変遷についての記述、②教育効果の検証、の 2 点を通して、本キャンプの実践を報告・評価することで今後への示唆を得ることを目的とする。

２．キャンプの概要

２．１．団体概要

本事業は野外教育の実施団体である Tsukuba Outdoor Education Lab.(以下、TOEL)が主催している「南会津チャレンジキャンプ」である。TOEL は、東日本大震災の被災地域の子どもたちの支援活動を兼ねて、野外教育の実践と研究を目的とする任意団体として、2011 年 4 月に設立された。本団体は、以下の事業を展開している。

①「南会津アドベンチャーキャンプ」
（対象：小学 4 年生～中学校 3 年生）
テント泊や薪からの火起こしなど、原始的な（素朴な）生活様式で構成された 5 泊 6 日の組織キャンプ。プログラムには沢遊びや登山（1 泊 2 日）などを含む。例年 7 月下旬～8 月上旬に実施している。

②「南会津チャレンジキャンプ」
（対象：小学 1 年生～小学 3 年生）
テント泊や薪からの火起こしなど、原始的な（素朴な）生活様式で構成された 3 泊 4 日の組織キャンプ。プログラムには沢遊びや登山（日帰り）などを含む。例年 8 月上旬に実施している。

③「南会津スキーキャンプ」
（対象：小学 4 年生～高校 3 年生）
南会津にある会津高原だいくらスキー場を利用したスキーキャンプ。プログラムはゲレンデでのスキー講習を中心に、ネイチャースキーや雪を利用した雪像つくり、スノーシアター作りなどのプログラムを実施している。宿泊はロッジなどの施設を利用している。例年 3 月の下旬に実施している。

④不定期に実施されるキャンプ
過去、不定期に開催した事業として、女子サッカー選手の交流等を目的とした「なでしこキャンプ」、親子でカヌーや野外炊事を行う「親子ふれあい体験」を実施した。

２．２．「南会津チャレンジキャンプ」の概要

南会津チャレンジキャンプは 2016 年より、「南会津の大自然の中で、楽しい野外活動を通して、児童の心身がリフレッシュされると同時に、たくましい心が養われること」を目的に実施している。キャンプは 8 月上旬に 3 泊 4 日の日程で、福島県南会津郡南会津町針生駒戸山にある民営キャンプ場「みどりの広場」及びその周辺を活動場所として開催されている。キャンプは同地域の行政、企業、NPO 法人、キャンプ場近隣の宿泊施設や地域住民の方々の理解と協力を得て実施している。

２．３．参加者

参加者について、市町村教育委員会を通じて茨城県つくば市周辺の小学校に募集要項及びチラシを配布した。また同様の内容を、過去の参加者への郵送及び団体 HP へ掲載している。継続参加者の増加及びクチコミによる情報の流布により、団体の設立当初に比べてチラシ及び募集要項の配布を減らしている。南会津チャレンジキャンプは、キャンプを開始した 2016 年は参加対象者を小学 1 年生～小学 4 年生としていた。しかし、翌年 2017 年からは異学年間の交流が円滑に進むことを狙って、参加対象者の学年幅を小さくし、小学 1 年生～小学 3 年生に変更した。なお、参加者数は 2016 年：23 名（男 15：女 8）、2017 年：41 名（男 29：女 12）、2018 年：37 名（男 25：女 12）であった。

２．４．指導体制

キャンプの組織図を図 1 に示す。キャンプでは団体責任者とは別に、現場を統括する現場責任者を配置している。筆者は、2016 年プログラムディレクター、2017 年以降は現場責任者の立場でキャンプに携わっている。2017 年以降、プログラムディレクターは大学院生が担当している。マネジメントディレクター、フードディレクターは団体の事務職員または大学院生が担当、キャンプカウンセラー及び本部スタッフは大学院生または大学生が担当している。なお学生スタッフは、野外教育を専門に学んでいる大学院生及び大学生である。

班は性別及び学年を混合とし、偏りの無いように編成している。参加者及びスタッフの人数により 6～7 名を 1 班として 6 班程度を編成し、各班にキャンプカウンセラーを 1 名配置している。

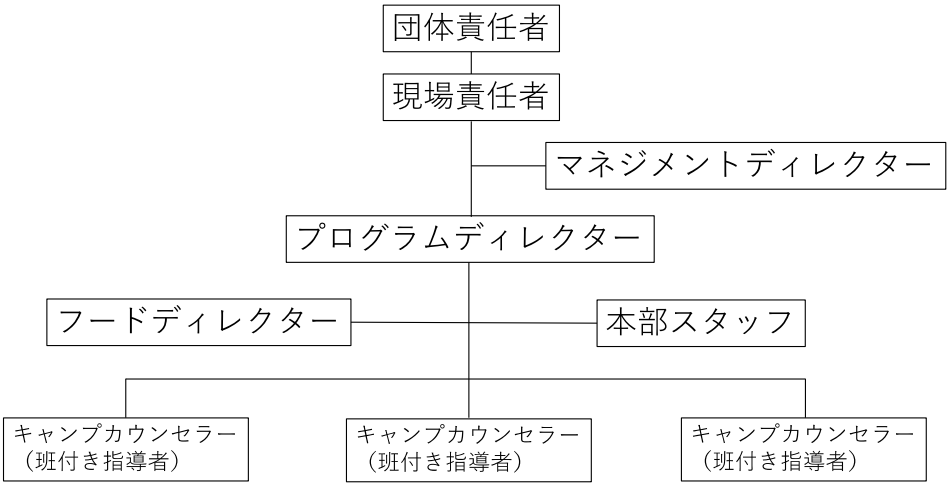

図 1 組織図

２．５．プログラム及び変遷

＜2016 年（キャンプ１年目）＞

プログラムを表１に示す。キャンプ１年目は、スタッフに参加対象である小学 1～4 年生のキャンプ指導経験のある者が少なく、またプログラム開発などの観点から施設（公民館風の施設）を用いた宿泊形態とした。初日の午前はキャンプ場までのバス移動、午後は開村式を行った後、OLS（Outdoor Living Skills）として、1 泊登山に向けたドーム型テントの設営練習などを各班で行った。2 日目は午前中に沢遊び、午後からは１泊登山の説明と準備の後、登山に出発した。1 泊登山では、約１時間の道のりを歩き、山中でテントを用いて宿泊した。食事作りについては、山中において薪を集めて火を起こし、炊飯を含めた簡単な調理を行った。3 日目は登山からの帰着と後片付け、午後からはお土産作り（前半）としてネイチャークラフト（ネームタグ）を作成した。4 日目はネイチャークラフト（後半）、荷物の片付け、閉村式を行いバスでの帰路についた。

＜1 年目の課題＞

・炊事に関しては可能な限り屋外での野外炊事としたが、設備不足によるプログラム運営への影響があった。

・施設を利用した宿泊形態のメリットは、設営・撤収の手間が省略でき、悪天候などに影響されることなく生活及びプログラムを遂行できることである。しかし便利な反面、自然との距離が生まれ、キャンプの目的との乖離が感じ取られた。

＜2017 年（キャンプ２年目）以降＞

1 年目の結果を受けて、2 年目以降は宿泊形態をキャンプ場でのテント泊に変更した。しかし小学校低学年の児童が家型テントを設営することは参加者、スタッフともに負担が大きいため、本キャンプの前にアドベンチャーキャンプ（対象：小学校４年生～中学校３年生）を配置し、設置したテント、タープ、テーブルなどをそのまま利用することで負

表１　2016 年（キャンプ１年目）のキャンププログラム

	1日目	2日目	3日目	4日目
食		野外炊事	野外炊事（山中）	野外炊事
	バスで移動	沢遊び	泊登山	ネイチャークラフト（後半） 荷物の片付け 閉村式
食	お弁当（持参）	野外炊事（弁当）	提供	提供
	開村式 野外生活技術 の練習	登山説明	ネイチャークラフト （前半）	バスで移動
食	野外炊事	野外炊事（山中）	野外炊事（パーティー）	
のプログラム	ナイトハイク		キャンプファイアー	
泊形態	施設泊	テント泊	施設泊	

図２ キャンプ１年目の宿泊施設及びその周辺

図３ １泊登山のテント設営

担を軽減できるよう工夫している。また宿泊方法の変更に伴い、プログラムを表２のように変更した。1 日目午前はバスでの移動、午後は開村式及びアイスブレイク、またテントでの生活を安全・快適に過ごせるように、班ごとに簡単な説明と荷物整理の時間（生活環境整備）に当てている。2 日目は沢遊びと翌日の登山説明、3 日目は日帰り登山、夜にはキャンプファイアー、4 日目は撤収作業及びネイチャークラフト（お土産作り）、閉村式である。

＜2 年目以降の課題＞

・テントを用いた生活では、夜間の子どもへの対応が懸念事項であった。そこで本キャンプではカウンセラーテントを子どもたちのテントサイトの近くに設置し、当番制でスタッフ（カウンセラー）がテントで就寝するという体制をとっている。子どもがスタッフのいる場所を把握し、夜間にトイレにいけないなど、助けが必要な時にはすぐにスタッフを訪ねることができる。また天候の急変などの際も現場の状況把握が可能であり、初期対応も素早く行える。

・本キャンプでは登山をメインプログラムとして位置付けている。1 年目は山中でのテント泊体験を目的として、全員が同じ登山コースを歩いた。2 年目以降は年齢や参加回数に応じた距離、難易度の登山コースを設定している。登山についてはアドベンチャーキャンプとの接続も見据えて、さらなるコース開発の必要性がある。

・プログラム全体を通して、カウンセラーは常に時間に追われて子どもの指導をしている様子がうかがえた。カウンセラー自身が時間や状況をマネジメントする能力を鍛える必要がある一方で、時間的余裕のあるプログラムを検討する余地がある。

表２　2017 年（キャンプ 2 年目）以降のキャンププログラム

	1日目	2日目	3日目	4日目
		野外炊事	提供	野外炊事
	バスで移動	沢遊び	山	撤収作業 ネイチャークラフト 閉村式
	お弁当（持参）	野外炊事（弁当）	野外炊事（山中）	野外炊事（弁当）
	開村式 アイスブレイクゲーム 班での自由時間 （環境整備など）	沢遊び 登山説明	山 自由時間	バスで移動
	野外炊事	野外炊事	提供	
プログラム	ナイトハイク		キャンプファイアー	
形態	テント泊	テント泊	テント泊	

図 4 キャンプ 2 年目以降のテントサイト

図 5 野外炊事

３．南会津チャレンジキャンプにおける教育効果の検証

３．１．目的

実施 3 年目を迎えた本事業を評価するため、キャンプの教育効果検証のためのアンケート調査を実施した。

３．２．アンケート用紙

福富が、幼児期の自然体験活動の教育的効果について多角的に検証することを目的に作成した「幼児用自然体験活動効果測定尺度」を用いた。調査用紙は全国の幼稚園・保育園（所）の教諭・保育士、幼児をもつ保護者、青少年教育施設職員の計 1,076 名から、幼児期の自然体験活動を通して子どもの成長として期待できることを抽出し、信頼性・妥当性の検討を行い作成された。

３．３．調査対象者

調査対象者は 2018 年度「南会津チャレンジキャンプ」に参加した、小学 1〜3 年生の児童 37 名のうち、有効な回答を得られた 34 名（男子 24 名：女子 10 名）を対象とした。アンケートの回答は、児童の父親または母親からの他者評価とした。回答者の内訳は父親 5 名、母親 29 名であった。

３．４．調査の手続き

調査はキャンプの pre（直前）と post（直後）の 2 回実施した。pre として、バスの出発場所に送迎にきた保護者にアンケートへの回答を求めた。post については、キャンプから約 1 週間後に郵送で調査を依頼し、郵送で返信をお願いした。回答に当たっては、pre 及び post ともに同一の保護者に依頼した。

３．５．統計処理

合計得点及び各因子得点について、pre・post の変化を明らかにするために SPSS Statistics ver.25 for windows を用いて t 検定（対応あり）を行った。

３．６．結果と考察

調査用紙全体の合計得点及び各因子の合計得点と標準偏差を表 3 に示す。t 検定の結果、合計得点（t=4.46, p<.01）、自然理解因子（t=5.92, p<.01）、積極性因子（t=3.11, p<.01）、自然適応因子（t=2.97, p<.01）において有意な差が認められた。

自然理解因子及び自然適応因子について、pre に比べ post の得点が有意に高かった。学童期（小学校低学年）は言語能力や認識力が高まり、自然等への関心が増える時期であり[3]、参加者は豊かな自然環境の中での生活や活動を直接経験することによって、自然への理解及び適応が進んだと推察される。

同様に積極性因子についても post の得点が有意に高かった。理由として、新たな友人と寝

表３　幼児用自然体験活動効果測定尺度の平均点及び t 検定結果

		Pre	Post	t値	
合計得点	M	48.65	52.81	4.46	**
	SD	(7.07)	(8.03)		
社会性	M	19.79	20.11	0.85	
	SD	(3.58)	(4.11)		
自然理解	M	8.74	10.74	5.92	**
	SD	(2.22)	(2.40)		
積極性	M	11.09	12.09	3.11	**
	SD	(2.42)	(2.08)		
自然適応	M	9.03	9.88	2.97	**
	SD	(2.36)	(2.16)		

(N=34)　　**p<.01

食を共にすること、日常生活に比べ大人の介入が少ない状況であったことが考えられる。そして登山や野外調理を代表例に、キャンプには参加者自身が行動を起こさなければ目的が達成されない状況がたくさん設定されており、子どもの積極性向上に繋がったのではないだろうか。

社会性因子（t=0.85,ns）に有意な差が認められなかった理由として、評価（アンケートの回答）を子どもの保護者が行ったことが考えられる。社会生活の中で発揮される社会性が、親と子どもという親密な関係では正確に評価されにくいという側面があったのはないだろうか。また、社会性を構成する「自他の尊重の意識や他者への思いやりなどの涵養、集団における役割の自覚や主体的な責任意識の育成」などは、小学校高学年の課題であり[3)]、変化が少なかったことも考えられる。いずれにしても、今後は検証を重ねて、社会性が身につくプログラムや指導方法を検討していく必要があるだろう。

４．まとめ

本稿では、TOEL 主催の南会津チャレンジキャンプに関して、プログラムとその変遷を整理し、事業評価としてアンケート調査を用いてキャンプの教育効果を検証した。その結果、以下の示唆及び課題が得られた。

1. アンケート調査の結果から、子どもたちはキャンプを経験することで自然への理解及び適応が進み、また積極性を獲得していることが明らかになった。また合計得点から本キャンプの教育効果を認めることができた。
2. 本キャンプにおいて、社会性については効果がみられなかった。今後は効果検証を重ねながら社会性が身につくプログラムや指導方法についても検討していく必要がある。
3. チャレンジキャンプ開始当初はキャンプカウンセラーに小学校低学年への指導経験がなく、指導について手探りの部分があった。またプログラムも同様に、試行的要素を含んでいた。しかし本キャンプも 3 年目を迎え、プログラムが落ち着き、カウンセラーの指導にも安定感が感じられるようになってきた。新たなキャンプの立ち上げ及びプログラムの開発・安定には一定の期間が必要である。
4. 班編成については、子どもへの教育効果やカウンセラーの負担などを総合的に考え、生活班は学年及び性別を混合し、登山班は同学年で統一することが適している。
5. 対象者である小学 1〜3 年生は、まだ様々な場面で大人の手助けを必要とする。カウンセラーは「どの程度の介入を行うべきか？」「時間を優先するのか？時間はかかっても子どもの成長を優先するのか？」というジレンマの中で、子どもと向き合うことになる。この問題について明確な回答は存在しない。カウンセラーは状況に合わせて臨機応変に対応する必要があり、その視点及び能力を養う必要があるだろう。
6. 3 泊 4 日という短い期間に対してプログラムが多いため、カウンセラーは常に時間に追われて子どもの指導をしている状況がある。今後は時間的余裕のあるプログラムの開発、または日程を 1 日伸ばし 4 泊 5 日にするなどの検討が必要である。
7. 活動写真など毎日の様子を随時ホームページにアップしてほしいという保護者からの要望がある。また緊急時以外にキャンプ場及びスタッフの携帯に保護者から電話がかかってくるという事態が発生している。近年の社会情勢及び情報保証という観点から考えると、当然のことである。これらの状況を鑑み、キャンプの教育効果及び運営を踏まえた上で団体としての方針を決定し、周知することが重要である。
8. 対象者に適した登山コースのさらなる開発が必要である。
9. 今後、本事業を継続するにあたってスタッフの確保と育成が当面の課題である。

引用・参考文献

1）中央教育審議会（2013）今後の青少年の体験活動の推進について（答申）（中教審第 160 号）
2）松村明、デジタル大辞泉、小学館、検索日：2018 年 9 月 20 日
3）調査研究協力者会議等（初等中等教育）（2009）子どもの徳育に関する懇談会（第 11 回）、文部科学省

4) 星野敏男ら（2011）野外教育の理論と実践、自然体験活動研究会（編）、杏林書院
5）佐藤冬果、渡邉仁、向後佑香（2014）南会津アドベンチャーキャンプの実践と地域連携の可能性、キャンプ研究、日本キャンプ協会、17、p. 15-21
6）清水啓一、渡邉仁、向後佑香（2013）被災地域の児童を対象としたキャンプの実践報告と今後の課題、キャンプ研究、日本キャンプ協会、16、p. 15-21
7）渡邉仁、畠山陽美、佐藤冬果、向後佑香、東山昌央（2015）キャンプ体験が被災地児童のメンタルヘルスと生きる力に及ぼす影響、キャンプ研究、日本キャンプ協会、18、p. 13-19

実践報告

中華人民共和国の小学生を対象とした自然科学学習プログラムデザインの検討

Consideration of Nature Science Program design for elementary school student of China

西海太介(一般社団法人 セルズ環境教育デザイン研究所)
白濱真友(一般社団法人 セルズ環境教育デザイン研究所)
Daisuke NISHIUMI, Mayu SHIRAHAMA

１．はじめに

環境教育分野のひとつとして、地球上のあらゆる生物や自然物を学習教材とする体験型学習プログラムがある。こうした体験型学習プログラムには、そこに存在する自然環境や生息する生物を学ぶ環境学習のほか、自然環境を舞台とした冒険的な位置づけの体験プログラムなど、各自治体や企業、非営利団体などによって、幅広い取り組みがなされている。

こうした広義の環境教育への意識は、今日取りざたされる「持続可能な社会づくりに向けた環境教育」につながり（村上，2006）[2)]、さらには、人が自らの能力を低下させる「自己家畜化」と呼ばれる現象を抑える上でも重要な教育であると示されている（小野木，2013）[3)]。

こうした環境教育の重要性がうたわれている昨今、一部の企業や団体、学校においては、積極的にこれらの活動に取り組んでいるが、ほかならぬ当所（セルズ環境教育デザイン研究所）も、種々の環境教育に取り組むひとつの事業所である。当所では、環境教育の中でも「生物学を学ぶ」というアカデミック性をテーマにした自然体験学習に根差しており、“自然科学学習”と称した各種学習プログラムを開発し、提供している。

本稿においては、中華人民共和国（以下：中国と記す）内企業である、上海奥义思管理咨询有限公司（以下：上海 OEC コンサルティング株式会社と記す）が企画するキャンプ参加者である小中学生計 12 人に対して提供した“自然科学学習プログラム”の実施報告、及び、参加者から得たアンケートの結果から、海外の参加者を対象としたプログラムデザインについて検討するものである。

なお、このアンケートは、日本とは異なる中国の学校教育事情や生活習慣、自然環境に関する項目について、今後提供するプログラムの検討のため得たものである。

２． 調査体験プログラムの実施概要

２．１．目的

自然環境や生物等の保全・保護が、健全な地球環境の維持に必要不可欠な要素であることは、社会通念的に学習することが求められる大きな目標であるといえる。また同時に、近年、生物が進化の過程で得てきた様々な構造や能力が工学的な利用等に応用される「バイオミメティクス（Biomimetics)」として活用されるなど、生物が我々人間の暮らしの中に役立つヒントとして活用される事例も期待されている（細田，2015）[1)]。本プログラムは、こうした生命観学習や利用等の重要性を学ぶ入り口となりながら、アカデミック性を取り入れた生物学学習として位置づけ、「中国の子どもたちが海外（日本）の文化や自然環境に触れながら、その中で自然環境と生物の関係性について学習すること」を目的とした調査体験プログラムである。

２．２．参加者

本プログラムの参加者は、中国、台湾、香港に在住の小学2年生から中学1年生までの男女12人である。12人のうち男子が9人、女子が3人で、男子のうち1人の中学1年生(13歳)を除くと、参加者の主となる年齢層は小学2〜5年生（8〜11歳）である。なお、最年長の中学1年生を含む男子 2 人はデータ収集を行わなかったため、提供した調査体験プログラム及びアンケートの結果は、残りの男女10人（8〜11歳）から得たものである。なお、本プログラム参加者は、台湾国籍、香港国籍者が 1 人ずつ含まれるが、中国国内の企業である上海OECコンサルティング株式会社が募集するものであるため、本稿においては「中国人小学生」と表記する。

２．３．実施方法

本キャンププログラムは中国語で「解密日本高原生物密码」、日本語訳では「日本の高原にいる生物のひみつを解き明かせ」と題された、中国在住の小学校2〜6年生を対象とした6泊7日の一週間キャンププログラムとして、2018 年7月18日〜24日に行った。実施地は、「清里高原」(山梨県北杜市)、「野辺山高原」(長野県南牧村)、「立原高原」(長野県南相木村）の 3 か所で、本キャンププログラム期間内に場所を移しながら調査を実施した（表1)。

期間中移動した標高の範囲は 1070m〜1878m の間で、このうち標高 1070m、1380m、1550m、及び1878mの4地点をデータ収集地点として設定し、調査を行った。これらの調査地は、プログラムの安全性、調査のしやすさ（登山道または林道の歩きやすさ)、宿泊地からの距離などを考慮した上で、実施しやすい環境として選抜した地点である。そのため、林業用地のような急斜面のある環境ではなく、ハイキングコースや登山道として道が作られている場所が選定されている。

調査体験プログラムでは、これら4つの地点を（1)「林業用地、または景観整備を目的として植樹され、管理されている人工林」と、(2)「もともとそのエリアに生息する樹種があり、それを保全している天然林に近い林」の2つの系統に分け、本調査では（1）を人工林、(2)を天然林と称して分類し、それぞれの樹種やその周辺に生息する昆虫について調査を行った(表2)。

調査する樹種は、道から1m以内にある胸高直径5cm以上の樹木とし、樹種名とその胸高直径、本数を記録した。胸高直径の計測は林業用品の輪尺を模して作成した手作りの輪尺を用いて測定した（図1)。

図１　調査に使用した輪尺と調査時の様子

表１　プログラムスケジュール

月日	活動内容	調査地標高
7月18日	来日・オリエンテーション	―
7月19日	事前学習 / 〔調査①〕清里高原	1,380 m
7月20日	〔調査②③〕海ノ口自然郷	1,550 m / 1,878 m
7月21日	高原の酪農体験	―
7月22日	文化講話	―
7月23日	〔調査④〕南相木村 / 調査まとめ・発表	1,070 m
7月24日	帰国	―

表２　調査地区分

環境区分	標高	天然林	人工林
高地	1,400 - 1,900 m	海ノ口自然郷（1,878 m）	八ヶ岳高原ロッジ（1,500 m）
低地	1,000 - 1,400 m	キープ協会（1,380 m）	南相木村（1,070 m）

昆虫は、種までの同定は行わず、「目（もく）」レベルまでを分類して記録を行い、標高及び林の環境によって、昆虫の目の割合に変化が生じるかどうかの比較を行うものとした。この樹種、および昆虫の目についての学習は、キャンプ2日目に調査前の学習として講義、および実習にて行った。

３．アンケートの結果

参加者 10 人を対象としたアンケートによって得られた「日本と中国、それぞれの自然の豊かさの印象評価」の結果を表 3 に記す。その結果、日本と中国の自然環境に関する印象では、日本の方が中国よりも環境が豊かであるとする傾向がみられ、有意差も認められた。また、ばらつきも少ないことから、総じて日本の豊かさが高く評価されている傾向があるものとみられる。

この理由として、大気汚染による影響を理由に挙げる者が 10 人中 6 人を占め、中国の社会問題となっている PM2.5 等の大気汚染問題への意識が見受けられた（表 4）。また他に、人口増加や都市化したことによる自然の減少を理由に挙げる者もいた。

今回、小学生に課すプログラムとしては高難度の課題となる調査体験プログラムを設定した。これは「中国人小学生の学習時間が日本人よりも長い」という学習事情等から、より学問的なプログラムが求められるニーズがあり、それに合わせた難易度として設定したものである。実際に、筆者らが本調査体験プログラムの参加者と、当所が日本国内で実施する生き物習い事教室に通う同年代の小中学生（小学 1～5 年生 22 人、中学 1 年生 1 人の計 23 人）から得たアンケートの結果によると、中国人の方が日本人よりも一日当たりの放課後勉強時間が、平均 180 分ほど多い傾向がみられた（表 5、 6）。また学習項目も、日本人の同年代よりも進んでおり、％（パーセント）の計算や棒グラフなどの学習を既に行っているものも多かった（表 7）。

なお、本稿においては中国人小学生の学習時間が多いことについての賛否には言及せず、こうした学習背景により科目学習が日本よりも進んでおり、数学的な計算をはじめとする分析の能力が高い傾向であることを報告するにとどめる。

表３　中国人小学生が考える日本と中国それぞれの自然の豊かさの印象評価

国	評価※
日本	4.7±0.5[a]
中国	2.7 ±1.2[b]

※「とても豊か」を5，「とても悪い」を1とした5段階評価.

表４　日本及び中国の自然に対する豊かさ評価の理由

中国に対する印象評価の理由	日本に対する印象評価の理由
1. 車からの排気ガスが多すぎて、虫が少ないから。	1. 木が多くて、虫の種類も多い。
2. 空気の汚染がひどく、動物の数が減っているから。	2. 森の中でたくさんの動物を見られるし、空もきれいな青色をしている。
3. 中国はごみが増えている。二酸化炭素の汚染もある。	3. 中国と比べたら日本はゴミも少なく、二酸化炭素による汚染も少ない。
4. 上海が大都市だから。	4. いたるところに緑があるから。
5. 大都会だと木が少ないから。	5. 環境が良いから。
6. 中国のソーラーパネルの数は増えてきているから。	6. 日本は空気が新鮮だから。
7. 木が少なく、空気が悪い。	7. 木が多くて、空気が新鮮。
8. 今は一部保護もして木の数もそこそこあるが、空気は悪く、動物も少ない。	8. きれい。国民も礼儀がいい。植物、動物もいい。
9. 家が川沿いにあるので、空気もそんなに悪くない。	9. 日本の空気のほうが良い。（宿泊地の）展示コーナーの中も動植物が豊富。
10. 中国の人は空気を汚染するようなことをしているから。	10. 日本人は環境を保護していて、汚染が少ないため5にした。

表５　放課後の学習時間

国	1時間未満	1～2時間	3時間以上	集計不可※
日本人	30.4%	21.7%	4.4%	43.5%
中国人	0.0%	60.0%	40.0%	0.0%

※ 質問に対し「わからない」，「いっぱい」，「たくさん」などの具体的でない回答は，本集計から除外した.

表６　放課後の学習時間

国	放課後学習時間（分）
日本人	72±80[b]
中国人	258±304[a]

表７　学習済みの単元

国	％の求め方	円グラフ	棒グラフ	平均の求め方
日本人	8.7%	39.1%	43.5%	13.0%
中国人	50.0%	60.0%	100.0%	80.0%

４．調査体験プログラムの結果について

本調査体験プログラムにおいて得た結果を図２、３及び表８に記す。この結果は、表２に記載の４区分において、３班構成で活動した中国人小学生が得たものである。

今回の調査は前述の通り、(1)「林業用地、または景観整備を目的として植樹され、管理されている人工林」を“人工林”、(2)「もともとそのエリアに生息する樹種があり、それを保全している天然林に近い林」を“天然林”と定義して行っている。これらの性質を考慮すると、林業用地として管理される人工林は、同時期に植えられた同種の樹木にそろう傾向があり、反対に天然林はサイズや樹種がまばらになる傾向があるものと推測されるが、実際に子どもたちが得たデータにおいても、おおよそそのような傾向が認められた。ただし、高地人工林（1,550m）に関しては、別荘地として景観管理される環境下であったため、本来の天然林に近い環境となり、サイズや樹種にばらつきがあった。

この樹種数の結果は、昆虫の目の数にも影響している傾向がみられ、樹種数が少なく単一な環境であった低地人工林は、昆虫の目の数も少ない傾向が確認できた。なお、本データは中国人小学生が得た結果であるため、いずれも考察を行う上で統計的な有意差検定及び相関分析は行っていない。

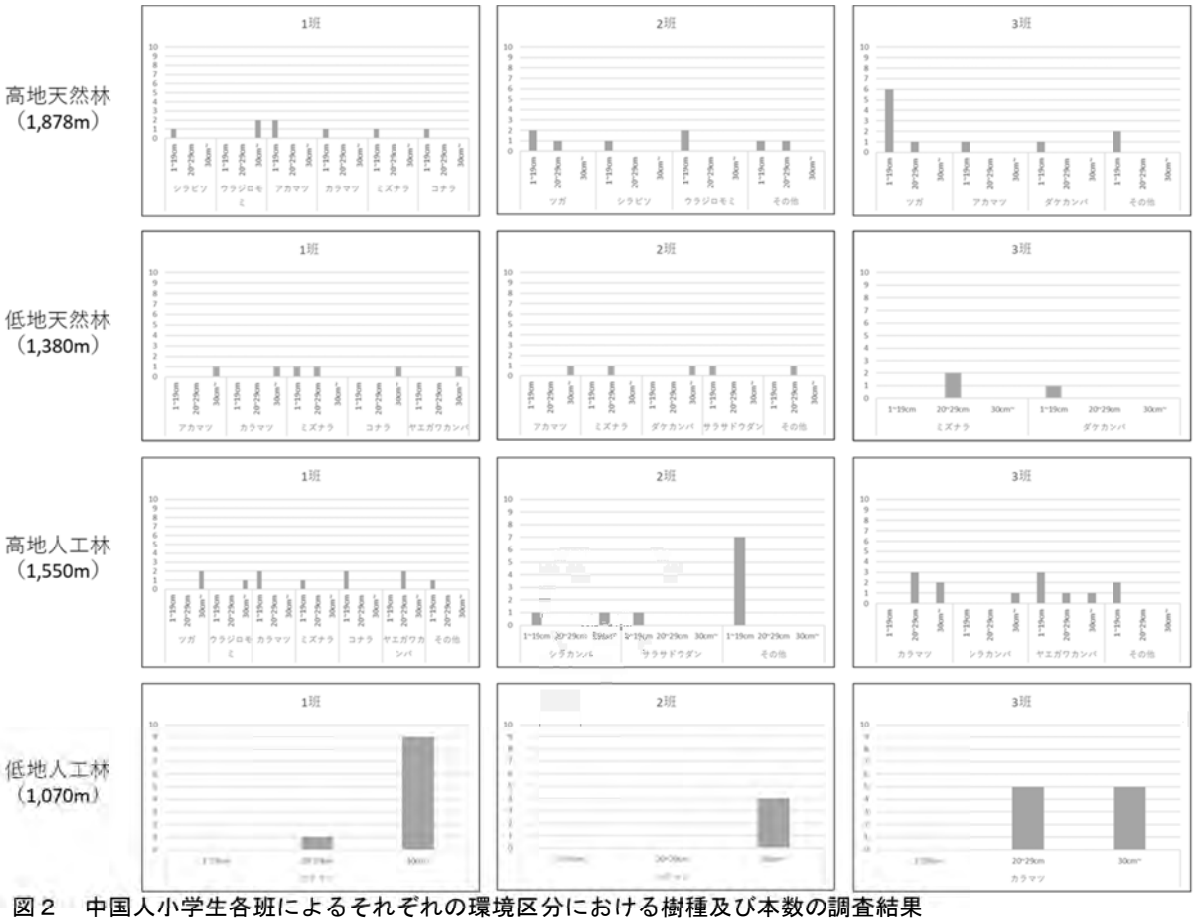

図２　中国人小学生各班によるそれぞれの環境区分における樹種及び本数の調査結果

表８　発見された昆虫の目の数

班	高地天然林（1,878m）	低地天然林（1,380m）	高地人工林（1,550m）	低地人工林（1,070m）
1班	14	10	12	9
2班	8	9	10	6
3班	11	13	9	7
平均	11.0±3.0	10.7±2.1	10.3±1.5	7.3±1.5

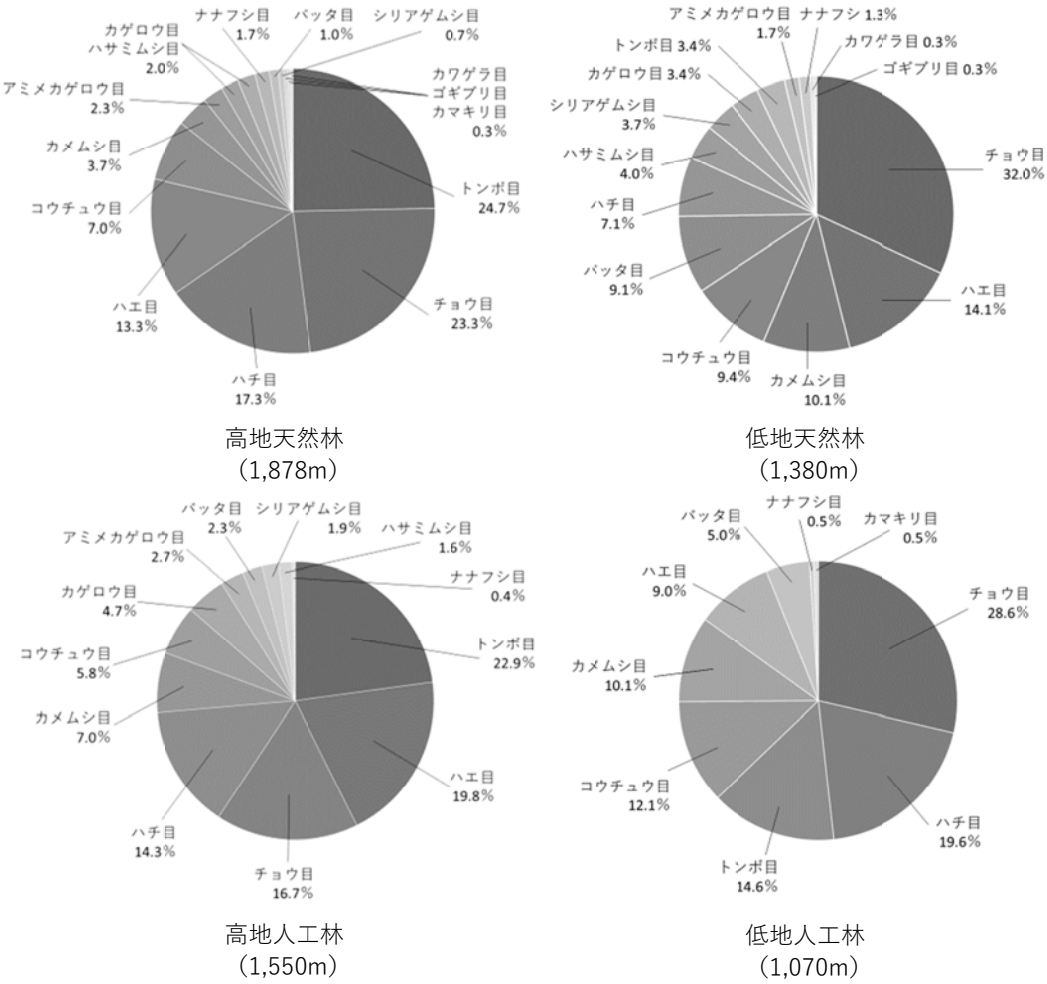

図３　中国人小学生各班によるそれぞれの環境区分における昆虫の目の調査結果

こうした結果に対して子どもたちは、「人間が特定の目的のために作った人工林は、実際に木の種類が少なく、植物をエサとする昆虫の種類にも影響がでているのではないか。」、「人工林で比べると、低地よりも高地の方が、木の種類が多かった。これは一見見ると原理的に違うように思うが、人が特定の目的のために作った森だから起こった結果だと思う。」などの考察を行っていた（表 9）。ただし、こうした考察のい班は、十分な考察に至らない例もみられていた。

表９　中国人小学生による結果の考察例

No.	内　容
1	人間が特定の目的のために作った人工林は、実際に木の種類が少ない。そのため、植物をエサとする昆虫の種類にも影響がでているのではないか。
2	低地天然林は、虫の種類が多い。標高が低いところは酸素が多いから虫が生きられる。高地は、虫も高山病になるのかもしれない。虫にとっては標高が低い方が生きやすい。
3	低地の虫は、高地よりも多い。理由はわからないが、虫にとっては標高が低い方が良いと思う。
4	人工林で比べると、低地よりも高地の方が、木の種類が多かった。これは一見見ると原理的に違うようにも思うが、人が特定の目的のために作った森だから起こった結果だと思う。
5	高地の昆虫の種類には偏りがある。高地にある木の種類の影響を受けているのではないか。
6	人工林の木がそろっているのは、人が管理しやすいようにするためではないのか。 （あえてそのように操作しているのではないか？）
7	低地人工林（林業用地）には木がたくさんあったが、ありすぎて良くないことも起こっているのではないか？

５．まとめ

低学年の子どもたちは、棒グラフは学習済みでも、円グラフや割合計算は学んでいなかった例もあり、本プログラムはかなり難易度が高く、データの分析が困難であった班もあった。しかし、高学年では時間はかかったものの分析を行うことができ、調査の結果に対して「こうだからこうなる」という論理的な思考に基づいて、まとめ、考察ができていた。ただし、調査作業量や計算量が多く、そこに疲れを見せるなど、その点が負担であったことはたしかである。

そのため、高学年にとっては「学習済み単元を使用したプログラムであったが、計算量が多く、やや難易度の高いプログラム」であり、低学年にとっては「未学習単元が含まれ、データの計算は困難だが、考察は可能なプログラム」であったと考えられる。

中国の小学生は、放課後の学習時間が日本人よりも長く、同年代であっても、％（パーセント）計算や、円グラフなど、学習単元の一部を日本人よりも多く習得している傾向がみられた。そのため、プログラム提供者は、こうした文化的背景や学習内容等を考慮した、「目的」、「内容」の設定を検討していくことが、より良いプログラム作りにつながるものであると感じている。

さらには、中国において普段の科目学習量が多いが故に不足している可能性のある「情操教育」や「生活力なども含めた教育」などの分野を見つけ出し、そこを補っていく教育を目指すことも重要な要素の一つかもしれない。

海外の教育に携わる上では、参加者に対して適切な場を提供できるようにするために、こうした「文化の違いによる成長の差」を我々がしっかりと認識することが重要であり、国際的教育分野において今後求められるものであろうと考えている。

６．謝辞

本研究を行うにあたり全面的にご協力いただいた、上海 OEC コンサルティング株式会社諸氏、及びアンケートに回答してくれた日本、中国両国の子どもたちには、この場を借りて、厚くお礼を申し上げる。

引用文献

1)細田奈麻絵（2015）バイオミメティクス製品の開発プロセス、精密工学会誌、精密工学会、Vol.81 No.5 389-392

2)村上元気（2006）環境教育から持続可能性教育への展開に関する研究 -市民団体による活動の分析を中心に-。東京大学大学院新領域創成科学研究科。

3)小野木三郎（2013）今なぜ自然保護が必要か、日本自然保護協会資料集、日本自然保護協会、Vol.41 15-22

実践報告

北海道キャンプ協会が取り組む次世代へのバトンリレー
ー次世代野外教育指導者団体「えぞっぷ」ー

徳田真彦(北翔大学)、山田憲克(公益財団法人さっぽろ青少年女性活動協会)、木田貴浩(公益財団法人北海道 YMCA)、竹内健人(NPO 法人ネイチャープログラムデザイン)、中村隆(NPO 法人自然教育促進会)、長江孝(NPO 法人こども共育サポートセンター)、長江集子(NPO 法人こども共育サポートセンター)、村上彩奈(公益財団法人さっぽろ青少年女性活動協会)、山田啓貴(公益財団法人さっぽろ青少年女性活動協会)

Masahiko TOKUDA, Norikatsu YAMADA, Takahiro KIDA, Kento TAKEUCHI, Takasi NAKAMURA, Takashi NAGAE, Chikako NAGAE, Ayana MURAKAMI, Hirotaka YAMADA

１．はじめに

日本キャンプ協会公認指導者の推移を見てみると、キャンプディレクター、キャンプインストラクターともに登録者数は減少しており、2011 年には 2004 年時の半数にまで減少している [1)]。これは 2018 年現在も変わらず、登録者数は減少の一途を辿っている [2)]。さらに、資格の更新率は毎年 20-30%と非常に低い状況にある。この背景には、様々な要因が考えられるが、その一つに組織の世代交代がうまくいっていない事が要因として挙げられる。日本キャンプ協会が設立され約 50 年、先人達は各時代の要請に応えて、様々なキャンプ事業を展開してきた。筆者らは 2013 年から毎年、日本キャンプ協会主催の「Camp Meeting in Japan」 に参加しているが、ここ数年どのキャンプ協会も「世代交代を如何にして行うのか」について悩んでいる声が聞こえている。組織がより良いものとして続いていくためには、適切に組織内が循環していく事が必要であるが、そう考えていながらも、なかなか実践できていない現状があるように感じる。

北海道キャンプ協会ではそういった現状を打開すべく、2015 年に次世代指導者団体「えぞっぷ」が設立された。これにより、北海道キャンプ協会の組織全体の引継ぎが徐々になされてきており、若手の指導者も活き活きと活動し、北海道キャンプ協会の活性化にも繋がっている。本稿では、筆者らがえぞっぷメンバーとして経験してきた 3 年間を振り返り、えぞっぷの概要や活動内容、若手団体設立のポイントなどを報告したい。

２．えぞっぷとは

1992 年に北海道キャンプ協会が設立され、2012 年には設立 20 周年記念事業が実施されたが、その際に「これから」の北海道キャンプ協会を想い、理事や関係者の団体の若手を集め、記念事業の準備をしたことが始まりである。それから BUC 事業※1 や広報活動の企画・運営に若手が参画するようになり、各委員会の中に若手の委員を入れる体制も取られた。また、理事会と同日・同会場(部屋は別)にて若手ミーティングを実施し、すばやく連携を取れる状況を作ることや、その後懇親会を実施するなど、先人と若手の風通しのよい組織を目指した。2014 年には、後に紹介する北海道キャンプフェスタの走りである、「遊びのバイキング」が若手中心に啓発事業として実施され、若手の活動が充分に顕在化されてきたことで、団体設立の動きとな

った。2017 年には従前の常任理事に加え、「ユース養成理事」を置き、「えぞっぷ」の活動を支え、組織として育てられる体制を整えている。「えぞっぷ」の名前の由来は、北海道を表す「蝦夷(えぞ)」と、「キャンプ」を盛り上げていく「プロジェクト」のそれぞれの「プ」の文字を取り「えぞっぷ」と名付けられた。現在では、北海道キャンプ協会で行われる事業はえぞっぷのメンバーが中心となって実施されている。えぞっぷの魅力としては、①20 代から 40 代のメンバーで構成されているため、エネルギッシュかつ斬新なプログラムや事業が展開される、②約 8 団体から集まっており、様々な専門家と利用フィールドが確保できる、③「楽しく」「笑顔」が理念であり、各々が無理のない範囲で活動を行える、④北海道キャンプ協会の積極的なサポートを受けて活動ができていることなどが挙げられる。

3．活動内容

本章では、今までえぞっぷが実施してきた特徴的な活動を紹介する。なお、全ての活動はえぞっぷだけで活動しているわけではなく、北海道キャンプ協会の全面的なサポートを受けながら活動している。

1）北海道キャンプフェスタ

北海道キャンプフェスタとは、野外活動の普及と北海道キャンプ協会の認知度向上を目的とした啓発活動である。2015 年度までは「遊びのバイキング」との名称で実施されていたが、さらに広く北海道の野外教育指導者が関わるイベントとしたいという願いから、「北海道キャンプフェスタ」と名称を変えて実施された。主たる活動としては、北海道キャンプ協会に所属する会員及び団体が、それぞれの特色を活かした活動ブースを展開する形となっている。例年、活動ブースは、自然物を使ってクラフト活動を行うブースや、実際に野外活動を体験するブース、アウトドアクッキングを行うブース、野外装備の展示ブースなどが展開される。

2017 年度の活動を取り上げると、延べ 311 名の大人や子どもたちが足を運び、各ブースの体験活動を中心に大いに盛り上がった。小さな子どもたちは、輪投げやマグネット魚釣りといったレクリエーションに、小学生はツリークライミングやスラックラインなどに参加しており、発達段階やそれぞれの年代のニーズに合ったプログラムを提供することができた。また、会場を「定山渓自然の村」にて実施したため、施設を利用しているファミリーも多く参加し、北海道キャンプ協会を知ってもらう絶好の機会となった。運営は、キャンプ協会所属の 5 団体 26 名のスタッフが集まり、体験型ブースや調理ブース、展示型ブースを展開したが、どのブースも賑わいをみせ、円滑に運営を行う事ができた。各団体の垣根を越えて、ブースの手伝いや運営を行う事で、スタッフ同士のコミュニケーションがなされ、スタッフにとっても互いの団体を知り、自身の団体とは異なるスタイルの野外活動を知る事ができるような機会となった(写真 1,2)。

また、本稿を執筆している間に、2018 年度の北海道キャンプフェスタが実施され、延べ 350 名が参加した。例年参加者は定山渓自然の村の施設利用者が多かったが、今年度は、「北海道キャンプフェスタに参加しにきました」という参加者が多く、イベントを積み重ねる中で、少しずつ周知されている様子であった。以下、北海道キャンプフェスタの概要を載せるが、少しずつ規模が拡大している様子がわかる。今後も、少しずつでも規模を拡大し、多くの方にキャンプの楽しさを伝えていきたい。

①北海道キャンプフェスタ 2016
日時：2016 年 10 月 9 日(日)
時間：9:00-16:00
会場：定山渓自然の村
参加者：延べ 222 名

②北海道キャンプフェスタ 2017
日時：2017 年 9 月 30 日(土)
時間：13:00-16:00
会場：定山渓自然の村
参加者：延べ 311 名

③北海道キャンプフェスタ 2018
日時：2018 年 10 月 5 日(土)-6 日(日)
※5 日は準備
時間：13:00-16:00

会場：定山渓自然の村
参加者：延べ 350 名

（協力団体）
・NPO 法人自然教育促進会
・NPO 法人こども共育サポートセンター
・公益財団法人さっぽろ青少年女性活動協会
・北翔大学野外教育研究会
・公益財団法人北海道 YMCA
・NPO 法人ネイチャープログラムデザイン

写真１　キャンプフェスタ終了後の集合写真

写真２　スタッフ間の交流

2）キャンプミーティング等での団体紹介

第 6 回アジア・オセアニア・キャンプ大会および Camp Meeting in Japan2017, 2018 において、えぞっぷの団体紹介を実施した。Camp Meeting in Japan 2017 を取り上げると、えぞっぷの紹介動画およびポスター発表を行い、フロアを回る参加者 30 名ほどに団体紹介を行うことができた。さらに、団体紹介だけではなく、参加者からえぞっぷの課題に関する、アドバイスを頂くスタイルとなっており、「えぞっぷのこれから」に関して、たくさんの助言を頂くことができた(下記)。多くの参加者にえぞっぷの存在を知ってもらうことができ、さらには次世代の若手指導者団体ができている協会は全国的に見てもかなり珍しいことが明らかになり、「組織の引継ぎ」に関して全国をリードしていける体制が整っていることを、再認識する事ができた(写真 3, 4, 5)。

写真３　ポスター

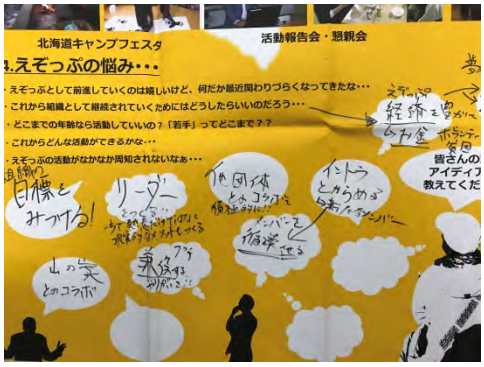

写真４　参加者からのコメント

写真５　発表の様子

(参加者からのコメント：組織をうまく継続していくためには)
・組織の目標を見つける
・リーダーをつくる。熱意だけではなく、現実的なメリットをつくる
・通常の業務と兼任している事から、所属するやりがいをつくる事が必要
・他団体とのコラボレーションを積極的に行う
・インストラクター養成事業と絡めて、新たなメンバーを集う(メンバーを循環させる)
・組織の経済を豊かにする(ボランティア貧困を作らない)
・助成金などをうまく利用する

3）活動報告会・指導者交流会

北海道キャンプ協会の会員資格を持つ指導者は北海道に多く存在し、その指導者たちは小学校、自然学校、企業などでそのキャンプスキルを生かして活躍している。この指導者交流会は、北海道の各地で活躍している指導者たちが集まり、交流を深めることにより、①仲間・同志を作る、②自分のキャンプスキルにさらに磨きをかけることを目的として毎年実施されている。2016 年の活動報告会では、プロジェクターやスクリーンを用いて各団体の活動が紹介され、団体事業案内、ボランティアの活動紹介、ボランティアコーディネートの実績報告、森のようちえんの実践報告、Leave No Trace の実践発表などが行われ、映像や写真を用いて説明がなされた。各報告に展開工夫や今後の課題、検討事項などがあり、各自の今後にむけた発展的報告会となった。

4． 若手団体設立・継続のカギ

ここでは、えぞっぷで活動をする中で感じた、若手団体設立のポイントについて述べる。若手目線の生意気な内容に見えるかもしれないが、ご了承頂きたい。

1）バトンタッチの意識を持つこと

えぞっぷが設立された最も重要なポイントは、北海道キャンプ協会の理事達(先駆者)が「バトンタッチ」の意識を持った事である。今日のキャンプ協会の課題に対して目を背けず、「協会の世代交代をどのようにして行うのか」に関して、積極的に考え、行動したことが今日のえぞっぷを創っている。しかし、ひとえに「バトンタッチ」といっても簡単なことではなく、理事全体で世代交代についての意識を持ち、一枚岩となって動いていくのは非常に難しいことである。先にも述べたが、北海道キャンプ協会では、理事会開催日に合わせて、えぞっぷミーティングを別室にて実施し、その後合流して交流会を設け、互いに決まったことを伝え合う企画を設ける等の努力をしている。

2）見守る気持ちを持つこと

若手の事業やイベントを任せるとなった時、先人達は手を出し、口を出したくなるものである。若手の至らない部分が目に付いて、気になってしまうことだろう。しかし一方で、若手からするとやりづらくなる要因となり、モチベーションの低下に繋がってしまうこともしばしばである。そういった一面からも、若手指導者を信じ、若手の企画や運営を出来る限り尊重するのが望ましい。しかし、ただやりたいようにやらせるのでは、経験知の少ない若手では、大きな失敗・事故に繋がってしまうこともある。そのため、活動のアウトラインは押さえつつも、若手の活動を「見守る」という意識が重要ではないだろうか。

3）若手指導者同士の交流の場となること

どの組織にもいえることであるが、組織を存続していくためには、「信頼」が基盤にある必要があるだろう。いかに組織を存続させようと思っても、活動が苦痛なものや、重荷となるようなものであっては、長続きしない。そのため、組織化した場合も焦らず、親睦会や事業を通し交流していく中で、少しずつ若手指導者同士の「信頼」を育んでいくことが必要である。えぞっぷ設立時も、互いの信頼関係を育まないまま、企画や事業を行うことを先行してしまい、若手指導者同士の不信感が高まってしまったこともある。設立の最初の段階では、親睦会や交流会といった場を積極的に設け、コミュニケーションを取りやすい環境づくりから入るのも良いだろう。しかし、グループダイナミクスの理論にもあるように、時には互いの価値観や考えをぶつけ合うような時も必要である

(Storming)(図 1)。くれぐれもただの仲良しグループとなってはいけない。そうした段階も経て、互いの事を知り、尊重し合える状況を作ることで、組織内の信頼関係はより強固なものとなる。組織に居る事で、新たな体験や学び、楽しさといった経験をし、組織に対して帰属意識やロイヤリティを高めることが出来ていくと、長続きする組織として活動することができるだろう。

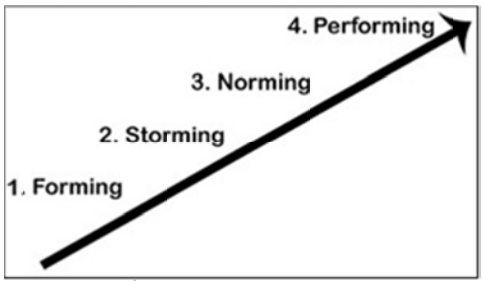

図１　Group Development

４）新たな魅力を創生すること

前述したが、ただ交流を深めるだけの組織ではなく、キャンプ協会の理念の基、活動していける組織でなくてはならない。若手ならではの斬新なアイデアから、新たなイベントや研修会といった「チャレンジ」をしていくことが大切である。そうでなければ、「若手」ならではの魅力が生まれず、魅力ある組織に繋がらない。また、どのような結果になるにしろ、チャレンジをしていくことが、組織にとっても、若手指導者にとっても前進するエネルギーとなり、失敗や成功から多くの学びが生まれる。何より、自分達で一から創り上げていく体験は、大きな達成感を得る事ができ、次なるエネルギーに繋がることだろう。若手の中で生まれる、新たな価値がキャンプ協会へ新たな風を吹かせ、組織へのロイヤリティを高めることに繋がるだろう。

５．えぞっぷメンバーの声

ここでは、実際にえぞっぷに所属しているメンバーからの声を載せたい。「入った理由」、「入ってよかったこと」に関する内容であるが、前章に続き、組織設立や継続する為のヒントが隠されているように感じる。参考にご覧頂きたい。

１）えぞっぷに入った理由(抜粋)

・*最初は、私の職場で北海道キャンプ協会の事務局を担当することになったことがキッカケでした。事務局として様々な業務に携わる中で、近い年齢の人たちと一緒に活動することが多くなりました。そして若いメンバーの集まりを作って活動しようと声が上がったので、「やります」と手を挙げて、えぞっぷに入りました。*

・*キャンプ協会の理事からのお誘いからでした。若いからこそチャレンジできる、そんな指導者団体だと思っています。*

・*まったく無関係のところから野外の現場に入り、右も左も解らなかったときに誘われたのがきっかけです。尊敬する野外の先輩から誘われたので、公私に通ずるよいことがあるだろうと思い入りました。*

・*キャンプインストラクターの資格を取得してから、BUC に参加する機会があり、若手メンバーの方が中心となり楽しい雰囲気の中で迎え入れて頂きました。その事がきっかけで自分も関わりたいと思い参加するようになりました。*

・*20 周年事業に参加したことがきっかけで、会議や様々な場面で声をかけて頂くようになりました。いつの間にか若いメンバーで事業を進めるようになり、今に至ります。*

２）えぞっぷに入って良かった事(抜粋)

・*面白い人たち、パッション溢れる人たち、野外活動に真剣に向き合い活躍している同年代の人たちや先輩方と一緒に活動していると、自分も感化されて色んな人たちからエネルギーをもらうことができます。見える世界もとっても広がります。感動することもいっぱいです。えぞっぷに入らなければ、このような人たちに出会うことはできなかったでしょう。*

・*そこに関わるメンバーと一緒に活動することで、刺激になっています。北海道という自然豊かなフィールドで、同年代と関わりをもてることは公私ともに励みとなっています。自分が成長できる場のひとつだと感じています。*

・*まだアウトドアという生き方が染みついてい*

ないので、仕事だけでアウトドアに向き合っていると、たまにアウトドアへの思いが面倒臭い作業（経理とか事務とか）と同じカテゴリに沈んでくることがあります。そんな時にえぞっぷがあると、皆さんの様子からアウトドアは楽しむべきものだということを思い出しますし、自分がアウトドアのほんの浅瀬で沈没しかかっていることに気づいて反省し、何とかせねばと思います。

・*野外活動に関わる同年代の指導者と出会うことができ、交流を重ねる中で膝を突き合わせて話が出来る仲間を得ることができました。えぞっぷの活動を通して様々な団体の方と一緒になる機会が多くなり、野外活動に関わる情報や意見交換出来る事が自分の仕事へ繋がっています。*

・*なまら魅力的な仲間がいます。情報交換はもちろん、悩みを聞いたり本音で話したりときに切磋琢磨するそれがえぞっぷです。毎回のミーティングが楽しみで、会う度に刺激をもらいます。*

６．さいごに

これまで、えぞっぷの設立や活動内容、設立のカギなどを述べてきたが、筆者らがえぞっぷの一員として最も感じているのが、理事(先駆者)達への「感謝」である。若手を信じ、尊重し、若手の考える事業への支援、活動資金の提供など、全力でカバーをしてもらっている。そういった大きな支えがあるからこそ、若手の中での活動も様々な可能性を持って、活き活きと行うことができていると感じる。先駆者達の「想い」を感じつつ、若手指導者達もその想いに応えたいと強く思うことで、さまざまな活動に対して積極的に取り組めているように感じる。一方通行の想いだけではなく、先駆者、若手が互いにバランスを取り合い、より良い関係性の中で活動していくことが大切であり、そういった「想い」の繋がりが世代交代への大きなエネルギーとなるのではないだろうか。もしこれから世代交代を検討する協会や団体、動いているがうまくいかない現状があれば、ぜひ改めて考えて欲しい。その「想い」は相手に適切に届いているだろうか、相手の「想い」を受け取れているだろうか、互いの「想い」の繋がりはあるだろうか。

参考資料

1) 野澤巌(2011)：キャンプ白書 2011,社団法人日本キャンプ協会,p35
2) 日本キャンプ協会会員数統計(未公刊).
3) 北海道キャンプ協会(2017)：北海道キャンプ協会 2016 年度活動報告書,2017.6.6.
4) 北海道キャンプ協会(2018)：北海道キャンプ協会 2017 年度活動報告書,2018.5.31.

注釈

※1 BUC(Brush up & Communication)事業とは、日本キャンプ協会が認定した、日本キャンプ協会および都道府県キャンプ協会が実施する事業である。この事業に参加することで、新しい知識・情報を得ることや、キャンプにかかわる人たちとのネットワークを築くことができる。

実践報告

野外教育分野を学ぶ学生ネットワークが果たす新たな「学びの場」としての機能
ー「大学間交流スキーキャンプ」の活動報告ー

徳田真彦(北翔大学)、佐藤冬果(筑波大学大学院)
Masahiko TOKUDA, Fuyuka SATO

1．はじめに

進路選択や学修活動において、同じ分野を学ぶ学生同士の繋がりは大きな影響力を持ちうる。特に、キャンプなどの一人では為し得ない活動を多く行う我々の分野においては、人との繋がりが卒業後の活動を決定づけることすら考えられる。

数年前に大学院生であった筆者らは、キャンプや野外教育を各地の大学で学ぶ学生間の交流の少なさに問題意識を持っていた。全国各地の大学で、担当教員の専門性や地域の特色を活かした授業や課外活動が展開されているが、その知識や技術、経験を共有する場は「日本野外教育学会」や「日本キャンプミーティング」などに留まっていた。またそのような場でも、学生同士の交流や情報交換をする時間は限られており、「共に活動する」機会も少ない状況であった。そこで、学生が気軽に交流でき、さまざまな情報交換が出来る場を作ることを目的に、「全国野外教育学生ネットワーク」を立ち上げ、様々な活動を行ってきた。本稿では、本ネットワークの代表的な活動である「大学間交流スキーキャンプ」を紹介する。

2．大学間交流スキーキャンプ

2．1．大学間交流スキーキャンプとは

「大学間交流スキーキャンプ」（以下、交流スキー）は、①全国の野外教育に関する分野を学ぶ大学生・大学院生同士の交流を深めること、②スキー技術の向上を目的に、2014 年 12 月より計 6 回開催されている（表 1）。全て 1 泊 2 日で行われており、日中はゲレンデでのスキー、夜はコテージでの交流会が主なプログラムである。参加者募集については Facebook 上のページ「全国野外教育学生ネットワーク」を通じて各大学へと周知し、これまでに延べ 91 名の参加が得られている。

表 1　過去 6 回の交流スキーキャンプ実施概要（所属等は開催当時のもの）

第1回
日時：2014年12月6日−7日
場所：長野県エコーバレースキー場
企画運営：佐藤冬果(筑波大学大学院)
参加人数：7名
参加大学：大阪体育大学、筑波大学、びわこ成蹊スポーツ大学
指導担当：佐藤冬果(筑波大学大学院・SAJ準指導員)
山川晃(筑波大学大学院・SAJテクニカル)
他、それぞれの参加者が1コマずつ担当

第2回（関西地区限定開催）
日時：2015年3月18日−19日
場所：兵庫県ハチ・ハチ北スキー場
企画運営：徳田真彦(大阪体育大学大学院)
参加人数：6名
参加大学：大阪体育大学、京都教育大学、びわこ成蹊スポーツ大学
指導担当：津々木健香(びわこ成蹊スポーツ大学大学院・SAJ1級)
田渕洋勝(大阪体育大学・SAJ1級)

第3回
日時：2016年1月5日−6日
場所：長野県エコーバレースキー場
企画・運営：佐藤冬果(筑波大学大学院)、徳田真彦(大阪体育大学大学院)
参加人数：14名
参加大学：大阪体育大学、敬愛大学、千葉大学、筑波大学、東京女子体育大学
指導担当：佐藤冬果(筑波大学大学院・SAJ準指導員)
谷中理矩(千葉大学・SAJ準指導員)

第4回
日時：2016年3月2日−3日
場所：長野県エコーバレースキー場
企画運営：髙橋宏斗(大阪体育大学大学院)
参加人数：15名(内1名外部講師)
参加大学：大阪体育大学、仙台大学、千葉大学、筑波大学、目白大学、山梨大学
指導担当：茨城県デモンストレーター(SAJ指導員)
佐藤冬果(筑波大学大学院・SAJ準指導員)
谷中理矩(千葉大学・SAJ準指導員)

第5回
日時：2017年3月15日−16日
場所：長野県エコーバレースキー場
企画運営：川田泰紀(仙台大学大学院)
参加人数：23名(内1名外部講師)
参加大学：大阪体育大学、信州大学、仙台大学、筑波大学
指導担当：山形県デモンストレーター(SAJ指導員)
佐藤冬果(筑波大学大学院・SAJ準指導員)
谷中理矩(SAJ指導員)

第6回
日時：2018年3月14日−15日
場所：長野県ブランシュたかやまスキーリゾート
企画運営：角谷俊樹(大阪体育大学)
参加人数：26名(内1名外部講師)
参加大学：大阪体育大学、仙台大学、筑波大学、東京学芸大学、びわこ成蹊スポーツ大学
指導担当：SAJデモンストレーター(SAJ指導員)
佐藤冬果(筑波大学大学院・SAJ指導員)
谷中理矩(筑波大学研究生・SAJ指導員)

２．２．運営体制について

初回は筆者らが中心となって運営したが、それ以降は交流スキー終了時、次回開催の担当大学を相談の上決定し、プログラム係、食事係、装備係などの役割を担当大学に所属する学生が担うことで運営されている。これまで、第１回筑波大学、第２・３・４回大阪体育大学、第５回仙台大学、第６回大阪体育大学が担当した。次回第７回を筑波大学が担当予定である。開催日程の調整から、宿泊地の予約、食事や装備の計画準備、そして当日の運営など、大学院生のみならず学部生にとっても、キャンプ運営のマネジメント技術をトレーニングする場になっている。

２．３．スキー指導体制について

スキーレッスンは、2014 年には全日本スキー連盟(以下、SAJ)の指導者資格やテクニカルプライズを持つ院生が中心となりつつも、講師役を数名の参加学生が分担して担い、指導技術のトレーニングの場としての運営がなされた。2016 年３月開催の第４回交流スキー以降は、SAJ の級別テストを開催することとしたため、SAJ 公認の検定員資格を持つ指導者を３人以上揃える必要があり、それ以降は有資格者(指導員・準指導員)である院生や、ゲスト講師(茨城県デモンストレーターや SAJ デモンストレーター)による本格的なレッスンが展開され、さらなる緊張感と目的意識を持って取り組めるようになっている。級別テストの開催申請等は、検定員を務める大学院生が所属するスキークラブを通じて行っている。

レッスンは３グループ程度のレベル別小グループに分かれて行われる。この大学の垣根を越えた少人数での活動は、レッスン中に多くのコミュニケーションが生まれ、互いの個性に触れる機会になっている。さらに身近な存在である大学院生が有資格者として指導役を担うという構図が刺激となり、更なるスキー技術の向上や指導力向上の意欲を生むことができている(写真 1,2)。

写真１ 講習は少人数で和気あいあいと行われている

写真２ 検定会は厳正に行われ、緊張感が漂う

２．４．交流会について

夜の交流会は、宿泊するコテージを利用し、夕食の自炊をしながら進められる。その際には、食材の配布方法等にゲーム性を持たせ、より交流が促進されるように展開されている。日中のスキーレッスンでの濃密な時間が、夜の交流会でのスムーズなコミュニケーションや自己開示に役立ち、互いの距離感を縮める良い機会となっている。個人的には、交流会で学生同士が夢を語る時間や、野外教育の今後を語り合う時間は、何にも代えがたく、これからのエネルギーを生む時間となっているように感じている(写真 3,4)。

写真３　コテージを貸し切り、夕食を自炊することで交流が深まる

写真４　大学や学年の壁を越えて話ができるのが特徴だ

３．　大学間交流スキーキャンプの成果

３．１．参加者の感想

交流スキーの終了後には、活動記録や食料・会計報告、参加者の感想をまとめた報告書を作成している。参加者全員の感想を載せることができないのが非常に残念だが、その報告書に載せられた学生たちの感想を抜粋して紹介する。交流スキーの意義は、やはり参加者の感想から読み取れるように感じている。

「今回初めて交流スキーに参加したが、自分自身が想像していたものとは大きく異なったものだった。私は『交流スキー』がスキーの技術を高めるためだけのものであると考えていたが、それだけが目的ではなく、大学の壁を越えてみんなで輪を広げていくというものを肌で感じる中で、改めて『交流スキー』の概要を理解しその重要性を感じた。プログラムのメインであるスキーの講習では、年齢差がないことが環境として良かったと感じる。お互いにできていた点や、できていなかった点について話し合ったり、アドバイスをもらったりする中で自分の技術を高めていくことができたと感じた。」

（2018 年参加者、大学生、女性）

「あっという間に終わってしまった交流スキーキャンプは、もうあれから 1 週間たったというのに、未だ興奮冷めやらぬ幸せな時間でした。お互いに刺激を受けながらのスキー講習もさることながら、熱い想いをもったみんなとの出会いが、私には何よりも意味深いものでした。私が好きなこと・もっと深めたいと思っていることを、もっともっと本気で極めて楽しんでいる仲間がいることを肌で感じられてとても嬉しかったです。野外の分野の学びも深まり、世界観や可能性が広がる有意義なキャンプだと心から感じています。」

（2018 年参加者、大学生、女性）

「今回の交流スキーキャンプに来たメンバーの多様な個性にも驚かされ、とても良い刺激になった。そして、価値観や人間観、文化的な違いを持ってはいるが、野外運動好きというところはみんな変わりがない。そんな人間がこれだけ集まるととても楽しいし、充実した時間を過ごすことができるのだ。個人的に、登山へ行こう、スキーへ行こう、キャンプをしようなどと次の予定もたくさんでてきて嬉しかった。そこでさらに、個人的だけでなく全体としてこの大学交流キャンプが、スキーだけでなく、夏の実践的なキャンプや色々な活動に繋がって行くともっと面白いと思う。まとめると、大学交流スキーキャンプは、スキーのレベルアップに最適なのは言うまでもなく、野外の同じ興味を持った、あるいは新しい興味・発見をくれる仲間がたくさんできる場所で、自分もまた帰ってこれたらと思う。スキーキャンプのお誘いを受けて、迷ってる後輩がこれを見ていたらぜひ参加をお勧めする。」

（2018 年参加者、大学生、男性）

「『学生間の交流』に関しては、個人的にとても大切にしています。他大学の人が日頃どのような活動をしているのか、野外教育にどういう想いを持っているのか、環境や大学が違えば当然違う。その違いを共有しあえる『場』が重要だと思っていて、このキャンプはその『場』になっています。」

（2017 年参加者、大学院生、男性）

「私は今回、初めて大学間交流スキーキャンプに参加しました。私の周りの交流スキー経験者からは『交流スキーでスキーの楽しさが分かった』や『知り合いが増えるし楽しい』など、交流スキーの事をよく聞いていましたが、ほんまかなー?と半信半疑の自分がいました。しかし、いざ交流スキーが始まると、色んな場所から様々な人が集まっていて、さらにスキーがみん

な上手い！さらに講師陣がとても豪華で、周りの言っていた通り、刺激的で楽しいキャンプでした。このキャンプで他大学のスキーのレベルを知って勝手に焦らされています。これからは、もっと練習して、自分自身のレベルアップを目指し、もっとこの経験を後輩に伝えたり、教えたりして、自分の大学のレベルを上げていきたいと思います。」

（2017 年参加者、大学院生、男性）

「これから野外に携わって行く者として、野外に本気で取り組んでいる学生との交流は、これから自分自身が野外に対してどのように関わって行きたいかを考えさせられる機会となり、頑張っている人の姿を見ることは、自分も頑張らなくては、と実感する場となりました。今回のスキーキャンプを通して、野外に関してまだまだ何も知らないことを痛感しました。その分、勉強したいという意欲は強くなり、不安と同時にこれからの野外活動に期待が膨らんでいます。」

（2017 年参加者、大学生、女性）

「大学の部活として野外というフィールドで活動しているとはいえ、自身の大学の外で野外の活動、野外教育を専門としている人たちと交流を持つのは簡単なことではないように感じ、交流できるよう行動することそのものが少し億劫になっていました。でも今回のキャンプでたくさんの方々と交流を持つことができて、「繋がり」を持つことの素晴らしさを体感しました。…将来、院に進みたいとか、こうなりたいとか明確な目標もない私ですが、熱い気持ちをもった方たちに出会えて自分の将来について考えてみようと思えました。」

（2016 年参加者、大学生、女性）

「自分は、野外活動が好きであると同時に人と関わることが大好きです。今回のキャンプでは、両方体験することができ、大満足の 2 日間でした。色んな人と話をすることで自分が知らない知識や、世界を知ることができました。こういった機会は中々なく、参加して本当に良かったです。…私には、大きな夢があります。それは、野外活動を通じて日本の教育を変える事です。…今回のキャンプで、夢を叶えたいとより一層思うようになりました。」

（2016 年参加者、大学生、男性）

３．２．目的に対する成果

これまでの交流スキーをふりかえり、実施目的である①全国の野外教育に関する分野を学ぶ大学生・大学院生同士の交流を深めること、②スキー技術の向上の 2 点について、どのような成果があったのかを述べたい。

１）全国の野外教育に関する分野を学ぶ大学生・大学院生同士の交流を深めること

前節に示した参加者の感想からわかるように、交流スキーが、ただスキー技術の向上を目指す場に留まらず、学生間の交流の中で互いに刺激を受け、世界観の広がりや野外教育分野への熱意が生まれていることは言うまでも無い。日中のスキー講習では、楽しみながらも互いにスキー技術を高め合い、時には焦りや悔しい気持ちも持ちながら、切磋琢磨することで、ライバルのような関係性を育むことができているように感じる。一方、夜の交流会では、楽しく穏やかな雰囲気の中、自身の野外経験や夢、時には野外教育の未来について語りあうことなど、心を開いて本心で打ち解けあい、同志としての関係性を築けているように感じている。この、同志でありライバルのような関係性が構築されることが、真の意味での「交流」であり、これからも交流スキーが目指すところである。そして、この場での交流が、「日本野外教育学会」や「日本キャンプミーティング」での交流をより密なものにし、積極的に学生による活動が行われるようになった。実際に、交流スキーをきっかけに第 19 回日本野外教育学会では学生による自主企画シンポジウムが開催されるなど、活動の発展をみせている。

２）スキー技術の向上

SAJ 指導員や全日本技術選出場選手から少人数で講習を受けることによって、参加者のスキー技術は大きく向上している。実際に、過去に 3 回行われた級別テストでは、1 級に 5 名、2 級に 18 名、3 級に 4 名が合格している。過去、2 級に不合格となった参加者が交流スキーへの

参加を続け、2 級、そして 1 級を取得した例もある。

スキーは冬季の野外活動のなかでも主要な活動の一つであり、野外教育の指導者にとって、その技術やその指導技術が求められる場面も多い活動である。大学のスキー実習やゼミ合宿で専門性をもった教員から講習を受ける機会もあるが、金銭的に余裕があるとは言えない学生は、多くの場合「自己流」での練習や、先輩などの身近な「自分より上手な人」からの指導によって技術向上を試みることが多くなってしまう。しかし、それらには間違った理解や、専門性の欠如のリスクは否定できない。年に 1 度だけでも、SAJ 指導員や SAJ のデモンストレーターから指導教程に則った指導を受ける機会を確保することは、野外活動を専門に学ぶ者としての専門性を保証することに繋がるだろう。

４．これからの活動に向けて

表 1 でも示した通り、年を追う毎に参加大学や参加人数が増加している。今後も規模を拡大しつつ、多くの学生がスキーの技術を高め、信頼関係を深め、野外の夢を語る場となるよう、そして、その場が自己研鑽への意欲に刺激を与える場となるよう、実施していきたい。そのために、今後の交流スキーの発展に向けて、2 つの点を検討している。

４．１．講習の在り方の多様化

現在の交流スキーにおけるスキー講習のスタイルは、SAJ の指導者資格を持つ院生や外部講師として招請したデモンストレーターが講師となって実施されることが多くなり、講師が固定化されつつある。開催当初は、各大学の院生や学部生が交代しつつ講習を担うようなスタイルであったが、級別テストの実施に伴い、スキー技術向上への意識が高まり、現在のスタイルに至っている。これは、スキー技術向上という点では非常に効果的で、事実、級別テストにも多くの合格者を輩出し、交流スキーの意義を高める一つの魅力となっている。しかし一方で、交流スキーの良さである、様々な大学の指導スタイルを知る機会や、多様な指導方法・スタイルを学ぶ視点では、現在の講習方法は適さない。2017 年より SAJ の「公認スキーバッジテスト規程」が改訂され、バッジテスト取得者の指導活動の禁止が明記されたことも含め、今後は、これらの指導の在り方のメリット・デメリットを改めて参加者間で考え、交流スキーの価値や意義を高められるよう、バランスを考えながら実施しなければならない。

４．２．新たな交流の場の醸成

現在は、年 1 回の「交流スキー」に留まっているが、今後はスキーだけではなく、各大学の強みを活かした様々な野外活動を実施していく事で、より魅力的な「交流」がなされるのではないかと考えている。現在は、指導者の立場として活躍する大学が固定されつつあるが、登山活動、水辺活動、クライミングなど、各大学が強みとする活動を実施していくことで、参加者にとっては野外活動の世界観を広げることや、技術を高める機会となり、担当者にとっては、大学の活動を紹介する場やアピールする場にもなる。同時に、同世代が活躍する姿を見るのは刺激となり、参加した後も自身の知識や技術を向上させる原動力となるだろう。また、それぞれの大学の強みが分かることで、野外活動を実施する際に協力を仰ぐことや、相談をすることなどが可能になり、協力体制が強固になることで各大学の野外活動の可能性も広がるのではないだろうか。

５．さいごに

これまでの活動を振り返ると、多くの学生達は、学生なりにも多くのことを感じ、野外に対して期待や夢、不安や課題を持っている。だからこそ、同様の想いを持つ仲間や同志がいることに気付くことが重要であり、一人では不安な事も、仲間がいることで、大きな勇気となり前に進むエネルギーが生まれる。本ネットワークの活動は Facebook ページにて公開しているので、興味を持たれた方は、ぜひ参加して頂きたい。この場が、夢を持つ者、悩んでいる者、技術を高めたい者、仲間を作りたい者、様々な学生や若者にとって、大きなエネルギーを生む場となることを目指し、これからも開催していきたいと思う(写真 5)。

写真５　2018 年は最大の 26 人が参加した

連絡先
【徳田真彦】
北翔大学生涯スポーツ学部スポーツ教育学科
〒069-8511　北海道江別市文京台 23 番地
TEL:011-387-3963(研究室番号)
mail: msahiko1126@yahoo.co.jp

【佐藤冬果】
筑波大学人間総合科学研究科　大学体育スポーツ高度化共同専攻
〒305-8574　茨城県つくば市天王台 1-1-1
mail: fuyurin.sato@gmail.com

【全国野外教育学生ネットワーク】
全国野外教育学生ネットワーク Facebook
(https://www.facebook.com/yagaigakusei/)

実践報告

子どもの野外体験活動を促進する「鬼ごっこ遊び」の実践とその成果

谷正之(体験活動協会ＦＥＡ)
Masayuki TANI

１．はじめに

青少年の社会的自立を促すため、2010 年 2 月、体験の風をおこそうフォーラム実行委員会が、「青少年体験活動推進宣言」を全国に向けて表明した。

また、2013 年 1 月、文部科学省中央教育審議会から「今後の青少年の体験活動の推進について」の答申が出された。その中で、体験活動が青少年に与える様々な教育的効果や発達段階に応じた効果的、具体的な体験活動について、明らかになってきていること。国や地方公共団体のほか、地域・学校・家庭・民間団体・民間企業等それぞれの立場で自らの役割を適切に果たし、連携していく必要があること[1)]が述べられている。

これらのことから、キャンプなどの野外活動指導者への期待も高まり、果たす役割も大きいものがあると言える。

最近、不特定多数の子どもを対象とする宿泊型の活動について、旅行業法の関係から開催が難しい状況が、全国各地で見受けられるようになってきた。不特定多数ではなく、会員への事業であれば問題がひとまず解決するため、日帰り活動の会員、または日帰りにしか参加しない会員を、宿泊を伴う活動へ導く方法も考えられる。

そこで宿泊型野外体験活動への参加を促す手段として、日帰り型野外体験活動の中に「鬼ごっこ遊び」を取り入れた。その成果について報告する。

２．日帰り型野外体験活動の概要

「子ども創意工夫塾」の事業名で、2004 年から毎年開催している体験活動協会ＦＥＡ（以後「ＦＥＡ」と略す）主催の日帰り型野外体験活動である。2018 年現在、福岡市およびその周辺市町の、都心部にある豊かな自然が残る公園などを会場とし、9 コース開講している。ねらいは、野外で楽しく創造的な活動をしながら、健康なからだと、子どもの人間力を育むことに置いている。

ここでいう「人間力」とは、生きる力の基盤とし、「気力、体力、想像力、行動力、忍耐力、判断力、適応力、そして道徳心、向上心の総体」と捉えている。

開催期間はどのコースも 8 月を除く、当年 5 月から翌年 3 月の土曜日または日曜日の月 1 回の定例活動で、各コース年間 10 回実施している。対象は、幼児から小学 6 年生である。基本的に毎回同じ流れ（表 1）で進めている。

表１　基本的な１日の流れ

□スタッフ・学生ボランティアリーダー打合せ（駅改札口集合 9:15）
□受付／参加者集合（駅改札口）
□開会（10:00）
□道草歩き（夢を膨らませる）
□活動場所到着
□鬼ごっこ遊び
□お話し（イメージ誘導）
□班編成（自由選択）
□本日のテーマ活動（適宜昼食）
□うれしい休憩（おやつ、鬼ごっこ遊びなど）
□１日のふりかえり
□道草歩き（余韻を楽しむ）
□閉会（15:30 駅改札口帰着／保護者への報告）
□解散

今回は、2016 年に開催した太宰府校（福岡県太宰府市）における、鬼ごっこ遊びの成果について報告する。なお、1 回あたりの子どもの参加人数は平均 19 人（男子 11 人、女子 8 人）であった。それに対し、統括するディレクターは筆者が担い、ＦＥＡスタッフ 1～2 人、ＦＥＡ福岡学生リーダー会の学生ボランティアリーダー（以後「リーダー」と略す）6～8 人の指導体制で、テーマ活動（表 2）に臨んだ。

表２　年間活動のテーマ

月	テーマ内容
5 月	野原で遊ぶ
6 月	遊び場を作る
7 月	川で遊ぶ
9 月	生き物を探す
10 月	基地を作る
11 月	作って遊ぶ
12 月	探検する
1 月	火をおこして食べる
2 月	旅をする
3 月	テーマを決めて挑戦する

３．保護者の期待と子どもの期待

事業開始前、保護者を対象にアンケート調査を行った。その中の一部を紹介する。回答方法は自由記述とし、保護者との会話から得た情報も参考にしながら、意見を集約し、見出しをつけてまとめた。数値が高いものが優位とは限らないが、それぞれの期待感を知るうえでは参考になると言える。

保護者が期待していること（表 3）では、活動自体を楽しむ、野外活動の知識や技術を身につける、自然に親しむといった自然体験活動自体への期待は、全体の 6.9%であった。協調性や社会性を学ぶ、自ら行動できるようになるなど、自然体験活動を通して、体力、想像力、行動力、忍耐力、判断力、適応力、道徳心、向上心など、子どもの「人間力」の向上に関する期待の方が高かった。

子どもが期待していること（表 4）では、「作る」、「遊ぶ」、「食べる」、「探す」という要素を含む活動は全体の約 7 割を占めた。子どもの方は、自然体験活動自体を楽しむことへの期待が高かった。また、みんなで活動すること、スタッフ・リーダーとの出会い、新しい仲間との出会いなど、人との交わりを楽しみにしている子どもも全体の 2 割近くいた。

これらのことから、保護者と子どもでは、自然体験活動の捉え方と期待感が異なることが分かる。

表 3　保護者が期待していること

項　　目	計
1. 協調性や社会性を学ぶ	24.9
2. 自ら行動できるようになる	18.0
3. 人の輪を広げる	8.5
4. 体験からいろいろ学ぶ	7.9
5. 自信をつける	5.8
6. 体を動かす楽しさを知る	5.8
7. 視野を広げる	3.7
8. 活動自体を楽しむ	3.7
9. 思いやる心を育む	3.2
10. 感性を磨く	2.6
11. 学校や家庭で学べないことを体験する	2.1
12. 野外活動の知識や技術を身につける	2.1
13. 創造力を向上させる	2.1
14. 元気な子になる	1.6
15. 自分のことは自分でできるようになる	1.6
16. 自然に親しむ	1.6
17. 安全と危険を理解する	1.6
18. 判断力を身につける	1.1
19. 生きる力を養う	1.1
20. 集中力を高める	0.5
21. 長所を伸ばす	0.5
22. 優しさを身につける	0.5
計	100.0

※単位：%（小数点以下四捨五入）

表 4　子どもが期待していること

項　　目	計
1. ものづくり	28.9
2. 水遊び	10.8
3. 生き物探し	10.2
4. 外遊び	9.0
5. みんなで活動すること	9.0
6. 作って食べる	7.2
7. スタッフ・リーダーとの出会い	5.4
8. 新しい体験	5.4
9. 新しい仲間との出会い	4.2
10. 探検	3.6
11. すべての活動	1.8
12. 目標を決めて挑戦すること	1.8
13. 知識・技術の習得	1.2
14. 親から離れて活動すること	1.2
計	99.7

※単位：%（小数点以下四捨五入）

４.「鬼ごっこ遊び」とは

鬼ごっこやスポーツ鬼ごっこと同一のものではなく、鬼ごっこ遊びを「野外で、だれもが、幼少年期に、時代を問わず、からだを動かし、お互いの人間力を高め合える、子や鬼になって競う、仲間遊び」と定義した。その月の活動場所に到着した時、うれしい休憩の時間、および活動と活動のあいまに、スタッフやリーダーが指導した。

５.「鬼ごっこ遊び」の選定基準

適正な遊びを選出するにあたり、次の10項目を重視した。

（１）原則として屋外で行うもの（屋外優先）
（２）何回でも遊びたくなるもの（反復歓迎）
（３）人格形成に悪影響をおよぼさないもの（人格向上）
（４）ルールを臨機応変に変えられるもの（規則応変）
（５）からだを動かすもの（身体躍動）
（６）すぐに遊べるもの（幼少即行）
（７）子どもだけで遊べるもの（運営自発）
（８）つねに遊びに加わっているもの（全員参加）
（９）特別な用具を必要としないもの（道具不問）
（10）子ども同士の触れ合いがあるもの（交流直接）

６.「鬼ごっこ遊び」の基本30種目

下記の事柄を、鬼ごっこ遊びの選定基準に照らし合わせ、基本の30種目（表5）を選出した。

（１）昔から一般的に伝承されてきた遊び
（２）ＦＥＡのキャンプなどで指導している遊びと参加者の反応
（３）ＦＥＡスタッフが小学校で定期的に指導している遊びと参加者の反応
（４）筆者が福岡で幼少年期に経験した遊び

また、福岡という地域性に配慮し、福岡の小学校体育研究会が36年前にまとめた書籍[2)]も参考にした。なお、いろいろな呼び名があるものは、名称を統一した。

遊び方については、体育的ならびに教育的効果があるよう改善したものもある。例えば「12.助け鬼」と「ケイドロ」はよく似ている。しかし、前者の方が鬼に捕まった仲間を助けるという点において道徳心が育まれるので、こちらを採用した。「18.だるまさんがころんだ」は、行動体力が発達するよう、いかに鬼にタッチするかを遊び方のポイントに置いた。「20.ねこどん」、「21.にくだん」は対抗ゲームだが、子と鬼に分かれ、子ども達だけで遊べるようにアレンジした。

表5　鬼ごっこ遊びの基本30種目

［１］交替する遊び（単純型）：5種目 1. 鬼ごっこ 2. じゃんけん鬼 3. 伝染鬼 4. ところてん 5. 影ふみ	［５］挑戦する遊び：4種目 18. だるまさんがころんだ 19. 十字鬼 20. ねこどん 21. にくだん
［２］交替する遊び（安全地帯型）：6種目 6. しゃがみ鬼 7. 色つき鬼 8. 高鬼 9. 木つき鬼 10. 宿かえ 11. 島鬼	［６］子を取る遊び：2種目 22. 花いちもんめ 23. 子取り
［３］助ける遊び：3種目 12. 助け鬼 13. 氷鬼 14. ひょうたん鬼	［７］鬼が増える遊び：3種目 24. 手つなぎ鬼 25. 分裂鬼 26. 増え鬼
［４］隠れる遊び：3種目 15. かくれんぼ 16. まるかいてちょん 17. 缶けり	［８］輪になっての遊び：4種目 27. かさなり鬼 28. ケンケンがえ 29. かごめかごめ 30. 通りゃんせ

最終的に、小学生を対象とする2泊3日の鬼ごっこ遊びキャンプの中で、遊びの種目と遊び方を検証し、適正と思われる遊びを 30 種目選定した。なお選定した種目が、必ずしも全国的に最適なものとは限らない。

7.「鬼ごっこ遊び」の基本的な進め方

太宰府校の中で鬼ごっこ遊びを指導するときは、基本的に次の順序に従い進めた。

（1）子どもを集める（関心をもたせる）
大きな声で「1→10」まで数をかぞえる。
希望者だけを募るときは、「〇〇する人この指とまれ」など、「あそび歌」をうたう。

（2）遊ぶ準備を整える（意欲を高める）
①何をして遊ぶか意見を出し合う
②意見を整理して遊びと遊ぶ順番を決める
③遊び方に地域性がある場合もあるので統一する
④鬼と子、親など役割を決める
⑤遊ぶ範囲を決める

（3）遊びを始める（楽しさを実感する）
①反則や安易な離脱に注意を払う
②遊びに一区切りついたとき、状況により遊び方の確認や変更、子と鬼の交代や人数の変更を行う

（4）遊びを終わる（学びを深める）
①時間や状況から判断し見事に終わる（とくに「最後の一回」は守る）
②ふりかえり（鬼や子、親の役割の頑張り具合い、何人助けたかなど）

8．成果

太宰府校しか参加していなかった子どものうち、鬼ごっこ遊びを通じて5人が、宿泊型野外体験活動にも参加するようになった。その中の1人について、行動観察記録をもとに述べる。

現在、小学6年生のA君は、小学1年生の時から今も太宰府校に在籍している。自然の中で遊ぶことへの興味や関心が高く、とくに自然の素材を生かした基地や遊び道具などを創作することが大好きだ。学校にナイフを持って行き、教室で鉛筆を削っているところを担任の先生に見られ、注意を受けたとも話していた。このように野外活動の知識や技術を習得することにも喜びを感じている。

ただ、活動中は他の仲間とは交わることはほとんどなく、輪の中からはずれ、自分がやりたいことだけに熱中することが多かった。ＦＥＡでも、年間を通じて子どもを対象とする宿泊キャンプも数多く開催しているが、それには一度も参加したことはなかった。

A君が小学4年生になる2016年の活動から、鬼ごっこ遊びを通じて、仲間の輪の中に入ることができるよう、スタッフ、リーダーが接していった。「何をして遊ぼうか」など、声かけにも注意を払いつつ、積極的な支援を行った。A君が選びやすいよう、交替する遊び、助ける遊び、隠れる遊びなど、ジャンルが偏らないようにも心がけた。自分自身が選択に関わることで、参加する意欲も高まっていった。

初めて体験する遊びは、スタッフやリーダーが見本を示し、何度か練習して本番に臨んだ。それでも最初はおもしろくなさそうに、言動も緩慢だったが、やり方がわかり、慣れてくると、明るい表情に変わり、元気にみんなと一緒に走り回っていた。回を重ねるごとに、昼食後の空き時間などを利用し、仲間同士で新しく覚えた鬼ごっこ遊びなども行うようになった。

1年間の活動を終え、その年の春には、初めて1泊2日のキャンプに参加した。参加のきっかけは、鬼ごっこ遊びを通じて、仲間とのコミュニケーションへの不安と不満が払拭されたことにあるとのことだった。

今は太宰府校の最上学年となり、小さな子どもに対し、自然体験活動の楽しさを教えたり、鬼ごっこ遊びも率先して行ったり、楽しく元気に励んでいる。鬼ごっこ遊びが集団への適応力を高め、宿泊キャンプの参加へ誘ったと言える。事前アンケートでは、子どもは自然体験活動自体を、保護者は自然体験活動を通して人間力の向上に期待を寄せていた。この両者の願いが叶う結果となった。

1年を振り返り感じたことは、鬼ごっこ遊びを指導する者の、姿勢、態度、技量により、子どもの変化に差が生じることである。この点については、次の第9章のまとめに整理した。

9．まとめ

ここでは、実際の指導を行った、とくに新人リーダーの言動を観察していて得られた結果

を、指導上の留意点としてまとめた。

（１）遊ぶ場所を決めるとき、ウルシ・ハチ・ヘビなどの有害動植物、崖、車の通る道路、転倒すると怪我をしやすいコンクリートの地面、不審者などに注意する。

（２）遊びの種類により、遊ぶ場所のスペースが異なるときがある。適正なスペースを知り、歩測で測って範囲を示すのもよい。

（３）遊ぶ範囲がわかりづらいときは、要所に指導者が立つ、コーンを置くなど、遊ぶ範囲を明確にする。

（４）子どもに選択させるとき、運動量や遊びのタイプが偏らないよう、また、遊びの順序にも配慮する。

（５）子どもの遊びの種類は少ない、子どもだけに決めさせるのではなく、指導者も新しい遊びを子どもに体験させる機会を与えることも大切である。

（６）遊びの種類が増えると、多くの選択肢から選ぶようになる。

（７）遊び方を熟知したうえで、見本を示せるようになっておく。そうすることで子どもに楽しさや遊ぶコツが正しく伝わる。

（８）その遊びが楽しいか楽しくないかは、指導者の技量で決まることが多い。

（９）指導者自身が、遊び方と楽しさを体感したうえで指導を行うと、その遊びがもつ本質が子どもによく伝わる。

(10) 初めて体験する遊びを嫌がる子どもの中には、できなかったらはずかしいと思っている子もいる。遊び方に慣れてくると、その後は仲間と元気に遊ぶことが多い。

(11) 指導者が堂々とした態度で臨むと、子どもも安心して遊ぶようになる。

(12) 遊び方がよく理解されていないときは、指導者が遊びに加わる、見本を示す、助言を与える。そうすることで、どうしたらよいかが分かり、子どもの動きが活発になる。

(13) 子どもは指導者を追いかけまわすことが好きだ。

(14) 全員一緒ではなく、班に分かれ、それぞれ遊んだ方がいい場合もある。

(15) 子どもの人数が多い場合、子と鬼の区別がつかないときがある。帽子やバンダナなどを利用すると判別しやすい。

(16) 体力を消耗する活動の後、雨の中、炎天下でも、平気で遊ぶことがある。水分補給や休憩などに気をつける。

(17) 遊びの輪の中に入ることへの不安がある子どもに対し、積極的に支援を施す、または指導者がそばにつくことで、徐々に解消されていく場合もある。

(18) 幼児では、一人で遊ぶことが難しい、小学生が激しく動き回ると恐がることもあるので、指導者がそばについていた方がいい場合もある。

(19) 幼児など、遊び方が理解されず、ルールが守られていないとしても、仲間の輪に入って楽しく遊んでいることを大切にする。

(20) 遊ぶときの年齢差が大きいときは、低年齢の子どもにハンディを与えるなど工夫する。

(21) ルールを破る子どもに対し、注意をする子どもは少ない。指導者は見過ごさずに対応する。

(22) 子どもは正義感が強い。「助け鬼」、「氷鬼」、「ひょうたん鬼」など、助ける遊びをすることで、道徳心を育む機会となる。

(23) 子どもがそれぞれ鬼、子、親の役割を果たせるよう支援し、本人を認めることで、自己の重要感が育まれる。

１０．おわりに

「鬼ごっこ遊び」を用い、日帰り型野外体験活動に参加している子どもを、宿泊型野外体験活動に導くことができるかが目的であった。ある程度の成果が得られ、2018 年現在も順調に進んでいる。

自然体験活動とともに、鬼ごっこ遊びなどの「集団体験活動」、衣食住に関わる「生活体験活動」などにも工夫を凝らし、宿泊型の野外体験活動への参加者が増え、子どもの健全な育成に貢献できればと考えている。日本キャンプ協会の皆さんも、それぞれの地域にあった鬼ごっこ遊びを普及し、子どもの「人間力」を育んでいただけたら幸いである。

最後に、子どもの健全な育成のためにキャンプなどの野外活動指導者が求められている。野外活動を通じて多くの子ども達が、感謝や感動の心を育んでくれることを期待している。

引用・参考文献

1) 中央教育審議会（2013)、今後の青少年の体験活動の推進について：答申、文部科学省、1-4
2) 福岡県・北九州市小学校体育研究会（1982)、福岡県につたわるこどもの遊び、光文書院

実践報告

青少年教育施設で発生した冬期の傷病に関する調査報告

青木康太朗（国立青少年教育振興機構）
Kotaro AOKI

１．はじめに

国立青少年教育振興機構（以下、「青少年機構」という。）が有する全国 28 の青少年教育施設（以下、「施設」という。）では、利用者が安心して研修活動に取り組めるよう、施設で起きた事故や傷病の発生状況を把握するとともに、その傾向や要因を検証することで、事故ゼロを目指した施設運営に取り組んでいる。

これまで青少年機構では、施設で発生した傷病の発生件数を活動別・場所別に集計し、危険度や頻度の高い事故事例と合わせて「事故データ・事例集」として公開してきた。しかし、体験活動の実施において安全管理の徹底が求められる昨今、施設が更なる安全管理の改善や安全対策の充実を図るためには、こうした情報だけでは情報量が少ないことが課題になった。そこで、平成 30 年度より、各施設から収集する傷病情報を「傷病発生件数」から「傷病の個別情報」に変更し、傷病が発生した状況やその要因についても詳しく情報を収集することとなった。

施設で発生した傷病情報の収集に当たっては、これまで活動別・場所別に発生件数を記入するフォームを使用してきたが、収集する傷病情報の変更に伴い、全施設共通の記録用紙（以下、「傷病記録」という。）を新たに作成した。そこで、傷病記録の記載内容や使用方法、データ収集等に不備がないかを事前に確認するため、平成 30 年 1 月～2 月に傷病記録を使った試行調査を実施した。

本報告では、試行調査で収集した傷病情報を基に、青少年教育施設における冬期の傷病の発生状況やその要因の傾向を報告し、そこから考えられる冬期の傷病に対する安全対策のポイントを示すこととした。

２．傷病記録の試行実施の概要

２．１．収集する傷病の条件

傷病記録に記載する傷病の条件は、「研修期間中に発生した傷病」もしくは「活動等によって既往症が悪化した傷病」のうち、以下のいずれかに該当する傷病とした。

・保健室や事務室で対応した傷病
・病院を受診した傷病（事務室を通さず、団体が直接病院に搬送した傷病も含む）
・活動現場等で施設職員が手当てした傷病

２．２．試行調査の実施施設と期間

試行調査は、青少年機構が有する全国 27 の施設（国立オリンピック記念青少年総合センターを除く）で実施した。試行調査の期間は、平成 30 年 1 月 24 日（水）～平成 30 年 2 月 23 日（金）の 1 か月間とした。

２．３．傷病記録の内容

傷病記録の記載内容は、従来使用してきた傷病情報の収集フォームの項目を基に、先行研究[1) 2) 4)]や関係資料[3) 5) 6) 7) 8)]を参考にしながら検討した。その結果、記載内容は、①傷病者の情報（氏名、性別、年齢）、②傷病が発生した状況（日時、活動場所、活動内容等）、③病気（症状、時期）又はけが（症状、部位、程度、けがをした時の状況）、④傷病の要因（本人、指導・引率者、装備等、環境）となった。

２．４．傷病記録の記載者

「2.1. 収集する傷病の条件」に該当する傷病が発生した場合、傷病者の引率・指導者又は傷病者本人、もしくは施設職員等が当該傷病の情報を傷病記録に記載することとした。

２．５．傷病情報の集計

収集した傷病情報はけがと病気に分けて集計し、傷病の発生状況やその要因を探るため、必要に応じてクロス集計を行った。

統計処理は、IBM SPSS Statistics 25 を用いて行った。

３．傷病の発生状況とその要因

３．１．傷病の現況

平成30年1月～2月に施設で発生した傷病の件数は 173 件で、内訳は、けがが 33 件（男 16 件、女 17 件）、病気が 140 件（男 74 件、女 66 件）であった。

けがの症状、部位、程度をみると、症状では「打撲捻挫」(20 件・60.6%)、部位では「手首」（6 件・18.2%)、程度では「軽微（その場で手当てできる軽いけが)」(16 件・55.2%）がそれぞれ高い割合を占めていた（表1、表2)。

病気の症状、発症時期をみると、症状では「感冒」(48 件・34.3%)、発症時期では「急に」（51 件・37.2%）がそれぞれ高い割合を占めていた（表 3)。

表１　けがの症状・部位

症状	N	%
擦過傷	3	9.1%
切り傷	3	9.1%
とげ	1	3.0%
靭帯系	2	6.1%
捻挫打撲	20	60.6%
骨折	1	3.0%
筋肉疲労	1	3.0%
その他	2	6.1%
計	33	100.0%

部位	N	%
頭	2	6.1%
顔	4	12.1%
眼	1	3.0%
肘	1	3.0%
前腕	1	3.0%
手首	6	18.2%
手・指	4	12.1%
大腿	2	6.1%
膝	4	12.1%
下腿	3	9.1%
足・指	5	15.2%
計	33	100.0%

表２　けがの程度

程度	N	%
軽微(その場で手当てできる軽いけが)	16	55.2%
軽傷(医師による1か月未満の治療を要するけが)	11	37.9%
重傷(医師による1か月以上の治療を要するけが)	2	6.9%
計	29	100.00%

表３　病気の症状・発症時期

症状	N	%
感冒	48	34.3%
頭痛	19	13.6%
感染症	22	15.7%
腹痛	10	7.1%
乗り物酔	2	1.4%
嘔吐	7	5.0%
平衡障害	1	0.7%
体調不良	15	10.7%
吐き気	3	2.1%
喘息	3	2.1%
呼吸系の発作	1	0.7%
生理痛	1	0.7%
アレルギー	1	0.7%
上記以外の痛み	1	0.7%
その他	6	4.3%
計	140	100.0%

発症時期	N	%
数日前から	8	5.8%
前日から	24	17.5%
今朝から	50	36.5%
急に	51	37.2%
その他	4	2.9%
計	137	100.0%

３．２．けがの発生状況とその要因

３．２．１．けがが発生した活動内容

けがの発生が多かった活動をみると、「スキー・スノーボード」(8 件・24.2%）と「雪上活動（雪遊び、スノーシュー等)」(8 件・24.2%）が高い割合を占めており、次いで「スポーツ活動（野球、サッカー、テニス等)」(6 件・18.2%）となっていた（表 4)。

３．２．２．けがの発生時間

けがが発生した時間をみると、「16 時」(7 件・21.9%）が最も高い割合を占めており、次いで「14 時」(5 件・15.6%)、「15 時」(5 件・15.6%）の順となっていた。そこで、施設の生活時間に合わせて時間を区切ってみたところ、午後の活動の時間帯（13～16 時台）がけがの発生時間の 6 割弱を占めていることが分かった。(表 5)。

３．２．３．泊数別にみたけがの発生日

泊数毎（1 泊 2 日～5 泊 6 日）にけがが発生した日をみると、2 泊 3 日では「1 日目」(10 件・76.9%)、3 泊 4 日では「2 日目」(4 件・50.0%)、4 泊 5 日と 5 泊 6 日では「3 日目」(4 泊：4 件・50.0%、5 泊：2 件・100.0%）がそれぞれ高い割合を占めており、日程の前半から中盤にかけてけがの発生率が高くなる傾向がみられた(表 6・左表)。

表 4　活動内容別にみた傷病の発生状況

活動内容	けが		病気		計	
	N	%	N	%	N	%
オリエンテーリング・ウォークラリー	0	0.0%	2	1.5%	2	1.2%
クロスカントリー	2	6.1%	0	0.0%	2	1.2%
アドベンチャープログラム・イニシアティブゲーム	1	3.0%	4	3.0%	5	3.0%
スポーツ活動（野球、サッカー、テニス等）	6	18.2%	6	4.5%	12	7.3%
シュノーケリング・スキンダイビング	0	0.0%	1	0.8%	1	0.6%
スキー・スノーボード	8	24.2%	11	8.3%	19	11.5%
クロスカントリースキー	1	3.0%	2	1.5%	3	1.8%
雪上活動（雪遊び、スノーシュー等）	8	24.2%	7	5.3%	15	9.1%
野外炊事	1	3.0%	1	0.8%	2	1.2%
創作活動（クラフト等）	0	0.0%	1	0.8%	1	0.6%
研修・学習活動	2	6.1%	26	19.7%	28	17.0%
自由時間	1	3.0%	24	18.2%	25	15.2%
つどい（朝・夕）	0	0.0%	4	3.0%	4	2.4%
清掃	0	0.0%	1	0.8%	1	0.6%
食事	0	0.0%	8	6.1%	8	4.8%
就寝時間	0	0.0%	13	9.8%	13	7.9%
移動中	3	9.1%	2	1.5%	5	3.0%
入所前	0	0.0%	5	3.8%	5	3.0%
その他	0	0.0%	14	10.6%	14	8.5%
計	33	100.0%	132	100.0%	165	100.0%

表 5　発生時間別にみた傷病の発生状況

発生時間	けが		病気		計	
	N	%	N	%	N	%
6時	0	0.0%	11	8.0%	11	6.5%
7時	0	0.0%	16	11.6%	16	9.4%
8時	2	6.3%	12	8.7%	14	8.2%
9時	0	0.0%	11	8.0%	11	6.5%
10時	3	9.4%	11	8.0%	14	8.2%
11時	2	6.3%	6	4.3%	8	4.7%
12時	1	3.1%	8	5.8%	9	5.3%
13時	1	3.1%	8	5.8%	9	5.3%
14時	5	15.6%	4	2.9%	9	5.3%
15時	5	15.6%	7	5.1%	12	7.1%
16時	7	21.9%	7	5.1%	14	8.2%
17時	1	3.1%	4	2.9%	5	2.9%
18時	0	0.0%	10	7.2%	10	5.9%
19時	2	6.3%	7	5.1%	9	5.3%
20時	2	6.3%	1	0.7%	3	1.8%
21時	0	0.0%	8	5.8%	8	4.7%
22時	1	3.1%	5	3.6%	6	3.5%
23時	0	0.0%	2	1.4%	2	1.2%
計	32	100.0%	138	100.0%	170	100.0%

【時間帯別発生率】

けが	病気	＜生活時間＞
6.3%	28.3%	起床・朝食・清掃
15.7%	20.3%	活動（午前）
3.1%	5.8%	昼食・休憩
56.2%	18.9%	活動（午後）
3.1%	10.1%	夕食・入浴・自由時間
12.6%	11.6%	活動（夜）
3.1%	5.0%	就寝（22～5時）

表 6　泊数別にみた傷病の発生日

（けが）

泊数		発生日					
		1日目	2日目	3日目	4日目	5日目	6日目
1泊2日	N	0	0	－	－	－	－
(N=0)	%	0.0%	0.0%	－	－	－	－
2泊3日	N	10	3	0	－	－	－
(N=13)	%	76.9%	23.1%	0.0%	－	－	－
3泊4日	N	2	4	2	0	－	－
(N=8)	%	25.0%	50.0%	25.0%	0.0%	－	－
4泊5日	N	1	2	4	1	0	－
(N=8)	%	12.5%	25.0%	50.0%	12.5%	0.0%	－
5泊6日	N	0	0	2	0	0	0
(N=2)	%	0.0%	0.0%	100.0%	0.0%	0.0%	0.0%

（病気）

泊数		発生日					
		1日目	2日目	3日目	4日目	5日目	6日目
1泊2日	N	2	0	－	－	－	－
(N=2)	%	100.0%	0.0%	－	－	－	－
2泊3日	N	23	14	0	－	－	－
(N=37)	%	62.2%	37.8%	0.0%	－	－	－
3泊4日	N	16	26	11	0	－	－
(N=53)	%	30.2%	49.1%	20.8%	0.0%	－	－
4泊5日	N	3	16	13	1	0	－
(N=33)	%	9.1%	48.5%	39.4%	3.0%	0.0%	－
5泊6日	N	1	0	2	0	0	0
(N=3)	%	33.3%	0.0%	66.7%	0.0%	0.0%	0.0%

表 7　発生要因別傷病発生件数・割合

要因	けが		病気		計		【要因別発生率】	
	N	%	N	%	N	%	けが	病気
参加者/失敗	7	13.5%	0	0.0%	7	2.9%	61.5	73.6
参加者/不注意	6	11.5%	0	0.0%	6	2.5%		
参加者/不慣れ	13	25.0%	5	2.6%	18	7.5%		
参加者/寝不足	0	0.0%	11	5.8%	11	4.6%		
参加者/疲労	5	9.6%	68	36.0%	73	30.3%		
参加者/不安・心配・緊張	0	0.0%	26	13.8%	26	10.8%		
参加者/体力不足	0	0.0%	20	10.6%	20	8.3%		
参加者/人間関係(けんか、ふざけ等)	1	1.9%	0	0.0%	1	0.4%		
参加者/既往症	0	0.0%	9	4.8%	9	3.7%		
指導者/指導力不足	0	0.0%	2	1.1%	2	0.8%	17.2	7.4
指導者/注意不足	6	11.5%	7	3.7%	13	5.4%		
指導者/経験不足	1	1.9%	1	0.5%	2	0.8%		
指導者/人数不足	1	1.9%	0	0.0%	1	0.4%		
指導者/計画不足	1	1.9%	0	0.0%	1	0.4%		
指導者/体調不良	0	0.0%	4	2.1%	4	1.7%		
装備/不適切な服装	1	1.9%	0	0.0%	1	0.4%	5.7	0.5
装備/装備不備	0	0.0%	1	0.5%	1	0.4%		
装備/装備不良(破損・劣化)	1	1.9%	0	0.0%	1	0.4%		
装備/施設・設備の欠陥・不良	1	1.9%	0	0.0%	1	0.4%		
環境/荒天(強風、雷、吹雪等)	0	0.0%	3	1.6%	3	1.2%	15.3	18.6
環境/気温	2	3.8%	7	3.7%	9	3.7%		
環境/高度	0	0.0%	2	1.1%	2	0.8%		
環境/水深	0	0.0%	1	0.5%	1	0.4%		
環境/雪	2	3.8%	3	1.6%	5	2.1%		
環境/不安定さ・滑りやすさ	4	7.7%	0	0.0%	4	1.7%		
環境/病原体	0	0.0%	19	10.1%	19	7.9%		

３．２．４．けがの発生要因

けがが発生した要因をみると、最も高い割合を占めていたのは参加者の「不慣れ」（13 件・25.0%）で、次いで参加者の「失敗」（7 件・13.5%）、「不注意」（6 件・11.5%）、指導者の「注意不足」（6 件・11.5%）の順となっていた。発生要因をみると、6 割強は参加者に起因するものであったが、2 割弱は指導者に起因するものであることが分かった（表 7）。

３．２．５．けがをした時の状況

けがの発生が多かったスキー・スノーボード、雪上活動のけがをした時の状況をみると、スキー・スノーボードでは「スキーで転倒し、手首を捻挫」、雪上活動では「そり遊びで木にぶつかり、顔面を打撲」といった状況でけがをしていることが多いことが分かった（表8）。

３．３．病気の発症状況とその要因

３．３．１．病気の申出があった活動内容

病気の申出が多かった活動をみると、「研修・学習活動」（26 件・19.7%）が最も高い割合を占めており、次いで「自由時間」（24 件・18.2%）、「就寝時間」（13 件・9.8%）の順であった（表 4）。

３．３．２．病気の申出があった時間

病気の申出があった時間をみると、「7 時」（16 件・11.6%）が高い割合を占めており、生活時間帯でみると、起床・朝食といった朝の時間帯（6～8 時台）が全体の 3 割弱を占めていることが分かった。また、全体的な傾向として、食事時間等を除き、時間帯が遅くなるほど申出件数が少なくなる傾向がみられた（表 5）。

３．３．３．泊数別にみた病気の発症日

泊数毎（1 泊 2 日～5 泊 6 日）に病気が発症した日をみると、1 泊 2 日と 2 泊 3 日では「1 日目」（1 泊：2 件・100.0%、2 泊：23 件・62.2%）、3 泊 4 日と 4 泊 5 日では「2 日目」（3 泊：26 件・49.1%、4 泊：16 件・48.5%）、5 泊 6 日では「3 日目」（2 件・66.7%）がそれぞれ高い割合を占めており、日程の前半に病気の申出が多くなる傾向がみられた。

３．３．４．病気の発症要因

病気が発症した要因をみると、最も高い割合を占めていたのは参加者の「疲労」（68 件・36.0%）で、次いで参加者の「不安・心配・緊張」（26 件・13.8%）、「体力不足」（20 件・10.6%）の順となっていた。病気の発症要因のうち、7 割強は参加者に起因するものであったが、2 割弱は病原体など環境に起因するものであることが分かった（表 7）。

表 8　活動・症状別けがをした時の状況（スキー・スノーボード、雪上活動のみ）

＜スキー・スノーボード＞

（捻挫打撲）
- スキー滑走時に転倒し、左手首を捻挫。
- スキー研修中に、インストラクターの指導のもと滑っていたら、他校の男子生徒が後ろからぶつかってきて転倒し、右手首を捻挫。
- スキー中転倒（手首）。
- スキー研修中に前方へ転倒し、右ひざを捻挫してしまった。

（切り傷）
- スキー研修中に未経験者がぶつかった際、スキーのグリップが顔に当たり、あごを切った。

（靭帯系）
- スキーの際、左回りをしようとして、エッジが内側にかかり、膝が外側に開いた。その際、左膝の外側の靭帯を損傷した。

（その他）
- スキー場でリフトから降りるとき、セーフティーバーが歯にあたった。

＜雪上活動（雪遊び、スノーシュー等）＞

（捻挫打撲）
- しりすべり中にバランスを崩し、木に顔をぶつけた。
- そり遊び中にコースアウトをしてしまい、木に顔面を打った。
- チューブ滑りで止まりきれず木にぶつかり、翌日、歩行困難になるほどの痛みが出た。
- そり滑走中に加速し、右側ネットのポールに右膝をぶつけた。
- ネイチャースキー中に転倒し、手をついた。

（擦過傷）
- そり遊び中にそりが右瞼に当たり、約 2.5 ㎝の傷を負った。

（骨折）
- 雪合戦の球をよけようとして雪面でバランスを崩して転倒し、右肘に負荷がかかった。

3．3．5．病気の発症時期と処置静養後の対応

病気の発症時期別に処置静養後の対応をみると、「前日」「今朝から」「急に」発症した場合は「活動継続」の割合が高いのに対し、「数日前」から発症していた場合は「帰宅」の割合が7割を超えていることが分かった（表9）。

表9　病気の発症時期と処置静養後の対応

発症時期		活動継続	帰宅
数日前から	N	2	6
(N=8)	%	25.0%	75.0%
前日から	N	13	11
(N=24)	%	54.2%	45.8%
今朝から	N	25	25
(N=50)	%	50.0%	50.0%
急に	N	30	21
(N=51)	%	58.8%	41.2%
その他	N	1	3
(N=4)	%	25.0%	75.0%

4．冬期の傷病に対する安全対策のポイント

以上、青少年教育施設で発生した冬期の傷病の状況やその要因の傾向をみてきたが、そこから考えられる安全対策のポイントは以下のとおりである。

4．1．けがの発生に対する安全対策

・午後の活動（13～16時台）の時間帯にけがが発生しやすいことが分かったことから、午後の活動を始める前にはしっかり安全指導（どんな事故やけがが起きやすいのか、どうすれば防げるのか等）を行い、参加者の安全意識を十分高めてから活動に入ることが大切だと考える。特に、午前中から引き続き同じ活動をする場合、細かい安全指導は怠りがちになりやすいため、同じ説明であっても、確認も含め、再度安全指導を行うことが大切である。

・けがの発生要因のうち、参加者の「不慣れ」「失敗」「不注意」、指導者の「注意不足」が高い割合を占めていたことから、指導者は参加者の活動経験の有無や程度を事前に確認（説明時に挙手で確認等）し、活動中は未経験者や初心者の安全管理に気を配りながら指導を行うことが大切だと考える。

・この時期は「スキーで転倒し、手首を捻挫」「そり遊びで木にぶつかり、顔面を打撲」といったけがが多かったことから、スキー研修で来ている団体には「未経験者や初心者には十分注意を払い、転び方の練習をしっかりすること」、そり遊びをする団体には「スピードの出し過ぎやコースアウトには十分注意すること」を事前に伝えておくことが大切だと考える。

4．2．病気の発症に対する安全対策

・病気の申出は朝の時間帯（6～8時台）が多く、特に「頭痛」「感染症」「体調不良」については発症時期が「今朝から」と回答する割合が高かった。このことから、指導者は、参加者の健康管理を行う上で、起床時や朝のつどいの際に参加者の体調確認を行う時間を必ず設けるようにすることが大切だと考える。

・病気の発症要因のうち、参加者の「疲労」「不安・心配・緊張」「体力不足」、環境の「病原体」が高い割合を占めていた。このことから、指導者は、活動中だけでなく、食事の時間や休憩時間等も参加者の様子に目を配り、疲れていたり元気がなさそうにみえる参加者がいれば声をかけ、体調確認を行うようにすることが大切だと考える。その際、病気の申出のあった参加者には、ウィルス性の疾患（インフルエンザ、ノロウィルス等）も想定し、必ずマスクを着用させるようにすることが大切である。

・「数日前」から病気が発症した場合、処置静養後の対応が「帰宅」になる割合が7割を超えていた。このことから、指導者は集合時に必ず全員の体調確認を行い、体調が思わしくない（特に頭痛や感冒の症状がある）と申し出た参加者がいる場合には、出発前に体温や脈拍、血圧等のバイタルサインを確認し、本人の様子（顔色、呼吸等）をみながら参加の可否を判断することが大切だと考える。もし参加の許可をした場合でも、初日に体調がよくない参加者の病気の発生率は、体調がよい参加者に比べ、初日で約10倍、その後も約2倍の差があるといわれていることから[3)]、体調が回復するまでは、活動の様子を観察しつつ、プログラムの節目に体調確認を行うことが大切である。

５．終わりに

平成 30 年度からは、試行調査の結果を踏まえ、一部修正した傷病記録を用いて全国 27 の施設（国立オリンピック記念青少年総合センターを除く）で傷病調査を実施している。

今回は試行調査ということで、調査期間が短く、傷病の報告件数も少なかったことから、冬期の傷病の発生状況やその要因の傾向を探る程度に留まった。今後は、通年の傷病データを用いて、季節や天候等による傷病の違いにも注目しながら青少年教育施設における傷病の発生状況やその要因を明らかにし、体験活動における安全管理の改善や充実に生かせる基礎資料にしたいと考えている。

謝辞

本報告は、JSPS 科研費 JP17K01639 の助成を受けたものです。

参考文献

1) 稲松謙太郎、砂山真一、高瀬宏樹、岡村泰斗（2016）民間野外教育事業者におけるスキーヒヤリハット分析、キャンプ研究、日本キャンプ協会、19、31-36
2) 岡村泰斗、稲松謙太郎、砂山真一、高瀬宏樹（2015）民間野外教育事業者におけるヒヤリハット分析、キャンプ研究、日本キャンプ協会、18、29-36
3) 国立オリンピック記念青少年総合センター（1999）小・中学生のキャンプ中のけが・病気の発生状況に関する研究、国立オリンピック記念青少年総合センター
4) 高瀬宏樹、佐藤初雄、北川健司、三好利和、町頭隆児、伊藤勝則、大嶽和彦（2011）ヒヤリハット調査から見る事故の傾向について−日本アウトドアネットワーク加盟団体への調査から−、日本野外教育学会第 14 回大会プログラム・研究発表抄録集、40-41
5) 日本スポーツ振興センター（2016）学校の管理下の災害〔平成 28 年版〕、日本スポーツ振興センター
6) 星野敏男、金子和正監修（2011）野外教育入門シリーズ第 2 巻 野外教育における安全管理と安全学習−つくる安全，まなぶ安全−、杏林書院
7) ユースサービス大阪（2000）安全な野外活動をめざして、ユースサービス大阪
8) 自然体験活動推進協議会（2013）自然体験活動のリスクマネジメント、自然体験活動推進協議会

参考資料　傷病記録(試行版)

傷病記録（試行版）

1．傷病者

1-1. 傷病者の情報をお書きください。

団体名：＿＿＿＿＿＿＿＿　氏名：＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿　性別：1. 男　2. 女

年齢：＿＿＿歳（1. 幼児　2. 小学生　3. 中学生　4. 高校生　5. 大学生等　6. 社会人　7. その他）

1-2. 傷病が発生した（申し出のあった）日時、活動場所、活動内容、対応等をお書きください。

日時：２０＿＿年＿＿月＿＿日　1.午前 / 2.午後　＿＿時頃　日程：＿＿日目／全＿＿日中

天候：1. 晴　2. 曇　3. 雨　4. 雪　環境：1. 屋内　2. 屋外

活動場所：＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿　活動内容：＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

病院の受診：1. 無　2. 有（日帰り）　3. 有（入院）　処置・静養後：1. 活動継続　2. 帰宅

以下、病気の場合は「２.」、けがの場合は「３.」を記入し、最後に「４. 傷病の要因」についてお答えください。

2．病気

2-1. 以下から最も当てはまる「症状」を選び、その「発症時期」をお答えください。（○はそれぞれ１つ）

【症状】 1. 感冒　2. 頭痛　3. 感染症　4. 腹痛　5. 乗り物酔　6. 嘔吐　7. 平衡障害　8. 体調不良　9. 熱中・脱水
10. 下痢　11. 吐き気　12. 喘息　13. 呼吸系の発作　14. 生理痛　15. アレルギー　16. 痙攣症状
17. 精神疾患　18. 上記以外の痛み　19. その他（　　）

【時期】 1. 数日前から　2. 前日から　3. 今朝から　4. 急に　5. その他（　　）

3．けが

3-1. 以下から最も当てはまる「症状」を選び、その「部位」と「程度」をお答えください。（○はそれぞれ１つ）

【症状】 1. 擦過傷　2. 切り傷　3. とげ　4. 皮膚科系　5. 鼻血　6. 火傷　7. 靭帯系　8. 捻挫打撲　9. 生物系
10. 突き指　11. 骨折　12. 筋肉疲労　13. 脱臼　14. 眼科系　15. 上記以外の痛み
16. その他（　　）

【部位】 1. 頭　2. 顔　3. 眼　4. 首　5. 肩　6. 上腕　7. 肘　8. 前腕　9. 手首　10. 手・指　11. 胸
12. 腹　13. 背中　14. 腰　15. 臀部（尻）　16. 大腿　17. 膝　18. 下腿　19. 足・指　20. 爪先
21. 踵　22. 全身

【程度】 1. 軽微（その場で手当てできる軽いけが）　2. 軽傷（医師による１か月未満の治療を要するけが）
3. 重傷（医師による１か月以上の治療を要するけが）　4. 致命傷（死亡・後遺症が残る重篤なけが）

3-2. けがをした時の状況についてお書きください。（何をしていて、どのようにけがをしたのか）

4．傷病の要因

4-1. 傷病が発生した要因を以下から選んでください。（○はいくつでも）

【参加者】 1. 失敗　2. 不注意　3. 不慣れ　4. 不適切な行動　5. 寝不足　6. 疲労　7. 不安・心配・緊張
8. 体力不足　9. 人間関係（けんか、ふざけ等）　10. 既往症

【指導者】 11. 指導力不足　12. 注意不足　13. 判断力不足　14. 経験不足　15. 人数不足　16. 連携不足
17. 計画不足　18. 体調不良

【装備等】 19. 不適切な服装　20. 装備不備　21. 装備不良（破損・劣化）　22. 施設・設備の欠陥・不良

【環　境】 23. 荒天（強風、雷、吹雪等）　24. 気温　25. 日差し　26. 高度　27. 水深　28. 雪
29. 落石・落木　30. 不安定さ・滑りやすさ　31. 虫・動物　32. 植物　33. 病原体
34. その他（1.～33.以外の要因）（　　）

施設記入欄

受理者：＿＿＿＿＿＿　※受理者は記入漏れがないか受取時に確認してください。

【事業種別】 1. 研修支援事業　2. 教育事業

【発生頻度】 1. よくある　2. たまにある　3. ほとんどない　4. めったにない

【保険申請】 1. 有　2. 無　※外傷のみ　【事故報告書】 1. 有　2. 無

実践報告

Leave No Trace を意識した、キャンプにおける食器洗いの実践

寺田 達也(公益財団法人 社会教育協会 ひの社会教育センター)
Tatsuya TERADA

1．はじめに

キャンプは、自然の中での生活を舞台に、様々な目的をもって行われている。余暇活動として楽しむ人もいれば、教育効果を狙って実施されるキャンプもあり、その形態や自然の利用の仕方も様々である。

あらゆるアウトドアスポーツとも関連の深いキャンプは「総合的野外活動」とも言われているほど、野外での衣・食・住は、自然の中の活動の基本として位置づいている。

自然体験活動やキャンプを楽しむ人が増えるほど懸念されることが、「自然環境の汚染への懸念」である。より自然に近いところで行われる人間の衣食住が、よりダイレクトに自然を傷つける可能性をもっているからだ。

ひの社会教育センターは、1969 年から 50 年近くにわたり、事業として子どもの自然体験キャンプを行ってきた。キャンプが人間育成に大変有効な手法であることを認識しつつ、さらなる持続可能な自然環境へのアプローチも積極的に取りくみ、参加者とこの精神を共有しようと試みている。

2．実践への背景と目的

近代の経済活動の発展により、ローコストで実用的な日用品が生まれたことで、キャンプにおいても「家庭の衣食住を野外に持ち出した」状態を実現できるほど便利になりつつある。汚れが良く落ちる洗剤はその典型的な例とも言える。衛生面の配慮から、特に組織的キャンプにおいては、食器をしっかりと洗うこと重視しているが、ここで使われる洗剤等は「都市の上下水道が完備された環境」で使われることが前提の商品である例も多い。

一方、これらのことによる心配事は「環境への影響」である。日本キャンプ協会は、養成される指導者に「持続可能な暮らしを実現するために、生態系のシステムに人間が与える影響、社会経済とのつながり、伝統や文化との関連など総合的に捉える必要」を説いている。また、中央教育審議会では「自らの責任ある行動をもって、持続可能な社会の創造に主体的に参画できる人」を環境教育という分野に求めている。

ひの社会教育センターは、これまで人とのかかわりや、自然と遊ぶ楽しさを活動の中心に添え、活動を創ってきた。これまでも「できること」を実践して環境への配慮を心がけてきたが、知ったスキルを断片的に使ってみる実践が多く、体系立った方法までは確立できてこなかった。

そこで 2017 年より、世界的な環境倫理団体「Leave No Trace（以下、LNT）」の原則を支持し、オフィシャルパートナーとして登録した。LNT7 原則のうち「ゴミの適切な処理」に基づいて今回は、キャンプにおける食の部分に注目し、よりミニマムインパクトな食器洗いの方法を検討し、実践したものである。

3．Leave No Trace（LNT）

Leave No Trace, center of outdoor ethics. とは、自然を利用するすべての人が、環境に対する責任をもち、楽しく利用するための環境倫理プログラムである。それぞれ研究によって裏付けられた 7 つのシンプルな行動原則は、あらゆる活動、あらゆるフィールドで使用することができるので大変実用的である。ミニマムインパクトの具体的なテクニックは、それぞれ開発されたものや既知のものを利用できるが、それらすべてが体系化されたシンプルな考え方は、とても分かりやすく実践しやすい。こうした観

点からひの社会教育センターはLNTを準拠することを決めた。

ーLNT7つの原則ー
①事前の計画と準備
(Plan ahead and prepare)
②影響の少ない場所での活動
(Travel and camp on durable surfaces)
③ゴミの適切な処理
(Dispose of waste properly)
④見たものはそのままに
(Leave what you find)
⑤最小限のたき火の影響
(Minimize campfire impacts)
⑥野生動物の尊重 (Respect wildlife)
⑦他のビジターへの配慮
(Be considerate of other visitors)

4．実践内容

4－1．これまで

キャンプで発生する大量の洗い物（参加者の食器とカレー等の鍋）に注目した。これまでは、水道設備において市販の合成洗剤とスポンジを用いて洗浄を行ってきた（食器鍋同様。一般的な家庭の洗浄方法と同じ）。

油は洗剤によって落ちるが、例えばカレー皿50枚とカレー鍋6つを1回洗浄するためには、家庭用食器洗い洗剤をボトル1/3（約80 mℓ）ほど使うこともあった。これは、6か所の水道で、子どもそれぞれが自分の食器を洗うために洗剤を使用することに加え、鍋のカレーとぬめりを落とすために使用された洗剤量である。

教育的キャンプという観点から「自分の食器は自分で洗う」という人間教育のコンセプトを持っていたが、自然環境への配慮という観点からは十分とは言えなかった。

4－2．実践方法「食器」

今回はカレー皿と鍋を題材に「食器洗浄に際して洗浄に要する洗剤量を減らし、汚水の排出量を減らすこと」をコンセプトに実施した。

実施手順は以下の通りである。
（※①～③は皿と鍋同様）

①残りカレールーをヘラでできるだけかき集める。
②重曹を降り、30秒～1分待つ。
③キッチンペーパーでふき取る
④洗剤を入れたたらい（1番）で洗う。
⑤水の入ったたらい（2番）ですすぐ。
⑥水の入ったたらい（3番）ですすぐ。
⑦布巾でふき取った後、除菌スプレーを降ってカゴへ収納。

詳細について説明する。

①残りカレールーをヘラでできるだけかき集める。（図1）
→カレーの残りルーをヘラを用いてできるだけ集める。集めたものは新聞紙などにくるんで生ごみとして処理する。

図1　ヘラですくい、重曹をかける

②重曹を降り、30秒～1分待つ。（図1）
重曹（炭酸水素ナトリウム）は油分と触れると石鹸と同様の成分を生むため、油分が取れやすくなる。そのため粉をふりかけて30秒～1分置いた。ちなみに、重曹は水質汚染で問題になる環境ホルモンも含まれていないということから、重曹も環境に影響の少ない洗浄素材といえる。

③キッチンペーパーでふき取る。(図 2)

②のお皿や鍋を、キッチンペーパーでふき取る。できるだけ丁寧に行うことで、お皿は見た目には白くきれいな状態となる。しかし、この時点ではぬめりはとれない。

図２　キッチンペーパーでふく

④洗剤を入れたたらい（1 番）で洗う。

図3にあるように､3つのたらいを用意した。1 番のたらいにのみ、洗剤を入れ、スポンジで油を落とす｡今回は､LNT コンセプトに基づき、洗剤は、分解率が高く、かつ油汚れを力強く落とすエコソープ「All things in nature（※)」を採用した。

食器はまず 1 番のたらいで油汚れを落とす。

図３　お皿を洗う水たらい

右から 1 番、2 番、3 番。1 番だけに洗剤が入っている。洗剤はエコソープ「All things in nature」。

⑤水の入ったたらい（2 番）ですすぐ。

1 番のたらいで油汚れを落とした後は、2 番のたらいへ進み、すすぎを行う。1 番までをキレイに作業することで、2 番たらいもほとんど濁らずにすすげる。

⑥水の入ったたらい（3 番）ですすぐ。

2 番たらいですすいだ食器の仕上げとして、水の入った 3 番目のたらいですすぐ。ここまでくると、水は透明のまま維持できるほどキレイになり、油のぬめりもほぼ完全に除去されている。

もし、複数人が洗っている過程で 2 番たらいが濁ってきた場合は、3 番たらいを 2 番へずらし、3 番たらいを新しくすることで、水の交換についても排水量軽減につながる。

⑦布巾でふき取った後、除菌スプレーを降ってカゴへ収納。

洗い終わった食器は布巾で水分をふき取り、乾燥のためにカゴで保管した。その際に念のため除菌スプレーを噴霧した。

４－３．実践方法「鍋」

食器を洗い終わった、たらいの水を用いて鍋を洗う。

①～③までのプロセスは、食器と同様に行う。

④たらいの残り水（1 番）を鍋に入れて洗う。(図 4)

沢山の食器の油を分解してきた 1 番たらいであるが、それでも洗浄能力はまだ残っている。③までを終えた鍋はこの排水でこすることで、かなりぬめりが落ちていく。

図４　１番たらいの残り水を使って鍋を洗う

⑤希釈した洗剤で洗う。(図 5)

④のあとに、洗剤を希釈したスプレーで洗う。こうすることで、仕上げ感覚として改めて洗浄しつつ、希釈した洗剤によってよりミニマムインパクトにもつながる。

図５　希釈スプレーの洗剤で仕上げ洗い

以上の作業工程により、⑤を流水ですすぐだけでカレールーの汚れがついた鍋も図６のようにピカピカに洗うことができた。

図６　一連の作業工程で十分キレイに

５．成果

今回の実践で得た結果としては、この方法を用いてカレー皿 50 枚とカレー鍋 6 つを洗浄した。

使用したたらいの水は 9 杯（1～3 番×3 レーン）であり、使用した洗剤は約 18 ㎖（6 ㎖×3 杯）程度であった。このほかに鍋のすすぎに流水を用いたが、流す程度であったので使用量もごく少量ですんだ。

食器を洗った残り水を再利用して鍋の主だった油汚れも落とすことができたため、仕上げの洗浄も薄めた洗剤で洗うことができ、しつこい油ぬめりもキレイに落とすことができた。

トータルとして、水の使用量や汚水の排水量は、一般的な家庭的方法に比べて圧倒的に減少した。また、洗剤の選択をエコソープにしたことで、よりミニマムインパクトへ貢献できる取り組みであった。

また、この洗浄方法はキャンプスタッフだけでなく参加者の子ども自身にも実践してもらった。普段の洗浄と異なる方法に最初は戸惑いを見せる子どももいたが、重曹（「魔法の粉」と表現）や洗剤たらい（「魔法の洗剤」と表現）を使った方法に、楽しみながら洗浄方法を実践することができた。たらいを通すごとにキレイになっていき、ぬめりがとれていく過程に、「おぉ～」や「すげ～」といった子どもたちの声も聞かれた。

図７　子どもたちへの教育活動として

子どもたちにとって、「自分のことは自分でやる」という当初の教育的目標に加え、ミニマムインパクトとしての事実、少しの環境教育的視点を両立できる方法であった。

今回の実践に感動を得たのは、子ども以上にスタッフたちであった。ボランティアでかかわる大学生を中心としたスタッフは、事前の研修

会から始まり、夏のシーズンをこの洗浄方法によって過ごした。

洗浄力と排水量削減を実現できるこの方法と、その根底にあるLNTコンセプトに深い感動があった。スタッフの中には、将来教員や指導者職を志す者も多く、そういったメンバーにミニマムインパクトの概念がめばえたことは、長期的に見ても意味のある取り組みだったと考えている。

６．課題と提言

ミニマムインパクトをテーマとした具体的な実践ができたが、今年の取り組みでは、子どもたちへの環境教育視点については深めるまでには至らなかった。

「魔法の粉」「魔法の洗剤」というフレーズは子どもたちの興味を引き、楽しみながら行動に移せるというメリットの一方、その魔法の物体が何かを知ることはなく、それがなぜ有効なのか、なぜこういう食器洗浄の方法と採るのか、については特段言及することができなかった。

環境教育という視点をさらに深めていくならば、年齢による理解力も加味しつつ、「なぜ」「なんのために」を深堀することが次の展開として期待される。

また、LNTコンセプトを軸にそえてキャンプの行動を検証することで、食器洗浄以外のミニマムインパクトテクニックを開発、運用することも可能になる。

自然を題材にして教育活動を行う我々のような団体に始まり、自然と遊ぶことで余暇の楽しみを得るすべてのアウトドアユーザーは、将来の責任としてミニインパクトの概念及びテクニックを学び、使いこなす姿勢が肝要だ。例え設備の完備された都市部においても例外ではない。そのツールとして、LNTを用いた考え方の統合、および枝葉のテクニックの１つとして今回ご紹介した実践が、より持続可能な活動の助けになることを切望する。

引用・参考文献

○高野孝子、中野友博（2006）キャンプディレクター必携 第５章キャンプと環境教育-日本キャンプ協会

○ 7th principle for LNT-Leave No Trace center of outdoor ethics

○キャンプインストラクター入門（2007）第２章Ⅰ～Ⅲ-日本キャンプ協会

○LNTとは、LNT7原則-Wilderness Education Association Website
（http://weaj.jp/lnt-seven-principles-only/）

○洗剤“all things in nature”の特徴-スロービレッジWebsite
（https://shop.slow-village.jp/all/）

○世界スカウト環境プログラム-ボーイスカウト日本連盟Website
（https://www.scout.or.jp/for_members/program/WSEP/index.html）

○環境保護章（技能章）-ボーイスカウト日本連盟Website
（https://www.scout.or.jp/for_members/program/kankyouhogo.html）

※今回採用したエコソープ「All things in nature」は、界面活性剤の使用を最小限に抑え、水への分解率が1週間で100%という高さを選択の理由とした。

資　　料

公益社団法人日本キャンプ協会「キャンプ研究」投稿規程

【投稿資格】

１．投稿の執筆者は、筆頭および共同ともに、公益社団法人日本キャンプ協会（以下、「本会」という）の会員に限る。ただし、本会が執筆を依頼する場合は、この限りではない。

【投稿原稿】

２．投稿原稿の条件は、以下の通りとする。

（１）投稿原稿の内容は、キャンプや野外活動あるいは自然体験活動等を対象としたものであること。

（２）投稿原稿は、原則として未発表ものに限る。ただし、以下のものについては、初出を明記することで未発表のものとみなす。

１）各種学会等において発表要旨集等に掲載されたもの。

２）シンポジウム、研究集会、講演会等で資料等として発表されたもの。

３）国、自治体、業界、団体等からの委託による調査研究報告書等に収録されたもの。

４）その他、本会が特に認めたもの。

【投稿原稿の区分】

３．本誌の投稿原稿の区分は、研究論文、実践報告とする。

（１）研究論文は、論文としての内容と体裁を整えており、キャンプや野外活動あるいは自然体験活動等において新たな知見をもたらすもの。

（２）実践報告は、実際に行われたキャンプ等に関する報告であり、目的・対象・プログラム・指導体制等の概要を示し、新たな取り組みや課題等が十分に整理され、今後のキャンプにおいて有益な示唆を与えるもの。

【執筆要項】

４．執筆に関する細則については、以下の通りとする。

（１）体裁は、Ａ４版タテ用紙を使用し、必ずワードプロセッサ等で作成する。

（２）原稿の長さは、本文・図表・写真・引用文献を含めて、研究論文は12頁以内（１頁1,600字以内）、実践報告は８頁以内を原則とする。

（３）文体は、「である」調とし、文字は、現代仮名遣いを基本とする。句読点は、「、」および「。」を用いる。

（４）氏名と所属は、和文および英文の双方を明記する。表題は、原稿の内容を端的に示すもので、和文および英文の双方を明記する。

（５）要旨（200語以上300語以内）とキーワード（5語以内）は、研究論文のみ、英文の記載をする。

（６）引用文献は、本文最後に著者名のアルファベット順で一括して、一連番号をつけて記載する。本文の引用箇所には、該当する文献番号を肩字「例[1]」で示す。以下に、引用文献の記載例を示す。

（記載例）

雑誌の場合：著者名（発表年）題目、雑誌名、発行所、巻（号）、所在ページ

野外一郎（2010）キャンプの教育的効果、キャンプ研究、日本キャンプ協会、3(2)、101-112

書籍（単著）の場合：著者名（出版年）書名、発行所、所在ページ

野外次郎（2010）キャンプ教育、キャンプ教育研究社、30-40

書籍（共著等）の場合：著者名（出版年）章の題目、編者名、書名、発行所、所在ページ

野外三郎（2010）野外生活技術、野外一郎（編）、キャンプ総論、キャンプ教育研究社、25-28

【投稿原稿の採否】

５．投稿原稿は、以下の掲載の採択を受けるものとする。

（１）研究論文の掲載の採択は、本会が委嘱する査読者２名が行う。審査の手続きは、以下の通りである。

１）研究論文の体裁に関して、本会が確認を行う。必要に応じて投稿者に修正を求める。

２)各査読者による審査結果は､次の４つのいずれかで報告され､投稿者あてに意見が付される。

Ａ：そのまま掲載可能

Ｂ：一部修正すれば掲載可能

Ｃ：大幅に修正可能ならば掲載可能

Ｄ：掲載不可

３）２名の査読者の審査結果が、共に「Ｄ」の場合は、掲載不可とする。

４）上記３)に当てはまらない場合のみ、２名の査読者の審査結果が、「Ａ」の段階に至るまで、投稿者とやりとりを行う。ただし、査読者が相応と考える修正や補足等が、同一箇所につき３回までに満たされなかった場合は不採択とする。

（２）実践報告の査読審査は行わない。ただし、不適切な表現や内容がある場合は、当該委員会が適宜助言し、投稿者が加筆修正を行った上で、掲載可能とする。

（３）修正を要する研究論文や実践報告は、60日以内に再提出することとし、それを越える場合は取り下げたものとみなす。

【原稿の権利】

６．本誌に掲載された研究論文や実践報告の著作権（「複製権」、「公衆通信権」、「翻訳権、翻案権」および「二次的著作物の利用権」を含む）は、本会に帰属するものとする。ただし、内容に関する責任は、当該研究論文や実践報告の著者が負うものとする。

【投稿方法】

７．投稿に関する細則は、以下の通りとする。

（１）別紙の「キャンプ研究投稿連絡票」に必要事項を記入し、投稿原稿の計３部（オリジナル１部、コピー２部）と合わせて提出する。また、投稿原稿の電子ファイル（テキスト形式：各種メディア、電子メール等）も提出する。尚、投稿された原稿は、掲載の採否に関わらず、原則として返却しない。

（２）掲載料は、研究論文および実践報告ともに５，０００円とする。

投稿原稿の送付先・問い合わせ先
〒１５１－００５２
東京都渋谷区代々木神園町３－１国立オリンピック記念青少年総合センター内
公益社団法人日本キャンプ協会「キャンプ研究」編集事務局
電話０３－３４６９－０２１７ファックス０３－３４６９－０５０４
E-mailncaj@camping.or.jp

掲載料の振込口座
郵便振替口座００１９０－３－３４０３１
加入者名公益社団法人日本キャンプ協会
＊通信欄に「キャンプ研究掲載料等」と記載すること

◆「キャンプ研究」収録題目一覧

■第1巻（1997/12/20）
[原著論文] ●障害児における感覚統合野外キャンプ　●障害者野外活動におけるアダプテーションに関する一考察　●青少年の組織キャンプ運営に対するキャンプカウンセラーの貢献度　●キャンプにおける食中毒の法的責任と注意義務
[実践報告] ●野外体験学習指導者養成コース事例報告　●小学生を対象としたアドベンチャーカヌーツアーの実践報告　●大阪府茨木市におけるリーダー育成キャンプの事例　●アサヒキャンプ朽木村を中心とした徒歩移動型キャンプの実践報告　●不登校の子ども達の暑い夏　●自然体験活動の普及に関する新たな取り組み

■第2巻（1998/7/20）
[特別寄稿] ●全日本学生キャンプの草創
[原著論文] ●キャンプ運営における行政主催からボランティアクラブ主催への移行に関する問題点 ●グループを理解する
[実践報告] ●体験は未来を拓く力　●トーチトワリング

■第3巻第1号（1999/6/30）
[原著論文] ●障害児における雪上での感覚統合トレーニングキャンプ　●知的障害者のキャンプ ●2002年からの新学習指導要領にみる教科教育“水辺活動” 実施に向けての研究　●火の技術に関する一考察　●喘息児キャンプにおける呼気ゲームの実践
■第3巻第2号（1999/12/25）
[原著論文] ●子ども長期自然体験村と参加体験型学習システム　●思春期女子キャンパーの理解と援助
[実践報告] ●降雨が学生キャンパーの気分に及ぼす影響について　●障害児における氷上での感覚統合トレーニングキャンプ　●知的障害者におけるキャンプファイアーの検討　●馬のいる生活を体験する「ウマキャンプ」●雑木林を学びの場に　●丹沢山中移動型キャンプ「かもしかキャンプ ’99」の実践報告

■第4巻第1号（2000/7/26）
[実践報告] ● ’99 無人島キャンプin 具志島　●ファミリーキャンプにおける冒険教育の実践　●無人島体験記　●デイケアセンターぼちぼちハウス リフレッシュキャンプ　●彩光キャンプ ’99　●体育系学生の軽登山における水分摂取の効果　●キャンプ対象の拡大～幼児キャンプの実践～　●フィットネスキャンプを終えて　●痴呆性老人と自然を共有した「シニアキャンプ高知」の実践報告

■第4巻第2号（2001/2/28）
[実践報告] ●筑後川リバーサイドキャンプin 原鶴　●山田キャンプフェスティバル2000　●知的障害を持つ子供たちとの長期キャンプ　●「不登校児」自然生活体験キャンプin いけだ
[原著論文] ●「環境教育の学び」の評価方法に関する文献研究
■第5巻第1号（2001/6/30）
[実践報告] ●家族での乗馬体験プログラム　●幼児を対象にした野外教育の実践　●人間関係形成の場としてのキャンプ～「未来世代　やさしさ発見！びわこキャンプ」の実践から～　●第1回にいがた痴呆性老人キャンプin 長岡　●ニコニコキャンプ　●丹波自然塾－新しいコンセプトを持ったシルバーキャンプのこころみ－
[研究資料] ●野外活動における冒険プログラムの役割について

■第5巻第2号（2002/1/31）
[実践報告] ●アドベンチャーin 阿蘇キャンプ実践報告　●森林環境に働きかけるキャンプ　●大沢野町アドベンチャーキャンプ　●不登校キャンプの実践報告　●野外教育事業所ワンパク大学の幼児キャンプ　● “共育” 活動としての幼少児キャンプ　●知的障害児のための教育キャンプ　●埼玉YMCA　LD児等キャンプ～つばさグループキャンプ～
[研究資料] ●キャンプ用環境家計簿の提案とその効果

■第6巻第1号（2002/11/11）
[実践報告] ●体験活動における遊び非行型不登校中学生への援助　●ウマキャンプ－馬とのかかわりを通した教育的アプローチの検討－　●人と人 つなごう 手と手 心と心「 つくしの家キャンプin 鈴鹿峠自然の家」の実践から　●「からだほぐし」を通しての人とのかかわり 第1 回 ハッピウィリムン～ウィリアムズ音楽キャンプ～　●母親と乳幼児のためのキャンププログラム　●エコキャンプin 鷲敷キャンプ場　川内学童クラブ　鷲敷キャンプ場での試み

■第6巻第2号（2003/3/20）
[実践報告] ●海の自然体験活動としてのカヌープログラムの開発－港の中（閉鎖水域）におけるプログラムの一試み－　●カッパ体験キャンプ　●ユニバーサルキャンプ
[研究資料] ●海洋性キャンプ参加者の海浜活動体験とプログラム満足度

■第7巻第1号（2003/9/30）
[実践報告] ●痴呆性老人のキャンプ体験における自己表現に及ぼす効用　●親子いきいきリフレッシュキャンプ－事業中止から学ぶこと－　●登山プログラムにおけるスタッフのはたらきかけ－「大沢野町アドベンチャーキャンプ」の実践から－
[研究資料] ●キャンプ場のユニバーサルデザインについて ●キャンプ用環境家計簿の開発と効果

■第7巻第2号（2004/1/30）
[実践報告] ●阿蘇五岳制覇チャレンジキャンプ実践報告　●海の体験活動としてのヨットプログラムの開発－湾内（閉鎖水域）におけるプログラムの一試み－　●子どもと共に創るキャンプ（Ⅰ）－白川小学校・神辺小学校・三重大学による3校合同キャンプの実践から－　●子どもと共に創るキャンプ（Ⅱ）－白川小学校・三重大学による合同キャンプin 石水渓の実践から－
[研究資料] ●長期キャンプが参加者に及ぼす効果とその維持期間－わんぱくこども宿（10泊11日）に着目して－　●キャンプ環境報告書の提案　●海辺を活用した総合的学習における海のイメージの変容に関する研究－国立室戸少年自然の家主催事業「日本版School Water Wise」に着目して－　●キャンプ実習における状態不安に関する研究－係の役割に着目して－

■第8巻第1号（2004/9/30）
[実践報告] ●シニアと子どもの交流キャンプ　●楽しく、安全な登山をめざした中高年のキャンプ講座　●第5回痴呆性高齢者キャンプin ぐんま
[研究資料] ●自然体験活動を志す動機について ●アメリカにおける野外教育指導者養成カリキュラム－ Wilderness Education Association を事例として－

■第8巻第2号（2005/1/30）
[実践報告] ●野外活動チャレンジ村アドベンチャーキャンプ実践報告　●キャンプ経験が育成世代のサッカー選手のoff the pitch 行動に及ぼす影響
[原著論文] ●長期キャンプ参加者の日常生活が自主性の変容に及ぼす影響

■第9巻第1号（2005/9/30）
[実践報告] ●おひさまクラブ親子キャンプ実施報告　●子どもと共に創るキャンプ（Ⅲ）－白川小学校・三重大学合同キャンプの実践から－　●自閉症協会東京都支部おやじの会ファミリーキャンプ　●中高年スキーツアーと自然観察ツアー　●緑と林と防災の教室
[研究資料] ●キャンプリーダーのキャンプ用環境家計簿に対する意識調査報告　●冒険キャンプのふりかえり場面における参加者の心理状態がキャンプ効果に及ぼす影響
■第9巻第2号（2006/1/30）
[実践報告] ●岡山YMCA ファミリーキャンプの実践報告～信頼の上に成立するスモールコミュニティの拡充をめざして～　●ポーン太の森自然冒険塾「今、求められる新しい自然体験のスタイル」

■第10巻第1号（2006/5/20）　Camp Meeting in Japan 2006 －第10回日本キャンプ会議 特集号
[口頭発表] ●キャンプにおけるカウンセラーリポートの意義－小笠原自然ふれあい学校をふりかえって　●おさお冒険クラブの取り組みとキャンプの報告　●くろがね倶楽部キャンプ－野外活動を通してのコミュニティ　●ポーン太の森自然冒険塾　●日本型キャンプを探る（1）　●指定管理者導入に伴う野外施設運営のあり方について　●指導補助員からみた自然学校の実態　●リスクマップからみた安全意識の評価方法の検討　●郷土を知る自然体験活動の事例報告　●幼児キャンプ体験がその後に及ぼす影響　●自然体験がひとりっ子の成長に与える成果　●カウンセリング・キャンプにおける計画・実施のあり方における一考察　●ふりかえり活動を導入したASE が参加者の学習効果に及ぼす影響　●冒険キャンプにおけるふりかえり活動が参加者の学習効果に及ぼす影響　●シニア長期滞在型キャンプ「ふぉーゆー白馬」　●高齢者キャンプにおけるボランティアスタッフの期待と満足度　●ユニバーサルキャンプin むろと実践報告　●看護学校における保健体育の授業展開　●必修キャンプ実習が参加学生の気分に及ぼす影響　●授業として行う大学生のための海外アウトドア体験プログラム
[映像発表] ●教育キャンプ再考　●キープ森のようちえん実践報告
[ポスター発表] ●リスクに対する感覚を磨く指導者トレーニング　●福祉士養成教育における予備実習

としてのキャンプ実習　●野生の森ゆめキャンプ報告－ 4年間の実践と研究　●野外活動へのコミットメントを想定する要因について

■第10巻第2号（2006/9/30）
[実践報告] ●郷土を知る野外活動の実践報告－チャレンジ2702☆事業の試みから－　●ユニバーサルキャンプ2005 inむろと
[研究資料] ●「子どもと共に創るキャンプ」における学生の学び　●野外教育の実践・研究において答の出ていない問題

■第10巻第3号（2007/3/30）
[実践報告] ●聴覚障害大学生を対象にしたキャンプ実習に関する事例報告　●我が国初のWEA 野外教育指導者養成コースの実践報告　● Coalition for Education in the Outdoors Eighth Biennial Research Symposium 参加報告

■第11巻第1号（2007/5/19）　Camp Meeting in Japan 2007 －第11回日本キャンプ会議特集号
[口頭発表] ● 2007年は日本の組織キャンプ100周年か？　●日本の野外活動に対する中国天津市の大学生の理解程度と興味　●アフリカ熱帯雨林に住む狩猟採集民のキャンプ生活　●最近5年間における野外教育研究の傾向　● 2007ACA National Conference 参加報告　●日本キャンプ協会国際交流委員会の働き－ AOCF 創立－　● “WILDERNESS FIRST RESPONDER” 野外救急法資格取得コース　●組織キャンプ体験が子どもとその保護者へ及ぼす影響について　●看護専門学校の授業として行うキャンプにおける学生の学び　●デイ・キャンプで社会的スキルをより高めるには　●クラフト活動が参加者のふりかえり体験に及ぼす効果　●学校教育における宿泊型自然体験活動の取り組みについて　●大学野外活動のプログラムの質向上に寄与するキャンプ道具の使用について　●ユニバーサルキャンプ2006実施報告
[ポスター発表] ●少年期の組織キャンプにおけるSignificant Life Experiences が成人後の環境行動に及ぼす影響　●組織キャンプの魅力に関する研究～花山キャンプを事例として～　●中学校における教科と自然体験活動の関連について　●キャンプカウンセラーの成長に関する研究　●キャンプインストラクター養成カリキュラムの指導実習における受講者の心理的変化と自己評価　●サンフレッチェ広島ジュニアチームキャンプ～10年の軌跡～

■第11巻第2号（2007/9/30）
[実践報告] ●あさお冒険クラブの仲間つくりとエコ・キャンプをめざして－野外活動を通して気づくこと－
[研究資料] ●キャンプ活動が睡眠に及ぼす影響　●障害者キャンプにおけるバリアの研究－身体障害者模擬患者を通して－　●キャンプ実習における参加者の期待度・満足度に関する研究

■第11巻第3号（2008/1/30）
[特　　集] ●不揃いの麦から作るビールの味には深みがある
[実践報告] ●キャンプ参加者が自己実現をはかるためのスタッフの支援について－白山市アドベンチャーキャンプの実践から－
[研究資料] ●クラフト活動が参加者のふりかえり体験に及ぼす効果　●外国人チューターとのキャンプ経験がキャンプ参加者の意識や行動に与える影響
[報　　告] ●第11回日本キャンプ会議全体会報告～みんなでつくるあしたのキャンプ（キャンプ場編）～

■第12巻第1号（2008/5/24）　Camp Meeting in Japan 2008 －第12回日本キャンプ会議特集号
[口頭発表] ●指定管理者団体における野外活動事業の参加者状況　●民間野外教育活動団体におけるサービスマネジメン
トに関する将来予測研究　●キャンプ参加費に関する保護者の意識　●米国サマーキャンプの日課活動（実修）について
－メイン州、キャンプ・オーアトカの場合－　●知的障害児のキャンプ「ニコニコキャンプ」実践報告　●ガンバレ！ 能登 震災支援キャンプ報告　●冬の陣と雪の吟－「雪のスゴイ！ を体験しよう。冬の檜原湖キャンプ2008」　●ぱるぱるキッズ2007 実践報告　●日本の野外活動に対する中国の（小学－大学）男女学生の認知度　●「社会力」を育成する教育プログラムの開発－プロジェクトアドベンチャーの手法を応用して－　●連想法を用いたキャンプの効果測定の試み　●新入生オリエンテーションキャンプが大学生の仮想的有能感に及ぼす効果　●ファミリーを対象としたイベント型事業「あいちキャンプフ

ェスティバル」の実践報告－他団体との連携と運営のポイントに着目して－　●『若者自立支援事業「本当にやりたい! ことプロジェクト」実践報告』　●サントリー・神戸YMCA 共同プロジェクト－余島プロジェクト－　●「読書」による観想的キャンプ生活－中村春二口訳「方丈記」の野外教育的価値に注目して－
[ポスター発表] ●利用者アンケートにみる静岡県立朝霧野外活動センターの利用状況　●地域住民への自然体験活動の提供に向けた大学におけるシステムづくり　●自由回答からみる保護者のキャンプ参加費に対する意識　●日本のキャンプスタンダードの開発に向けて－キャンプが青少年の成長に及ぼす効果－　●日本のキャンプスタンダードの開発に向けて－プログラムと自然・生活環境に着目して－　●日本のキャンプスタンダードの開発に向けて－参加者と指導者に着目して－

■第12巻第2号（2008/9/30）
[実践報告] ●幼児キャンプの実践　●キャンプを通じた地域づくりの試み「あしがらシニアキャンプ」

■第12巻第3号（2009/1/31）
[実践報告] ●子どものキャンプ参加費用に対する保護者の意識－不満足評価の視点に着目して－
[報　　告] ●キャンプディレクター2 級指導者の実態・意識調査に関する報告　●第12 回日本キャンプ会議全体会報告～みんなでつくるあしたのキャンプ（指導者編）～

■第13巻第1号（2009/5/23）　Camp Meeting in Japan 2009 －第13回日本キャンプ会議特集号
[口頭発表] ●組織キャンプにおける儀式プログラムの意義と役割－米国キャンプ・オーアトカにおける騎士道プログラム－　●病気とたたかう子どもたちに夢のキャンプを～医療設備を備えた日本初のキャンプ場開設に向けた、そらぷちキッズキャンプの取り組み～　●休止スキー場を活用したキャンプの試み－白山市アドベンチャーキャンプの実践から－　●指定管理者団体における野外活動事業の申込状況の推移　●組織キャンプが参加者の環境リテラシーに及ぼす効果と要因の関連　●ロールレタリングを用いたスタッフトレーニングプログラムの開発　●中国における野外専門運動基地の現状～天津市山野運動基地～　●実地踏査等を重視し当事者意識を重視した養成プログラムで指導者になることの意義　●教員・保育者を目指す女子大学生を対象としたチャレンジキャンプの実践報告　●活動の質を高めるチャレンジとリラックスの落差の追求－日常生活に「持ち帰り･般化･敷衍･思い出し」可能なキャンプでの身体感覚・技法－　●冒険キャンプにおけるキャンプ場面でのふりかえり体験の調査　●長期キャンプ参加者と指導者の内面的成長について考える（1）　●体験がもたらす教育的効果　●幼児とその保護者における自然体験の現状～子どもの育つ環境による自然体験の違い～[ポスター発表] ●週末を活用した親子キャンプの試み～スケートキャンプの実践報告～　●「スノーシューを履いて雪の原野での自然観察会」実践報告　●静岡県立朝霧野外活動センター利用団体の教育的効果に関する調査－ 1年目結果報告－　● Means-End Analysis を用いたキャンプ効果の要因の検討　●子育て支援としての「ママチルキャンプ」8 年間の経緯と継続上の課題　●小学校長期自然体験活動の効果とその要因～鹿沼市自然体験交流センターを事例として～　●幼児キャンプにおけるイラストを用いた健康管理の試み
■第13巻第2号（2009/11/30）
[実践報告] ●「20/20 Vision」と「多様性への挑戦」～ 2009 年全米キャンプ会議に参加して～
[研究資料] ●教職を意識したキャンプ実習の一考察
[報　　告] ●第13回日本キャンプ会議全体会報告～みんなでつくるあしたのキャンプ（安全管理編）～

■第14巻第1号（2010/5/22）　Camp Meeting in Japan 2010 －第14回日本キャンプ会議特集号
[口頭発表] ●保育者養成を目的とした組織キャンプの実践とその試み　●ホリスティックな教育キャンプ実践報告　●G.N.C.A. スプリングキャンプ『ドリームキャンプ』報告　● JALT プログラム内容が参加者の自己概念変容に及ぼす影響　●キャンパーの志向によるキャンプの効果の表れ方の違い－つながり志向性・自然体験効果・感性の関係からの考察－　●発達段階に応じたキャンプ効果の比較～メタ分析を用いて～　●キャンプにおける場の力～ウィルダネス体験に着目して～　●日米交流サマーキャンプ20 年の歩み－その1　● WEA 2010 National Conference on Outdoor Leadership参加報告　●地域住民との協働によるフィールドづくりの試み－ツリーハウスづくりの取り組みから－なぜバックカントリースキーを求めるのか～バックカントリースキーへの移行に注目して～　●地域活性化に貢献するキャンププログラムに関する研究～コンジョイント分析の適用～　●知的障害高等養護学校における自然体験活動の実態について
[ポスター発表] ●「生きる力」を育む効果的な野外教育プログラムの検討～「アイガモを食べる」体験プログラムの効果測定～　●日米交流サマーキャンプ20 年の歩み－その2　●玉川大学教育学部野外教育演習開講の背景と学生の取り組み　●静岡県立朝霧野外活動センター利用団体の教育的効果～ 2

ヶ年調査結果の分析～　●ウェビング・テープを使ったチームビルディング「ラクーン・サークル」実践報告および体験　●ラボキャンプ2009 効果測定調査報告　●体験型親プログラムを取り入れた発達障害児キャンプの効果　●アメリカ・キャンプ協会100 年の歴史

■第14巻第2号（2011/1/30）
[実践報告] ●「ドリームキャンプ」実践報告　●水辺活動における指導者の「ヒヤリ・ハッと」調査～その後に生かせる対応策とは～　●公園での野外教育実践～プレーパーク活動を通して～　●大学と地域の連携による年間を通じた野外教育プログラムの展開
[研究資料] ●自然体験活動における子どもたちが求める理想の指導者　●キャンプ場の施設評価に関する研究～山梨県の市営キャンプ場を例として～
[原著論文] ●野外活動施設利用者の満足度と再利用意図に関する研究　●専門学校生対象のチームビルディングを目的としたキャンプ実習の効果　●キャンププログラムにおける火の使用体験と火への認識・自己成長性との関連に関する研究

■第15巻（2012/1/31）
[特　　集] ●子ども達の悲しみを支えるということ－グリーフキャンプの試みにむけて－　●東日本大震災の被災者を対象とするグリーフキャンプの取り組み
[実践報告] ●キャンプ指導者資格を取得した教員･保育者への意識調査の試み　●大学生の宿泊研修（野外活動）の現状と課題　●カンボジアにおける青少年教育とキャンプの現状　● Hole in the Wall Camps ～病児キャンプの世界的ネットワーク～

■第16巻（2013/3/10）
[研究論文] ●キャンプ参加児童に対する教育効果と保護者の認識・期待との関連性
[実践報告] ●被災地域の児童を対象としたキャンプ実践報告と今後の課題　●自然体験型健康増進プログラム「スマイル・ウォーク」の実践とその成果　●大学生の宿泊研修（野外活動）の現状と課題－第2報－

■第17巻（2014/3/10）
[研究論文] ●雪上キャンプにおけるイグルー内の環境に関する調査研究
[実践報告] ●南会津アドベンチャーキャンプの実践と地域連携の可能性　●父子キャンプ（パパチルキャンプ）の実践　●「災害に備える」野外力をきたえよう～アウトドア体験キャンプの実践報告と今後の課題

■第18巻（2015/2/15）
[研究論文] ●大切な人を亡くした子どものグリーフキャンプの実態とその効果に関する文献レビュー　●キャンプ体験が被災地児童のメンタルヘルスと生きる力に及ぼす影響　●ハンディ気象計による気象リスクマネジメントの可能性～トムラウシ山遭難事故(2009) 報告書より～　●民間野外教育事業者におけるヒヤリハットの分析
[実践報告] ● Frost Valley YMCA の価値教育　●自然体験がキャンプ指導者の野外指導スキルに及ぼす効果
[事業報告] ●グリーフキャンプ・フォーラム抄録「子どものグリーフサポート～地域社会の役割・キャンプの役割～」　●Camp Meeting in Japan 2014 ～第18回日本キャンプ会議～全体会報告　海外のキャンプ事情～日本の状況との比較から～

■第19巻（2016/2/15）
[研究論文] ●不登校中学生を対象とした継続型キャンプの効果に関する検討－社会教育施設と適応指導教室の連携事例－　●テーマパークでの修行体験を利用した体験教育の試み～Kidzania 就業体験と野外教育の場合～　●キャンプにおける安全教育が参加者の危険認知能力の向上に及ぼす効果に関する研究
[実践報告] ●民間野外教育事業者におけるスキーヒヤリハットの分析　●高校体育科キャンプ実習報告－スポーツ選手の基礎力を育むことを目指して－　●長期キャンプの意義を改めて考える－「チャレンジキャンプ2015~ リヤカーで小豆島一周110km の旅~」の事例から－　●くしろアウトドアキッズスクール2015 冒険の旅の実践　●キャンパス近くの自然を活かした活動及び重層的な指導システム

■第20巻（2017/2/15）
[実践報告] ●野外救急法を取り巻く最新の動向　●ろう児のキャンプにおける親プログラム実践の成果

と考察
[講 演 録] ●第6回アジア・オセアニア・キャンプ大会基調講演－ Organized Camping in Japan －
[特別寄稿] ●組織キャンプの先駆者小西孝彦が残したもの

■第21巻（2018/2/15）
[研究論文] ●キャンプ実習における大学生の資質能力の変容－ふきだし法による自由記述の分析を通して－ ●大学運動部に対する ASE プログラムが集団凝集性に及ぼす影響－新入生と在学生の比較から－
[報　　告] ●第 21 回日本キャンプミーティング講演会　自然と手を入れた自然（園芸）の中で～人を育てる野菜作り～
[特別寄稿] ●野外救急法を取り巻く最新の動向

◆ CAMP MEETING IN JAPAN（日本キャンプ会議）発表題目一覧

■第 1 回日本キャンプ会議（1997/5/24、国立オリンピック記念青少年総合センター）
[研究の部] ●グループ活動における心の安全について　●キャンプ指導者の状況認知に関する研究　●日本における療育キャンプの歴史　●キャンプ療法の確立にむけて　●雪中キャンプが及ぼす意識変化について　●ペグの打ち込み角と強度との関係について　●女子大生のキャンプ実習における血清脂質代謝変動について　●青少年の組織キャンプの運営におけるキャンプカウセラーの貢献度　●国立公園の意義とレンジャーの必要性　●組織キャンプにおける選択プログラムの在り方について
[報告の部] ●自然環境下の保養体験による心理的･生理的変化　●冬のサバイバルキャンプを通して　●「であい・ふれあい・かよいあい」の福祉の町で野外活動における障害者とともに歩む　●ぜん息児のサマーキャンプにおける運動適正テスト　●痴呆性老人と行うシニアキャンプ　●自閉症の人たちがキャンプを楽しむために　●「O-157」が青少年施設に与えた影響　●盛岡大学におけるネイチャーゲーム実践報告　●（神戸－東京）中学生・高校生ふれあいキャンプ　●静岡県キャンプカウンセラー協会の活動について

■第 2 回日本キャンプ会議（1998/5/23、国立オリンピック記念青少年総合センター）
[基調講演] ●全日本学生キャンプの草創
[研究の部] ●野外炊さんの薪（マキ）の代替燃料に関する研究　●青年期の学校キャンププログラムに関する一考察　●参加児童・生徒による冬季キャンプの評価　●障害児における雪上での感覚統合トレーニングキャンプ　●喘息児キャンプにおける腹式呼吸を応用した室内ゲームの実践　●グループを理解する～喘息児キャンプにおけるＡ子を通じて　●キャンプの評価～キャンパーが意識するキャンプの効果を中心として　●高齢者キャンプの効果について考える～血圧および血液循環動態に及ぼす影響　●組織キャンプにおける選択プログラムのあり方について（2）
[報告の部] ● ACA アメリカキャンプ協会総会報告　● OBS 冒険を通しての体験学習　●こども糖尿病キャンプの現状と課題　●フロンティアアドベンチャー事業のその後（1）　●フロンティアアドベンチャー事業のその後（2）　●自然生活体験キャンプ実践報告　●青少年のボランティア体験としての福祉キャンプ　●野外活動指導者その専門家としての条件～横浜市野外活動指導者養成講座ジェネラルディレクターの立場から

■第 3 回日本キャンプ会議（1999/5/22、国立オリンピック記念青少年総合センター）
●台湾における童軍（ボーイスカウト）教育に関する研究　● ACA 公認滞在型キャンプの分析　●火打ち金による火付け法　●キャンプにおける薪への着火についての実験的研究　●自然教室における火起こしプログラムの理科実験的展開　●星美ホームに於ける野外活動の可能性～日本横断徒歩旅行を通じて～　●知的障害者社会就労センターのキャンプの実践　●障害者キャンプの実際～木の実の森の実践～　●知的障害者におけるキャンプファイアーの検討　●障害児における氷上での感覚統合トレーニングキャンプ　●進学塾における野外教育への取り組み　●市立キャンプ場・キャンプカウンセラー卒業生の活動について　● 1 ヶ月の長期自然体験キャンプ「心のふるさと村」報告　●生きる力を育む自然教育けやの森学園スノーキャンプ実践報告　●キャンプと NPO　●日本キャンプ協会の誕生　●高齢者キャンプの効果について考える（Ⅱ）～ 5 泊 6 日のキャンプ生活における血圧、加速度脈波の変化～　●思春期の女子キャンパーを理解する～性に対する関心を中心に～　●野外活動の指導におけるアポトーシス～活動の目的化をめざして～　●キャンププログラムにおける軽登山中の水分摂取に関する研究～体育系学生のキャンプ実習～

■第 4 回日本キャンプ会議（2000/10/2～5、国立オリンピック記念青少年総合センター）
※第 4 回日本キャンプ会議は第 5 回国際キャンプ会議と合同で行われたため、発表抄録集は別冊となっています。

■第 5 回日本キャンプ会議（2001/5/19、国立オリンピック記念青少年総合センター）
●幼児対象野外教育の実践報告　●自然からの自己発見～共に創りあげる～　●キャンプカウンセリングの体系化の試み　●長期キャンプにおける子どもの自主性の発達とその原因　●知的障害児のソリ遊びキャンプ　●障害児キャンプの企画と運営－ YMCA プロジェクト･SEED のケース－　●障害者キャンプを支えるボランティアのシステム～キャンピズの会員制度を中心に～　●キャンプ･インストラクター課程認定校における認定プログラムの実践報告　●登山用ストック使用の有無が登山者に与える影響　●白馬シニアキャンプ協会設立レポート　●子どもの生活自立の「もと」を引き出す野外体験　●サイエンスキャンプ　●キャンプと音楽　●生ゴミサイロを利用した環境教育

■第 6 回日本キャンプ会議（2002/5/18、国立オリンピック記念青少年総合センター）
●自然との接点への実践例としての提案　●新しいキャンプへの取り組みーハイテクキャンプと竹をテーマとした参加体験キャンプ　●夏季ゼミキャンプにおける他者観察の変動　●戦前の社会事業におけるキャンプ活動　●キャンプでする大学入試　●山梨大学における学生主体型キャンプの実践報告ーアウトドアパスーツの授業において　●丹波自然塾のあゆみ　●乳幼児と母親のためのキャンププログラム　●キャンプで気づく便利さについて　●課程認定校におけるキャンプ・インストラクター資格継続への試み　●児童・生徒におけるバックパッキングプログラムの実践報告　●知的障害児のための教育キャンプの実践　●知的障害ボーイスカウト・ローバー隊の北海道遠征　●キャンプと音楽療法

■第 7 回日本キャンプ会議（2003/5/17、国立オリンピック記念青少年総合センター）
●組織キャンプにおいてグループリーダーの書く記録　●精神障害者側の立場から見たキャンプの必要性　●不整地サイトにおける車椅子体験キャンプの実践　●キャンプにおける参加者の「ソーシャルスキル」の変化について　● English Immersion Camp における子どもたちの変化と成長　●ハワイ・カウアイ島アドベンチャーキャンプ 2003　●長期キャンプ“わんぱく子ども宿（10 泊 11 日）” の効果　●兵庫県自然学校指導補助員に関する調査　●キャンプ・インストラクター取得者の活動への取り組み　●親子参加型自然学校に関する調査　●キャンプと音楽療法 2　●多摩川を題材とした環境教育的プログラムの提案　●馬との関わりが対人関係に及ぼす効果　●体験学習としてのキャンプ　●キャンプにおける女子高校生の自己概念の変容課程　●登山下山の不安と疲労に関する研究　●空気圧縮式発火具をつくる　●キャンプに「軍手」は万能でない　●焚き火のイメージに関する研究

■第 8 回日本キャンプ会議（2004/5/15、国立オリンピック記念青少年総合センター）
●自然体験活動指導者の動機に関する研究　●幼少年期の自然や人の関わりと自然体験活動への興味の関連について　●キャンプ中の感情の変化について　●子どもを主体にした新しいキャンプ　●沖縄わんぴーすキャンプ　●学校へのキャンプの誘い　●「自然体験冬の陣」を通してのスタッフの学び　●大学生を集める CAMP　●組織キャンプと社会福祉　●キャンプインフォメーションセンター相談記録より　● Leave No Trace アメリカの野外教育指導者養成における実践　●アメリカにおける野外教育指導者カリキュラム相談記録より　●幼児のための雪上野外活動　●第 27 回ウィンタースクール実践報告

■Camp Meeting in Japan 2005　－第 9 回日本キャンプ会議（2005/5/15、国立オリンピック記念青少年総合センター）
●野外教育指導者養成キャンプの実践報告　●大学カリキュラムにおける野外教育プログラム　●子どものための週末キャンプ　●授業として試みたアラスカ犬ぞり体験プログラム　●野外活動チャレンジ村アドベンチャーキャンプ実践報告●第 12 回わいわいチャレンジキャンプ実践報告　● 2004 夏の体験学習　夏! 君の勇気にか・ん・ぱ・い　●母親グループが運営する自閉症児の雪上キャンプ　●野外教育セミナーin ニューヨーク報告　●ACA National Conference 参加報告　●国際自然大学校日野春校の取り組み　●自然体験活動冬の陣イグルー完成（映像発表）　●雪上キャンプでの敷物の断熱効果実験　●キャンパーが影響を受けた活動について　●野外トイレの研究　●自然学校が与えた影響について　●山村留学における相談員の業務　●キャンプにおける呼称についての研究　●自然体験活動におけるボランティア指導者の意識に関する研究　●災害と野外活動（私の体験）　● OBS プログラム継続参加者のセルフエフィカシーの変容　●ふりかえりがキャンプの効果に及ぼす影響　●異文化交流キャンプが参加者の国民性理解に及ぼす影響　●アジアキャンプ連盟（ACF）の創立
■第 15 回 Camp Meeting in Japan 2011（2011/9/22～25、静岡県立朝霧野外活動センター）
※第 15 回日本キャンプ会議は日本キャンプ協会設立 45 周年記念 第 20 回全国キャンプ大会 CAMP FESTA 富士・朝霧と合同で行われたため、発表抄録集は別冊となっています。
■Camp Meeting in Japan 2012　－第 16 回日本キャンプ会議（2012/5/26、国立オリンピック記念青少年総合センター）
[特別講演] ●「グリーフ（ワーク）×キャンプ」にできること
[口頭発表] ●防災教育に必要とされるキャンプ技術～石巻での 21 日間の支援から～　●「～のんびり遊ぼう～ニコニコキャンプ!!」リフレッシュキャンプの実践報告　●「福島の子供たちとその家族に笑顔を」～アカデミーキャンプの実践報告～　● YMCA フレンドシップキャンプ一子どもらしく過ごせる時間を取り戻す　●県外避難者の子どものケアと
キャンプ　●三鷹子どもの楽校　福島の子どもたちと森の楽校サマーキャンプ～「つくる」を遊ぶ夏季学校～　●リフレッシュ・キャンプ参加者の実態調査－その 1　●レスキューザックの開発と効果　● Experiential Education Evaluation Form:3E フォームの開発　● Experiential Education Evaluation Form:3E フォームのデモンストレーション　●キャンプ指導者養成におけるスキル習得

に関する考察　●沖縄の無人島キャンプにおける自己・他者肯定感の変容　●年間利用者 8,000 人超の「立少トントンたんけん隊」の実態と今後の展望　●地域と学校の有機的連携を促す自然体験活動に関する研究～広島県廿日市市の事例から～その１　●キャンプ体験が教職志望学生の自然体験活動の指導力に及ぼす影響―その１　●大学生の宿泊研修（野外活動）の現状と課題（第２報）
[ポスター発表] ●静岡県立朝霧野外活動センター利用団体の教育的効果(3) － 4 ヶ年調査結果の分析－　●東日本大震災被災地でのグリーフキャンプの実施報告「岩手しぜんとあそぼキャンプ in テンパーク」の取り組み　●地域と学校の有機的連携を促す自然体験活動に関する研究～広島県廿日市市の事例から～その２　●キャンプ体験が教職志望学生の自然体験活動の指導力に及ぼす影響―その２　●リフレッシュ・キャンプ参加者の実態調査―その２

■Camp Meeting in Japan 2013　－第 17 回日本キャンプ会議（2013/5/25、国立オリンピック記念青少年総合センター）
[口頭発表] ●社員教育研修としての野外活動プログラムの可能性－ Outdoor Training Program を導入した TS Camp －　●参加目的に着目した組織キャンプ参加者の特徴－白山市アドベンチャーキャンプの実践から－　●多文化での野外教育
プログラムから考えたこと　●冒険的自然体験キャンプ「私たちの 4 日間」　●幼稚園・保育園との連携～あかぎの森のようちえん実践報告～　●岡山県の中山間地域における自然体験活動の実践報告　●グリーフケアキャンプに参加して～被災地の子どもたちとともに～　●被災地域の児童を対象としたキャンプ実践報告と今後の課題　●静岡県における不登校キャンプの取り組みについて　●国立青少年教育施設の取り組み－新しい公共型運営について－国立赤城青少年交流の家の取り組みから－　●自然体験活動におけるマダニ対策について考える～広島県での取り組み(報告)～
[ワークショップ発表] ●ウィルダネス教育協会指導者資格認定コースの報告と今後の展望　●キャンプで使える「手話」表現

■Camp Meeting in Japan 2014　－第 18 回日本キャンプ会議（2014/5/24、国立オリンピック記念青少年総合センター）
[口頭発表] ● LEAVE NO TRACE の日本での必要性と普及について　●環境ボランティアリーダー海外研修（ドイツ）報告　●組織キャンプにおける Leave No Trace プログラムが参加者の環境に対する態度に及ぼす効果　●東京 YWCA 森林ワークキャンプ～プロに学ぶ森づくり体験～　●ウィルダネス教育におけるウィルダネスの場についての検討～わが国での実践にあたって～　●国際ワークキャンプ参加報告と参加動機に関する調査　●キャンプカウンセラーのユーモア表出が参加者の集団雰囲気に及ぼす効果　●大学野外実習が体力・メンタルに及ぼす効果に関する研究　●キャンプの力はこんなところにも！～ストレス耐性を高める効果～　● ICU ジュニアキャンパス・キャンプ～大学施設を使った大学らしい子どもキャンプの実践～　●関東甲信越地区青少年施設協議会青年部会の取り組み～アメージングガイドができるまで～　●災害時対策教育プログラムの実践について
[ポスター発表] ●キャンプの国際比較 その１「日本型キャンプ」をさぐる 1-2 日本のキャンプスタイル　●岡山県 A 大学におけるキャンプインストラクター養成実習の現状と改善策　●地域のチカラを活かしたコラボレーション～通年型農業キャンプ 風っ子ファームの取り組み～　●南会津アドベンチャーキャンプの事業評価と地域連携　●青少年の体験活動等に関する実態調査（平成 24 年度調査）の報告
[あれこれ発表] ●『ハンディ気象観測ツール』によるアウトドアリスクマネジメント　●アメリカ組織キャンプからの学び　●続・キャンプで使える「手話」表現～目で見てわかるコミュニケーション～　● One Minute Camp Evaluation Experiential Education Evaluation Form 改訂版の体験
[全体会] ●海外のキャンプ事情～日本の状況との比較から～

■Camp Meeting in Japan 2015　－第 19 回日本キャンプ会議（2015/5/30、国立オリンピック記念青少年総合センター）
[口頭発表] ●わが国におけるアウトワード・バウンドを基礎とした冒険教育の動向についての一考察～文献による調査を通して～　● Day Camp の可能性～１日の中で子どもたちに主体をあずける～　●米国キャンプ・オーアトカ（Camp O-AT-KA）における日課プログラムの意義－余暇教育としてのキャンプ・プログラム－　●北海道教育大学岩見沢校における指導者養成　●キャンプが児童のアサーション行動に及ぼす影響　●登山におけるストレスコーピングに関する研究　●スポーツチームに対する ASE プログラム導入が集団凝集性に及ぼす影響-チーム所属年数に着目して-　●ＷＥＡ野外指導者養成コースにおける野外指導スキルの発達　●災害ボランティアとキャンプ　●民間野外教育事業者におけるヒヤリハットの分析　●スキーキャンプのヒヤリハット　●キャンプにおける安全教育が参加者の危険認知能力の向上に及ぼす影響　●大学の授業としての、場に注目したカナダ厳寒期の多国籍遠征

●あかぎワールドコミュニティ～余暇教育としてのキャンププログラム～　●自然体験で地域づくりまえばし・マイはし・プロジェクト　●「海ガキ・山ガキになろう！2014 夏」実践報告
[ポスター発表] ●公園における親子を対象とした自然体験活動プログラムの可能性　●キャンプ体験が参加児童の道徳性に及ぼす影響　●静岡県立朝霧野外活動センターの利用状況の推移とアンケートから施設の可能性と課題を探る　● Café de CAMP の作り方－参加者とつくる空間－
[あれこれ発表] ●続々・キャンプで使える「手話」表現～目で見てわかるコミュニケーション～　●工作体験（お箸づくり）を通じての安全で正しいナイフの使い方－ビクトリノックス工作イベントサポートプログラム－　●ハンディ気象観測ツールによるアウトドアリスクマネジメント(実践編)
[全体会] 子どもシンポジウム　●ろう（聾）の子どものためのキャンプ～デフキッズキャンプ～　●被災地域の子どものためのキャンプ－南会津アドベンチャーキャンプ－

■Camp Meeting in Japan 2016 －第 20 回日本キャンプミーティング（2016/6/4、国立オリンピック記念青少年総合センター）
[ポスター発表](研究発表）●国立青少年教育施設における冒険教育プログラムの取組 ―ジュニアチャレンジ淡路島一周―　●キャンプ体験が小中学生のアサーティブに及ぼす影響　●大学キャンプ実習におけるストレッサーとストレスコーピングに関する研究　●体育授業における ASE の効果について　●森のようちえん活動が幼児の運動能力に及ぼす影響　（実践発表）●わが国におけるリーブ・ノー・トレイスのこれまでの取り組みと今後の展望について　●知的障がい者に対する日常生活に変化を作り出す地域生活支援―ユニバーサルキャンプを通して―　●チャレンジキャンプ 2015～リヤカーで小豆島一周 110 ㎞の旅～　●千葉市少年自然の家主催事業「セブンデイズキャンプ」の実践報告　●オフザピッチトレーニングとしての雪上野外研修プログラムの実践　●保育内容研究と自然・生活・あそび　●大学授業での長期バックカントリーキャンプ　●ろう・難聴の子どもキャンプに参加した聞こえるスタッフのふりかえり～デフキッズキャンプの実践から～　●町田ゼルビアにおける自然体験活動の実践報告　●２０１５年多摩の自然学校　●無人島キャンプの実践　●米国大陸横断体験記
[ワークショップ発表] ●キャンプで美味しい！コーヒーの入れ方教室　●フィールドワーカーのための危険生物“ハチ”“ヘビ”対策セミナー＆交流会　●私たちはリスクに対する説明責任をどう果たすのか How do we achieve accountability for risk?　●環境教育プログラム「プロジェクト・ワイルド」を体験してみよう
[講演会]つながりを生み出すインプロ(即興演劇) (講師：高尾 隆 氏)

■Camp Meeting in Japan 2017 －第 21 回日本キャンプミーティング（2017/6/10、国立オリンピック記念青少年総合センター）
[ポスター発表] (研究発表) ●キャンプにおけるボランティアマネジメントの日本と海外の比較調査　●キャンプにおけるふきだし法の有効性について　●大正時代から昭和時代戦前期における社会事業の組織キャンプ　●スペシャルニーズキャンプへのボランティア参加による知的障がい者に対する態度変容　●スペシャルニーズキャンプの学生ボランティアにおける自己効力感の変化　●わが国の冒険教育の動向から探る現代的課題について　（実践発表）●キャンプにおけるバーベキュー食材の新たな有効性　●森の幼稚園など自然保育にキャンプの知識と技術をどのように活用するか　●少年サッカーチームを対象とした継続型キャンプの実践事例　●第 6 回アジア・オセアニア・キャンプ大会(AOCC2016) 報告　●大学間交流スキーキャンプの取り組み　（団体紹介）●スペシャルニーズ・キャンプ・ネットワーク　●「出会いと体験の森へ」実行委員会　●北海道キャンプ協会若手指導者団体「えぞっぷ」
[ワークショップ発表] ●組織キャンプにおけるチャイルド・プロテクションについて　● YMCA 三浦ふれあいの村防災ウォークラリーの取り組み　●ハチ・ヘビ・マダニ・ヤマビル・毛虫 etc…危険生物を楽しく学ぶ 野外教育者のための危険生物クイズ大会！　●キャンプでのクラフト　●「違いを祝福し、違いを喜ぶ。」キャンプロイヤル体験報告　●「アイスブレイク十人十色　～みんなの十八番、大交換会！～」
[講演会] 自然と手を入れた自然(園芸)の中で～人を育てる野菜作り～ (講師：藤田 智 氏)

■Camp Meeting in Japan 2018 －第 22 回日本キャンプミーティング（2018/6/9、国立オリンピック記念青少年総合センター）
[ポスター発表] (研究発表) ●アウトドアリーダーシップに関する文献研究　●危険な動植物の識別に関する研究　●大正時代から昭和時代戦前期における社会事業の組織キャンプ(第 2 報)　●青少年教育施設における指定管理者制度導入の状況と課題　●参加児童生徒のもつ組織キャンプ経験の自伝的記憶　（実践発表）●森の幼稚園など自然保育における野外活動の知識と技術の実践　●こども英語教室ラボ・パーティファミリーキャンプ実践報告　●キャンプファイヤーにおける民俗芸能のレクリエーシ

ョンとしての活用　●キャンプ指導者向けのスノーキャンプ・スキーイベントに関する研修事業の試み ●第 11 回国際キャンプ会議 Sochi・Russia と ICF の活動の報告　●西表島 LNT プロジェクト　（都道府県キャンプ協会取り組み紹介）●Enjoy Camping！キャンプを楽しむたっぷり学ぶ(東京都)　●静岡県キャンプ協会(静岡県)　●持続可能な協会運営の知恵と工夫愛知県キャンプ協会のとりくみ(愛知県)　●近畿ブロックにおけるビジョン 2020 の実施状況(近畿ブロック)　●広島県キャンプ協会の取り組み(広島県)　（団体・活動紹介等）●スペシャルニーズ・キャンプ・ネットワーク　●北海道キャンプ協会若手指導者団体「えぞっぷ」
[ワークショップ発表] ●目からウロコの SAM スプリント固定法　●誰でも手軽に自然体験活動が指導できるアウトドアゲーム　●「アイオレシート」の紹介　●企画博覧会『ヒアリとその他の危険生物展』＆危険生物お悩み相談会　●アウトドアメーカーが直接紹介する最新キャンプグッズ(提供：ロゴスコーポレーション)
[講演会] うんこはごちそう～人と自然の共生は野糞から～(講師：伊沢 正名 氏)

※ Camp Meeting in Japan 2006 －第 10 回日本キャンプ会議から Camp Meeting in Japan 2010 －第 14 回日本キャンプ会議までの発表抄録集は『キャンプ研究』（毎巻第 1 号）として編集されています。
※『キャンプ研究』および『日本キャンプ会議抄録集』は有料で頒布しております。ご希望の方は、日本キャンプ協会事務局までご連絡ください。
・『キャンプ研究』　各（本体価格 1,000 円＋税）送料別
・『日本キャンプ会議抄録集』　各（本体価格 1,000 円＋税）送料別
なお、以下の号は完売しました。
・『キャンプ研究』第 2 巻、第 4 巻第 1 号、第 12 巻第 3 号
・『日本キャンプ会議抄録集』第 1 回～第 5 回

編集後記

キャンプがその効果や力をいかんなく発揮していくためには、キャンプの実践と、キャンプの持つ力についての研究、この２つが車の両輪のように互に上手く影響し合うことが必要です。今回の「キャンプ研究」に寄せられた投稿は、研究論文２点、実践報告７点、の計９点となっており、例年になく、様々な深度、角度からキャンプについて考えるきっかけを与えてくれるものとなっております。

研究論文には、指導者の質にかかわる研究や、大学生の不登校問題とキャンプの効果について着目した研究が掲載されています。キャンプそのものの力について語るときに欠かせない背景となる内容であることはもちろんですが、そのキャンプの指導者を育成し、キャンプを通じた人育てを自認する私たちにとっては、とりわけ興味深い研究論文となっています。

また、実践報告については、国内外での実際のキャンプの事例が集まるとともに、キャンプや野外体験活動を支える人や安全、プログラム、環境について焦点を当てた実践例や事例の報告が掲載されています。キャンプは労働集約的な側面があり、忙しい大学生、若手不足などの問題にも今後対処していかなければなりません。その１つのヒントになるのが、北海道キャンプ協会や大学間交流スキーキャンプの事例ではないでしょうか。そして、なかなか集約的な情報が少ない傷病の事例、そして既存のプログラムの価値の再発見や再検証、そして新しいキーワードを活用したプログラム、そして海外でのキャンプの事例はそれぞれ明日のキャンプの無限の可能性について、大きな示唆を与えてくれます。

今号も、充実した「キャンプ研究」を発行することができました。今後も、キャンプにまつわる、あらゆる情報が集まり、蓄積され、交換され、キャンプが社会に対してよい影響を与えられる一助となっていきたいと思います。

キャンプ研究

第 22 巻　2019 年 2 月 15 日発行

編集発行者　公益社団法人日本キャンプ協会　キャンプ研究編集事務局
発　行　所　公益社団法人日本キャンプ協会
National Camping Association of Japan
〒151-0052　東京都渋谷区代々木神園町 3-1
国立オリンピック記念青少年総合センター内
TEL　03-3469-0217　　FAX　03-3469-0504
E-mail　ncaj@camping.or.jp

© 公益社団法人日本キャンプ協会
写真、論文、資料のコピー、複製・転載を希望される場合は、ご連絡ください。

NCAJ
National Camping Association of Japan

キャンプ研究

第 22 巻　2019 年 2 月発行

ISBN974-4-904008-14-0
C9045 ￥1000E

9784904008140

1929075010006

研究論文

危険な動植物の識別に関する研究
甲斐知彦・畠中彬

大学生を対象とした短期野外教育プログラムの教育効果に関する研究
ー大学生不登校問題に着目してー
川畑和也・築山泰典・福満博隆・橋本和俊

実践報告

組織キャンプのプログラムと教育効果
ー南会津チャレンジキャンプの実践を事例としてー
坂谷充・渡邉仁・福富優・佐藤冬果

中華人民共和国の小学生を対象とした自然科学学習プログラムデザインの検討
西海太介・白濱真友

北海道キャンプ協会が取り組む次世代へのバトンリレー
ー次世代野外教育指導者団体「えぞっぷ」ー
徳田真彦・山田憲克・木田貴浩・竹内健人・中村隆・長江孝・長江集子・村上彩奈・山田啓貴

野外教育分野を学ぶ学生ネットワークが果たす新たな「学びの場」としての機能
ー「大学間交流スキーキャンプ」の活動報告ー
徳田真彦・佐藤冬果

子どもの野外体験活動を促進する「鬼ごっこ遊び」の実践とその成果
谷正之

青少年教育施設で発生した冬期の傷病に関する調査報告
青木康太朗

Leave No Trace を意識した、キャンプにおける食器洗いの実践
寺田達也

資料

「キャンプ研究」投稿規程
「キャンプ研究」収録題目一覧
「日本キャンプミーティング」発表題目一覧

NCAJ
National Camping Association of Japan

定価 (本体価格 1,000 円＋税)